研　究　紀　要

第 7 号

1990

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　次

デポの意義 ……栗島　義明(1)
—縄文時代草創期の石器交換をめぐる遺跡連鎖—

立野式土器についての一考察 ……中島　宏(45)

東国における後期古墳……山本　禎(67)
—凝灰岩を石室構築材とした横穴式石室—

中田以前の土師器研究……大屋　道則(93)
—編年研究の原則と分類方法の変遷—

瓦塔瞥見 ……高崎　光司(209)

古代～中近世の井戸跡について(1) ……鈴木　孝之(217)
—埼玉県における形態分類を中心として—

北武蔵における古瓦の基礎的研究IV ……昼間孝志・宮　昌之(273)
木戸春夫・高崎光司
赤熊浩一

中田以前の土師器研究

～　編年研究の原則と分類視点の変遷　～

大　屋　道　則

序 ……94
第１章　土師器編年研究の端緒：１９２０年代以前 ……95
　１節　土師器研究の端緒 ……95
　２節　発掘資料の解釈 ……96
　３節　小結 ……99
第２章　山内清男氏による基本的原則の提示：１９３０年代 ……100
　１節　分類の方法 ……100
　２節　山内清男氏の分類 ……101
　３節　奥田直栄氏の分類 ……106
　４節　「東京市西部に於ける古墳時代末期集落の規模」の意義 ……110
　５節　小結 ……113
第３章　杉原荘介氏による諸型式の設定：１９３０年代後半～４０年代前半 ……121
　１節　杉原荘介氏の端緒的操作が内包する諸問題 ……121
　２節　須和田遺跡と杉原荘介氏の方法 ……122
　３節　鬼高式の設定（古墳時代＝鬼高式＝祝部第一類） ……127
　４節　祝部出現以前の土師器の認識 ……129
　５節　杉原荘介氏の土師器編年の変遷 ……132
　６節　杉原荘介氏による先験的伝播論の否定と播布性概念の提出 ……134
　７節　小結 ……141
第４章　萩原弘道氏による型式内容の検討：１９５０年代前半 ……150
　１節　形態の連続的変遷に関する視点の再生 ……150
　２節　萩原弘道氏による従来編年への懐疑 ……150
　３節　萩原弘道氏による形態変化の把握 ……152
　４節　矢倉台式の提唱 ……154
　５節　小結 ……157
第５章　中山淳子氏による型式概念の検討：１９５０年代後半 ……160
　１節　中山淳子氏の矢倉台式に対する反論 ……160
　２節　型式内容提示とこの中での形態毎の変遷観 ……161
　３節　萩原氏の再論 ……163
　４節　土師器の編年案と中山氏の反論 ……167
　５節　小結 ……169
第６章　岩崎卓也氏による研究史：１９６０年前半 ……171
　１節　研究史と概念規定論の成立の意味 ……171
　２節　「土師器研究上の諸問題」について ……171
　３節　「東日本における土師器の研究」について ……177
　４節　小結 ……184
第７章　近年発表された研究史の記述について ……186
　１節　岡田淳子氏による杉原氏土師器研究の評価 ……186
　２節　勅使河原彰氏の土師器研究史への理解 ……188
　３節　小結 ……190
結語 ……192
謝辞 ……200
図表出典一覧 ……201
付記 ……201
参考引用文献 ……202
追記 ……206
付録　研究年表 ……207

序

関東に於ける今日の土師器（その中でも古墳時代後期）の編年研究は、戦間期に基礎的な方法と資料の提示が行われ、1950年代に型式内容の検討が為され、1960年代に集大成された成果をその骨格として成立している。或は、30年代は山内清男氏を中心とする人々によって基礎的な方法の提示が為され、杉原荘介氏を中心とする人々によって標準としての資料の提示が為された時代であり、50年代は萩原弘道氏等によって細分が為され、杉原氏の教えを受けた人々が杉原氏になり変わって型式内容の主張を行った時代であり、60年代はこれらの総括が行われた時代であるとも言えよう。

従来、ともすれば杉原氏の業績のみが広く顕彰される傾向にあった土師器編年研究史に於て、一方では編年研究黎明期に山内氏や奥田直栄氏等によって提示された方法論的業績が無視され、50年代の細別の嚆矢とも言える萩原氏の視点は等閑に付されている。

本稿では、土師器編年研究史の叙述の中で今日まで取り上げられる機会の少なかったこれらの研究を明確化すると共に、ここに視点を置く事によって逆にそこから杉原氏等の研究、ひいては土師器編年研究史をとらえ返し、以て現在の土師器研究が内包する諸問題の幾つかについて考えて見ようとするものである。但し、土師器全般の研究史について取り扱うのではなく、鬼高式を中心として適宜必要な事について検討した。

尚、筆者は研究史の記述に際して以下の７項目を研究の流れの中での主要な傾向と考え、各々の年代的画期を想定してみた。

①研究の端緒・・・・・・・・・・・・・・1930年代以前
②基礎的な原則・方法の提示・・・・・・1930年代
③諸型式の設定・・・・・・・・・・・・・1930年代後半～40年代前半
④型式内容の検討・・・・・・・・・・・・1950年代前半
⑤型式概念の検討・・・・・・・・・・・・1950年代後半
⑥研究史の記述・・・・・・・・・・・・・1960年代前半
⑦暫定的な総括・・・・・・・・・・・・・1960年代後半

この中で①の研究の端緒についてはこれに該当する多くの論考をあげる事が出来ようが、取りあえず分布論と型式論を中心とした考古学的な方法に即して対象を取り扱ったもの、若しくはこれと直接的な影響関係にあるものの幾つかを取り上げるに止めた。1970年代以降の研究の位置付けについては、まさに現在の自身が置かれている環境であり相対化を行う事が容易ではないと共に、1960年代の研究をふまえた上での論理的な位置付けと、それに則った自身の具体的な研究を提示せずして語る事は意味を持たないと考えられる。従って、その部分については後の課題としたい。1960年代の後半に位置付けられる中田遺跡の報告についても研究史的には大きな画期となるものであるが、この意義も別稿で検討したい。本稿の対象とするものは、主に戦間期から1950年代までの土師器編年研究である。以下では、研究史を検討する中から土師器編年研究の原則とはどの様なものであるか、又、それが何時どの様な形で提示され、どの様に変節して来たのかを明らかにして行き、現行の土師器編年研究に対する批判の前提作業としたい。

第１章　土師器編年研究の端緒：１９２０年代以前

１節　土師器研究の端緒

いち早く考古学的な方法を用いて分析が為された古墳出土遺物の研究は、有職故実、或いは古器名に関わる研究と、非常に対称的であった。

土師器が他の土器から差異化されて独自のものとして認識され始めた時点での研究は、多分に有職故実を中心とするものであって、今日的な意味での分布論や型式論的検討を主体とする編年研究が当初から行われていた訳ではない。土師器自体を対象とする編年研究が行われる様になったのは、土師器が他の土器から差異化されて以降幾時かを経た後であり、考古学的な正規の方法で取り扱いが為される様になったのは更に後の事である。

研究史の冒頭で展開されるこの様な研究については多くの文献で触れられており（注１）、又、考古学的な手法による編年研究とも直接的な関り合いが少ないので、ここでは主題的に取り上げないで瞥見するにとどめておく。本稿で取り扱うのはこの様な研究に換わり、考古学的な操作を中心とした研究によって対象の分析が行われ始めた頃からである（注２）。

但し、土師器そのものの研究ではないが、古墳或いは古墳出土遺物の研究を通じて言及された事の中には、当時の土師器の研究とは対称的に考古学的な方法に基づいて行われ、土師器研究に重大な示唆を与える内容のものも少なくなかった。しかしこれらのものが、土師器研究へと直接的につながって行く事はなかった。この様な土師器自体の編年研究に先行した古墳研究、或いは古墳出土遺物研究が持っている土師器研究との対称性について、一例をあげて見てみる事にしよう。

喜田貞吉氏と高橋健自氏の間で行われた竪穴式石室と横穴式石室との新旧関係に関わる論争に象徴される様に、古墳の編年研究は明治期からある程度活発に行われていた。そして古墳研究の中では当然ながら古墳自体の属性にとどまらず、古墳出土の遺物についても積極的に検討の対象とされて行ったのである。この様な中で、相対的に古い古墳と相対的に新しい古墳が次第に差異化されて来ると共に、前者には祝部を伴わず石製模造品を伴い、後者では石製模造品を伴わず祝部を伴うと言う傾向がある程度把握されて来る事となった。古墳研究の中では、具体的な土師器の様相については主題的に言及されてはいないものの、古墳出土遺物の研究の成果としての、古墳時代の前半には祝部を伴わない時期があると言う点の指摘は重要である。この様に祝部を伴わない古い部分と祝部を伴う新しい部分と言った後の土師器の二大別の大きな指針につながる事項は、既に1910年代に明らかにされていたのである。

例えば既に1919年に高橋健自氏は、従来古墳時代の後期に属すると言われていた石製模造品の相対年代比定にあたり、これを出土する古墳の特徴として、

（一）埴輪あるもの十三箇所あること、（二）石棺に箱形・舟形及び長持形あれども家形なきこと、（三）馬具の伴出僅に三箇所に過ぎざるのみならず、石製品中亦馬具を模したるものなきこと、（四）土器の多きに反し陶器の伴出僅かに三箇所なること是れなり。（高橋1919,12 p57

ℓ7～10)

等をあげて、石製模造品の年代を古墳時代の前期に位置付けている。そして、「果して然らば石製模造器具出土の古墳は新式陶器の未だ遍く行はれざりし比較的古き時代に営まれしものならざるべからざるなり。」（同 p59ℓ16～p60ℓ1）として、<古墳時代前期／古墳時代後期>の関係の中で新式陶器（須恵器）については、<伝わる以前／伝わる以後>と言ったおおまかな対応関係を明らかにしているのである（注3）。

但し、この様な指摘も古墳研究の中に留まるものであり、土師器或いは須恵器を主題的に取り扱うと言った、これらの編年研究に直接移行する事はなかった。

2節　発掘資料の解釈

遺物としての土師器も当然発見されていたが、これ等については先史考古学で行われた様な操作を経ずに、むしろ常識から推し量った解釈が為される事が多かった。

この様な中にあって、一方では住居址或いは包含層からの出土資料を主題的に取り上げて、その紹介を行った論考が幾つか出現し始める。

例えば小松眞一氏は1924年に「金滓を出す竪穴遺跡」の中で、東京落合で発掘した住居址を紹介し、この住居址の中で鉄滓を伴って出土した土師器について、図示してはいないものの「斯くの如き埴部は言ふを俟たず古墳中よりも往々出土するもの」（小松1924,11 p273c2ℓ2～ℓ3）であるとし、文末の附記の中で、

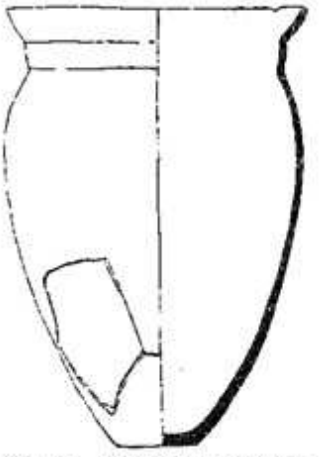
> 出土埴部の製作手法に時期の相対的下位に在るを暗示する可きもの、存するを認む可く、他方、祝部陶器が関東地方に於いて往々国分寺瓦の窯址に於いても布目瓦と共存伴出して其使用時期の下限を推知す可く（三輪善之助氏に拠る）此竪穴の営為使用時期の推考に或暗示を與ふべきものなり。（同 p274c1 附記）

としている。つまり落合出土の土師器について、古墳出土遺物との比較から古墳時代を上限とし、この中でも製作手法から比較的新しいものとして、更に共伴関係にある須恵器が他に於いて国分寺瓦と共伴する事例が幾らか認められる事から下限を示し、ある程度の時期的限定をしている。この小松氏の東京落合の竪穴出土遺物に関する取り扱い方は、土師器と共伴関係にある須恵器の、国分寺瓦との伴出等と言った分布論を中心として一定の考古学的な操作を経て、他の文物との相対的な年代について言及している点が注目されるところである。

尚、この小松氏報告の落合の遺跡は、後の落合式のタイプサイトとなる落合遺跡の近接地点であって、出土遺物の時期も両者は近似しており、後の落合式の設定を考える時興味深いものがある。この小松氏の落合遺跡の報文中には、山内清男氏等が発掘中に訪れた事や山内氏の助力を得た事も記されている。

一方、森本六爾氏は2年後の1926年に「武蔵国荏原郡馬込村の一横穴」を発表している。森本氏はこの論考の<五、附記>の中で馬込村発見の遺物について特に紹介を行い、その記述の中で第1

図の土器について、



第1図　馬込村出土の土師器

器は第三図に示す実測図の如きものにして、高さ八寸九分、口径六寸二分、底径一寸七分五厘、即ち底部の甚しく窄まれるもの、褐色にして口縁部にては厚さ一分に満たざる薄手に属す。質稍〃脆きを除いて、近畿に於て、石器と共に伴出する弥生式土器と甚しく異なる所を見ず、土師器と呼ばるゝ概念のうちにも含め得べきものなり。野村氏によれば、これらの土器が地下に埋められ、炭をならべたる上に底部を略〃上として置かれたりしが、内部には片々となりし骨を包蔵せしといふ。云ふ所によつて考ふれば或は火葬骨にあらざりしかとも考へ得らるゝ部分あり。土器の周囲は、同じく炭を以て覆ひたりしものなりといふ。しかも、この如き土器が一個に限らず、多数ありしといへば極めて注意を加ふべきに似たり、余はこれをもつて新しきものなりと考へ、むしろ仏教の影響の浸透せる一型式なるべきかと当時憶測せり。（森本1926,6 p61ℓ14～p62ℓ8）

として、土器の中から出土した骨片を火葬骨と見做し、この仮定のもとに火葬の風習が日本に伝来した背景に結び付けて、この土器を「仏教の影響の浸透せる一型式」と規定している。

ここに見られる森本氏の遺物の取り扱い方は先の小松氏とはやや異なり、分布論や型式論的操作から対象を差異化をすると言う視点が希薄である。そしてその論考中では該期の土器の取り扱いを巡って、遺物間の差異化を十分に行う事なく文献や常識等に多くを依拠しながらその年代比定を行うと言った事にとどまっていたのである。従ってこの様な中からは、分布論的操作や型式論的操作による土師器相互の相対的な位置関係の決定と言った研究は未だ行われず、文献や常識に媒介された特定個体或いは特定形態の土師器の年代観が提示されるにとどまっていた。この様な方法を前提とした年代の設定は、対象遺物の差異化が不十分であるが故に対象の限定性に欠けたものであった。

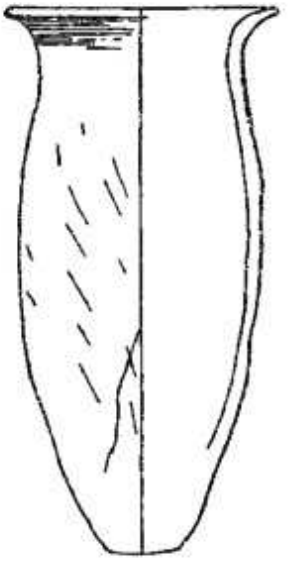
この後には、1929年に八幡一郎氏が『人類学雑誌』の雑報の中で「武蔵川口村発見の一甕」と題する一文を掲げ、第2図の甕について言及している。そこでは、

発見地は武蔵国南多摩郡川口村下川口字十二社俗称上ノ原であつて、昨年原氏自身堀出したものである。高さ四二・五糎、口径一九糎、口緒の厚さ0・五糎、底径四・八糎ある、口の開いた細長い丸底の極めて不安定な形である。外面は白味を帯びた灰黄色とでも呼ぶ可き色を呈し、口唇の下に水平の細い平行条線が認められ、胴部には微に篦目らしい斜の条がある。全体の感じは広義の弥生式土器の或ものに類し、該種土器としては稍時代の新しきものと思はれる。形丈けから見ると之に似たものは信濃、相模、大隅等で自分が実行した土器の中にある。特に好く似てゐるのは両角守一、堀内千万蔵両氏が曾て考古学雑誌に報導された信濃國松本市城山付近発見の合口甕である。以上の諸例は単に形の類似したものを挙げたのであるが、十二社発見甕と最も親近な関係にあると思はれるのは曾て小杉真一、徳富武男、森本六爾氏等によつて報ぜられた武蔵国荏原郡馬込村発見の数例である。而して馬込の例は多く地盤を竪穴風に掘り下げた中に口を下にして倒まに置き木炭或貝殻を詰めてあり、その甕の中には人骨片が認められ

たと云ふ。三氏は共にこれ等の時代を火葬発生以後又は奈良朝以後に属するものと解して居られる様である。（八幡1929,2 p80 c1ℓ7～c2ℓ12）

として、類例として先の森本氏報告の馬込村の甕について言及し、その年代観を引用している（注4）。又、

木炭の存する点では馬込例に似ているが口が接してゐる点では松本市城山付近例を連想する。甕そのものゝ型は両者に共通点を有つてゐる。若し十二社の例が合口の遊離であるとするならば甕棺分布観の上に新資料を提供したことゝなるが、その年代観に於ては同種甕が火葬を連想するものとして二三学者が時代を奈良朝以後と見做して居る事を考慮せねばならぬ。（同 p80 c2ℓ21～p81c1ℓ6）



第2図　川口村出土の土師器

としている。森本氏は先の論考の中で、甕の年代について火葬の風習との関連を示唆するにとどまっていたが、これに対して八幡氏は更に具体的に奈良朝以後のものであるとして引用している。

森本氏等が馬込村の遺物について想定した蔵骨器としての用途と、八幡氏が具体的に引用した年代観は、これ以降の研究に大きく影響を与えて行く事となる。例えば奥田氏を始めとして幾人かの論考の中に、該期の土器について論述する中で”骨壺”或いは”火葬骨壺”と言った表現が認められ、一般的な話として奈良時代等の年代観が言及されている。これ等の論考は、年代観及び遺物の用途について、先の森本六爾氏の論考の影響を受けているものと考える事が出来よう。

杉原荘介氏は1936年2月の「須和田遺跡に於ける考古学的調査の意義に就いて」の中で、

最後に、本遺跡は、北方に下総國々分寺趾の存在する丘陵と対峙するのであつて、本遺跡から出土する遺物と、同国分寺趾から出土する遺物は非常に類似してゐるのである。本遺跡の第一号竪穴住居趾内より出土した骨壺や、朱字の書かれてゐる盃等はその好例である。（杉原1936,2 p43ℓ6～9）

として、骨壺の表現を用いている。

又、同年には奥田直栄氏も「古墳時代の聚落」の中で、

処が最近の末期の土師器と全然同一のものが火葬骨を容れて埋葬した甕に存在する事に気が就いた。今其の良い例が遺憾ながら見当らないのであるが確か武蔵國馬込村や八王子等に於いて是が発見されて居る。吾国に火葬の風が発生したのは一に仏教思想侵入の為とも考へられ飛鳥朝末期頃から其の存在が確認されて居るらしく古墳に於ても奈良朝前後に火葬が存在する様である。即此の類の土師器を出土する竪穴集落と火葬骨甕と奈良前後の古墳とがお互に幾らかの食違ひはあるにせよ並行す可き年代のものである事は朧気ながら頷かれるのであつて或は国分寺とも何等かの関連を持つものではないかと想像される。更に是と同期或は夫より稍以前の土師器は各地の横穴に於て発見される事があるらしい。（奥田1936,5 p34c2ℓ12～c3ℓ8）

としている。この様に骨壺に纏わる用途や年代観は、後年に比較的大きな影響を与えて行く事とな

った。ともあれ、古墳時代以降の土師器の年代観について、考古学的な手法での十分な取り扱いを欠いた指摘であったとは言え、森本氏等や八幡氏によって言及された年代観或いは用途の想定が、該期の土器研究に対して後々まで影響を与え続けて行くのである。

3節　小結

1920年代以前の土師器研究に於いては、遺物に対する取り扱い方法が十分に検討される事や、合目的的操作が適用される事はなかった。

この様に1930年代以前に於ける土師器の研究は、その後に展開される山内氏等の研究とは明らかに異なったものである。それらはどちらかと言うと土師器への言及と表現すべきものである。即ち、対象の取り扱いについて、どの様な方法を用いてどの様に操作をする事が考古学的な研究であるのか未だ明確ではなく、合目的的な操作を経て遺物を概念的に把握する試みが意識的に行われていない事をその特徴とする。確かに森本六爾氏による、馬込村発見の甕に対する火葬骨壺という判断と年代の推定は当時としては卓越した見解であった。しかしそれはあくまでも偶発性のものであって、編年研究史の立場から見るならば、考古学的な方法による正規の手続きを踏まえた遺物の取り扱いではない事が明らかである。従ってそこには、次の遺物に対する差異化の方法が何等用意されていないのである。

この様に当時の研究では、分布論や型式論的な方法を用いて遺物を相対的に位置付けると言う視点が非常に希薄であった。そしてこの様な点に於いて、それらの研究とそれ以降の編年研究との間に一線を画し、前者を以て端緒期の研究とし後者を以て本格的な土師器研究の開始と考える事としたい。唯、この様な中でも古墳及び古墳出土遺物の研究では、当該期の土器の研究に先駆けて分布論的検討や型式論的検討が盛んに行われており、この中から古墳時代の区分についての知見の一つとして、<祝部出現以前／以後>と言った事が既に明らかとなっていた。

注釈

（注1）　岩崎1961,3等

（注2）　その他にも弥生式土器と土師器の弁別をめぐる研究がある。これについては岩崎1961,3に概略が述べられている。

（注3）　但し筆者が実見したものは、1919年の初版ではなく1927年の増補三版である。引用の頁数も増補三版本のそれであり、初版と比して内容の改訂が行われている可能性がある。

（注4）　八幡氏による引用では「小杉真一、徳富武男、森本六爾氏等によつて報ぜられた武蔵国荏原郡馬込村発見の数例」としているが、この三氏の連名で発表されている文献は管見の及ぶ範囲では見つからなかった。八幡氏の引用内容に合致するのはここで取り上げている「武蔵国荏原郡馬込村の一横穴」であり、この記述は八幡氏の誤りであると思われる。

第２章　山内清男氏による基本的原則の提示：１９３０年代

１節　分類の方法

編年論的研究に伴う分類は分布論と型式論を代表的な方法として為され、個体相互の関係と関係相互の関係をその主要な対象とする。そして具体的な操作の過程からは、差異化と同一化をその契機として見出す事が出来る。

弥生式土器の流れを引きつつも”古墳もの”として漠然と認識されていた土師器について、その編年研究初期に注目すべき事は、発掘等によって見出された一群の遺物に対しての分類方法である。

分類が考古学的手法で為される限り、その分類は分布論的取り扱いと型式論的取り扱いによる資料の操作として捉える事が出来る。この時の分類の対象を考えて見ると、その対象は個体相互の関係についての場合と関係相互の関係についての場合の二通りが考えられる。又、この個体相互の関係と関係相互の関係についての、分布論的取り扱いと型式論的取り扱いの過程で具体的に行われるのは、対象とする遺物群に対する差異化の操作である。そしてこの差異化の操作では、究極的な個体の段階にまで分類するのでない限り、分類された各々の遺物はその範疇内部の複数の個体の中では同一性を有する事となるので、差異化と同時に同一化が行われている事となる。従って、分類とは資料に対する差異化と同一化による境界設定の過程であり、混沌とした遺物群に対する切断と接続の反復過程に他ならないと言う事が出来る。つまり分類操作の中には、分布論的取り扱いによる同一化と差異化、型式論的取り扱いによる同一化と差異化と言った契機を認める事が出来るのである。尚、ここで言う分布論とは、遺物相互の位置的属性の関係並びに遺構相互の位置的属性の関係、或いは遺物と遺構との位置的属性の関係等、人為物に対する位置的属性からの研究法総体を指すものである。従って、所謂層位論もこの中に包括されよう。

縄紋土器研究に於ける遺物の分類は、貝塚や分厚い包含層と言った特性を活かして行われ、分布論的取り扱いによっては、個体相互の関係（分布論的属性である位置の関係）は一括性として、関係（一括性）相互の関係は地層累重の法則による先後関係として把握され、器表に施された地文や文様、或は把手等の器表面の凹凸といった特性は、型式論的取り扱いによって、個体相互の関係（型式論的諸属性の関係）は相似性或は相同性として、関係（相似性或は相同性）相互の関係は系統関係として把握されて来た（注１）。

一方、縄文土器とは異なった特性を持つ土師器の場合、分布論的取り扱いによっては、遺構内の共伴関係としての一括性（奥田）と、一括に共伴する他の土師器以外の特徴的な文物の有無による年代交差からの先後関係（山内）、型式論的取り扱いによっては、形態の類似からの相似性、相同性（杉原）と、普遍的で形態変化が比較的捉え易い器形からの変遷傾向の抽出と言った系統性（奥田）、等を捉える事によって分類が行われた（注２）。

表１　分類に於ける単位操作の類型

	型式論	分布論
個体相互の関係	相同性、相似性	一括性
関係相互の関係	系統関係	先後関係

1930年代の土師器編年研究の黎明期には一括出土遺物を基本的な単位と見做し、それらに対して共伴する他の文物を大別の指針として、普遍的で形態変化の捉え易い器形を持った土器の変遷を細別の具体的な方法として山内氏や奥田氏によって分類が為されて行った。

以下ではこの様な分類に対して、その考古学的な分析操作としての位置を確認して行きながら、各々の論考の特徴を土師器研究史の中に位置付けて行く事にしよう。

2節　山内清男氏の分類

山内氏等によって1930年代に行われた一連の研究を、土師器編年研究の嚆矢として捉える事が出来る。そして後年に杉原氏等によって指摘される多くの論点は、既に1930年代に山内氏等が提示していたものである。先史考古学で鍛えられていた山内氏の方法は、理論的裏付けをもったものであった。

今日まで土師器編年研究史の中では触れられる事が少なかったが、杉原荘介氏の著名な編年研究に先立って、1930年代前半から既に山内氏等によって土師器の編年研究が試みられている。この山内氏等の土師器研究の具体的内容については、山内氏自身の断片的な記述からその一端を窺い知る事が出来る。

本章では、土師器編年研究黎明期に山内氏によって為された研究について、その方法に焦点を当てて検討して見る事にしよう。そして山内氏に師事した奥田直栄氏の研究、或は山内氏から教示を受けた人々の土師器に対する記述についても若干触れてみたい。又、併せて明示的な形では記録に残されていない山内氏の土師器編年に関わる認識について、その一部を復元して見る事にしよう。

山内清男氏が1932年12月の『ドルメン』1巻9号に掲載された「日本遠古之文化」六の中で、弥生式と弥生式系（土師器）の各々について、石器を伴う弥生式と伴わない弥生式系と言った学史的な視点を提示し、更に弥生式系の土器を、祝部土器の共伴しない古墳時代前半と祝部土器を伴う古墳時代後半に分けた事は、縄紋研究者の間では有名な話である（注3）。

先史考古学に於いて独自の体系を築きつつあり、この作業の中で既に方法論的に鍛えられていた山内氏は、「前記の如く一、二、三、の段階に分け、各各の特徴を捕へることが必要である。集落発見の材料ならば石器を伴ふもの（一）、石器を伴はないもの（二、三）に分け、後者は更に祝部を伴ふもの（三）と、伴ふもの（”伴はないもの”が正しく、これは誤植：大屋注）（二）に分けるものである。そして各材料を綿密に観察し、製作、器形、装飾の異同を吟味して、各階段（これは誤植ではない。段階ではなく階段と称している：大屋注）の特徴を明にする。同じ階段に属して居つても異つた組成を持つ場合が発見されるかも知れない。この様な操作を経て、弥生式及び古墳時代の土器の細別型式が決定され、その先後関係が闡明されるであらう。」「この方面の調査は遺憾ながら進歩して居るとは云ひ難い。縄文土器の細別が進行し、関係する文化現象がその上に立つて調査されるに際して、同じく土器の豊富に行はれた弥生式及び古墳時代に対しても、同様の方針を立てたいものである。」（山内1932,12 p49c2ℓ6～c3ℓ1）として、早くもこの時期に土師器の大別

と細別の具体的な指針を明瞭に提示している（表2　尚、以下ではこれを山内32年案と称する）。この山内32年案での特徴は、内容が不鮮明であった土師器について型式論的な内容の提示を先行させる事なく、祝部の共伴関係と言う分布論的な視点から大別の方向を指し示した事である。ある特定の内容を持った竪穴住居址出土の資料を一括して土師器の型式として即自的に定立する事は容易であるが、山内氏は自身の土師器編年研究の中ではこの様な方法を採用しておらず、体系的な視点に基づいて分布論的操作によって土師器の大別を行っているのである。

表2　山内 1932、12「日本遠古之文化」六での分類

縄紋式以後古墳時代末までの土器の大別

	石器	祝部
1．弥生式（石器時代）	○	×
2．弥生式系の土器（古墳時代前半、鉄器時代）	×	×
3．弥生式系の土器（古墳時代後半）	×	○

その後山内氏は、1935年12月に行われた原始文化研究会12月例会で「土師器の二大別」について口頭発表を行っている。この発表について詳細な内容を伝える記録は残されていないが、後年に山内氏自身が『日本遠古之文化』補註付・新版の註で触れている。それによれば、「祝部の存否に連関して、土師器自身に新旧二大別ある事を報告し」それは「古墳時代前半の土器は壺、台付土器を有するが、後半の土器にはこれらに乏しく、細長い土器が盛行する」（山内1939,12 p45ℓ 35～37）として、先述の須恵器の共伴関係に視点をおいた大別から一歩進んで、大別に於ける土師器自身の特徴的な形態の差異の一端を明らかにした（表3　注4　尚、以下ではこれを山内35年案と称する）。

表3　山内 1935，12原始文化研究会での分類

	石器	祝部
1．弥生式	○	×
2．古墳時代前半　壺、台付土器	×	×
3．古墳時代後半　細長い土器	×	○

同年2月には『人類学雑誌』の誌上で八幡一郎氏の新著である『北佐久郡の考古学的調査』に対する書評を行い、この中でも土師器の編年について若干触れている。そこには、

> 弥生式文化及び古墳時代に関して紹介すべき新見解が多い。また氏の叙述の不備も亦少くない。氏は古墳時代の土器として祝部及び埴部を並記して居られるが、古墳時代前期には祝部の一般しない時期が認められるのである。そして一方に於いて弥生式の後半に石器の廃滅が云為されて居るが、これは古墳時代前期の土器を弥生式に繰入れた疑ひがある。しかしこの点は未開拓の分野であつて、氏のみを責める訳には行かぬ。古墳時代を祝部時代と云い直さうと横車を押す者もある位であるからである。（山内1935,2 p30c2ℓ9～21）

と言った記述が認められる。この書評の中でも古墳時代の前期に須恵器が共伴しない事、弥生式土器と土師器との境界を石器の共伴から確認する事の二点が重ねて述べられ、更にこの古墳時代前期に祝部が存在しない事と関連させて、当時東京考古学会が中心となって行っていた祝部時代と呼称する運動に対しての批判も行われている。この様な中で、1939年には「日本遠古之文化」が補註付・新版の形で出版される事になる。そしてこの補注の中に

表4　山内 1939，12「日本遠古の文化」補註での分類

		石器	祝部
1．弥生式		○	×
2．古墳時代前半	壺、台付土器	×	×
3．中間型式	壺、台付土器	×	○
4．古墳時代後半	細長い土器	×	○

は、

その後又多くの資料に接すると共に壺又は台付土器を伴ふ、しかも祝部土器を伴存する中間型式の存在が明になり、近年自分の腹案では関東地方の土師器に少くとも五型式の細分を認めて居る。これは文書としては未だ発表して居ないが、時折請はれるままに説明することがあり、…部分は或る人々の報告の中に巧に織り込まれて居る様である。（山内1939,12 p45ℓ38～p46ℓ4）

と言った記述が為されている（表4　尚、以下ではこれを山内39年案と称する）。

この山内氏の土師器五細別案については、表4に示した様に三つの型式までしかその文中では触れられておらず、残りの二つの型式がどの様な内容を持っていたのか今となっては知る由もない。唯、後述する奥田氏の見解から考えると、或は古墳時代後半以降の二型式である可能性が高いと考えられる（この点については後述）。

これらの山内氏の土師器研究を後年の他の研究者のそれと比べた時、そこに山内氏の編年論の方針に基づく一つの特徴を見出す事が出来る。以下ではこの山内氏の特徴的な方法を検討する為に、山内氏自身による土師器編年の方針についての記載、及び山内氏の具体的な編年作業の進捗状況を年代順に再度見て行く事にしよう。

山内氏は先にも引用した様にまず弥生式以降の土器を石器、祝部の共伴から三大別し、その後「各材料を綿密に観察し、製作、器形、装飾の異同を吟味して、各段階の特徴を明に」し、そして「この様な操作を経て、弥生式及び古墳時代の土器の細別型式が決定され、その先後関係が開明される」（山内1932,12 p49c2ℓ11～18）としている。この一文の中では、縄紋式と異なって分布論に基礎をおく層位的な方法によってその前後関係の確証を得る事が比較的困難な土師器研究の特殊性を捉えた上で、共伴する特徴的な文物により、まず大きく間違う事のない様な大別をしておき、次いでこれの中身を明らかにして行こうとする、大別に対する保証とでも言うべきものが提示されている。

最初に大別の指針を提示した山内32年案当時は土師器研究の端緒期であり、住居址の一括資料等は未だ報告されていない状況で、土師器と言う言葉が指し示す範囲すら極めて曖昧なものであった（注5）。山内氏はこの様な中にあって、この段階で最も有効な差異化の方法として須恵器の共伴関係で土師器の二大別を行う事を提唱している（注6）。即ち、須恵器を指標にしてこれとの共伴関係から須恵器の共伴しない古墳時代土師器の前半部分と、須恵器の共伴する古墳時代土師器の後半部分に大別して考え、各々の組成を解明して行こうとする提言である。これはある意味では遺物としての土師

第3図　山内氏の操作

器研究自体の特殊性に大いに規定されている研究方法であると言えよう。先にも指摘した様に層位的な検出によって前後関係を決定する事が困難で、尚且つその型式論的特徴の第一である器形が明確な差異性に乏しく、加えて器形分化が著しく、編年研究の端緒的段階で各器形・各地方を通じての明確な型式論的な差異化を行う事が難しいと考えられる土師器編年研究に於ける特殊性である。この様な状況の中にあって山内32年案は、土師器自身による大別を行う前に大別をどの様に進めて行くかと言った具体的な大別の戦略を提出したものとして、評価されるべきであると言えよう。

山内35年案では、先の山内32年案で示された方法<祝部を伴わない前半／祝部を伴う後半>に基づいて、土師器自身の二大別の内容<壷、台付土器／細長い土器>が提示された。この山内35年案で注意すべき事は、土師器自身の二大別、即ち<壷、台付土器／細長い土器>が、土師器自身の型式論的な取り扱いを前面に掲げて分類されたものではないと言う点である。つまり土師器の二大別は、その出土状態の中で各々の一括が須恵器をその分布の中に含む或は含まないと言った、須恵器の有無をメルクマールとした分布論的な差異性を有する一括資料の中で、その一括を構成する幾つかの土器の中での土師器の形態の傾向として述べられていると言う事である。即ち、ここでも分布論的な操作によって土師器の二大別が為されているのである。

この事は山内39年案で更に明瞭となる。即ち山内39年案では、先の山内35年案で分類された須恵器を含まない一括を構成している土師器を抽出して、この中に認められた器形の集中傾向<壷、台付土器>に視点を移し、逆にこの<壷、台付土器>を含む一括を抽出して更に分布論的な属性を検討し、その結果としてこれを須恵器を共伴しない古い部分と、須恵器を共伴する新しい部分に更に分離しているのである。ここでは、山内35年案に対して再び山内32年案と同様な視点で相対化が行われているのである。

つまり、山内32年案から山内39年案までを通して、その分類方法を差異化に用いた手法の分析から検討するならば、

・山内32年案：一括中での須恵器の共伴関係による分類

・山内35年案：先の各々の一括からの土師器の形態的特徴の抽出

・山内39年案：先の形態的特徴でくくられたものに対する須恵器の共伴関係による再分類

と言った操作が為されており、分類の基準に一括中での須恵器の共伴関係が反復して用いられている事をその特徴と見做す事が出来る（第３図）。この事は、山内氏が土師器の研究に於てもその先史土器研究と同様に先ず分布論的検討を行い、しかる後に型式論的検討を進めて行くと言う、研究上の原則に基づいた操作を行っていた事を端的に表していると言えよう。

山内氏はこの様にして1932年から39年にかけて終始一貫して、土師器編年について一括中での須恵器の共伴関係、つまり分布論的操作から大別を行っているのである。

次に、山内氏がこの様な方法を採用した理由について考えてみよう。

山内氏が縄文土器研究で見せた様な型式論的視点があれば、土師器研究に於いても型式論的な手法を全面的に展開して編年研究を行う事が出来たであろう事は想像に難くない。そしてその中で幾つかの型式を設定して行く事は、比較的たやすかったと思われる。今、土師器の編年研究を振り返って見て、山内氏が採用した方法の特徴を一言で表現するならば、そこでは相対的に確実性の高い

方法が選択されている、とする事が出来よう。編年はそれが絶えず暫定的なものであるとしても、相応の確実性が保証されていなければならない。全ての事象は編年的な位置を持ち、そのあるべき位置に正しく置かれてこそ個々の事象に留まる事なく、脈絡の中で検討する事が出来るのである。そしてこの編年的な位置の最良の尺度を、土器の編年が示してくれるのである。従って土器の編年はそれが暫定的なものであるにせよ、相応の確実性が必要とされるのである。分類の依拠する前提を明瞭にした、確実な方法の積み重ねによる大別と細別が要請される所以である。前述した山内氏の方法からは、確実な分類に関する典型的な方法を読み取る事が出来よう。そしてこの土師器の編年研究に於いて山内氏が採用した方法は、山内氏の考古資料全般に対する方法上の特性を端的に現していると考えられるものである。

尚、この当時山内氏によって提唱された所説を理解する上で忘れてはならないのは、所謂ミネルヴァ論争である。この論争の口火を切る事になった『ミネルヴァ』創刊号掲載の、「日本石器時代文化の源流と下限を語る」と題した座談会について、その直後に山内氏は、

> 考古学の資料として我々は遺跡遺物を観察する。しかし総ての遺跡遺物又はその記録は万人一様に開放されては居ない。これらの遺跡遺物の研究に当つて色々な操作をするが、しかしその操作は人によつて違つて居る。そして結局資料から何を学び取るか、に至つては著しい個人差があると見なければならない。一方に日本考古学の組織を強化しようとする傾向と共に、大胆にこれを否定する自由も保留されて居る次第である。
>
> 東京の考古学者の間には色々な学問的潮流があつて、日本原始文化の動向に関しては特に著明な見解の対立がある。我々が会同する度に議論が果しなく続き、遂に各自資料の整備を痛感して物別れになるのは寧ろ定例とさへなつて居る。ミネルヴァ創刊号に載つた座談会もこの例に洩れず相当議論の応酬があつた。縄文土器文化が弥生式、古墳時代文化と同居して居たか否かに就ては、八幡山内対後藤氏の間に、縄紋式に於ける大陸文化の影響の有無程度に関して八幡江上氏対山内の間に意見の相違がある。（山内1936,5 p1c1ℓ2～c2ℓ2）

と位置付けている。

例えば、この『ミネルヴァ』創刊号掲載の座談会では、

> 後藤　弥生式土器のすべてを古墳時代以前におく考は穏当ではない。殊に東日本に於いてさうであると思ふ。少くも東日本では古墳時代と弥生式時代とは同一時代のものがあるやうに思ふ。縄紋より弥生、弥生より古墳と云ふのは、必しも適切の考へではなく、一部の訂正の必要はあると思ふ。
>
> 八幡　弥生式の行はれた時期があると云ふことは認められる。然しそれが所謂古墳時代に入るかどうかは疑問だ。古墳時代の土器は土師器をもつて代表させることが出来るでせう。祝部或は土師器を出す集落址が各所にある。さう云ふものが可なり信州一円に広がつて居る。兎に角古墳時代の最上限を弥生式文化とすれば古墳時代と縄文文化との間に弥生式文化が楔のやうに割り込んだものと考へられますがね。
>
> 後藤　信州の弥生式は、西日本の弥生式と相当変わつたものぢやないでせうか。
>
> 八幡　それは時代が異ふから、変つたと云ふことも成立つが、矢張地方的な異ひ方だと思ふん

です。現在それを具体的に解答することは出来ない。途中が分つて来ない限りはね。

後藤　古墳の築造が始まつたからと云つても、それはほんの部落の上流社会だけであつて、古墳築造がその部落の全般に亘つたと云うことは、古墳の終頃ぢやないかと思ふんです。小円墳の類には、古い形式を持つてゐるものは殆どないでせう。是は潰された結果かも知れないが、今在る小円墳は九分九厘まで古墳末期のものだと思ふ。此の考へ方が誤つてゐないとすれば、その下級の人達が古墳の築造を始める以前には、相当文化の程度の低い、そして恐らく石器なども使つて居たのではないでせうか。

八幡　然しどうでせうか、古墳を造ると云ふことは、古墳を造る人と、造らない側の人と、文化的の水準は違ひますけれども、例へば埴輪や、立派な副葬品を持ち得るのは、古墳を造る側の人でせう。其の造る階級と、造り得ない階級があるでせう。其の造り得ない階級の連中が、祝部を焼いたり、埴輪を造つたりするのぢやないでせうか。或ひは田圃を造つたりするのぢやないでせうか。

山内　其の点は古墳時代の集落を調べて行くとはつきりするだらうと思ふ。（『ミネルヴァ』創刊号 後藤他1936,2 p39c1ℓ9～c3ℓ11）

と言った様な議論が為されていたのである。この様な学界動向の中で山内氏等は縄文時代の終末について、弥生式時代と古墳時代の関係について、土師器の編年について、或いは考古学的な正規の資料操作について、等などの多くの事について総合的な研究戦略の基に各分野に於ける発言を行ってゆき、考古学の方法を確立すると言う一つの運動を展開して行くのである。

弥生式土器と土師器の境界についても、縦に並ぶ型式のどこに境界を置くかと言った単純な議論ではなく、弥生式土器と土師器がパラレルに存在するという見方さえあった当時の学界の中で、まず第一に石器を伴う弥生式と伴わない土師器と言った視点で大別を行い、並行論を唾棄する事から問題整理を行ってゆこうとする姿勢に注目すべきであろう。

次節に取り上げる奥田氏による幾編かの論考も、山内氏との協働のもとにこの様な戦略の重大な一翼を担うものであったと考えられる。

3節　奥田直栄氏の分類

山内氏に師事した奥田氏も、山内氏と同様に方法論的な裏付けを持った視点で土師器の編年研究を行っていた。

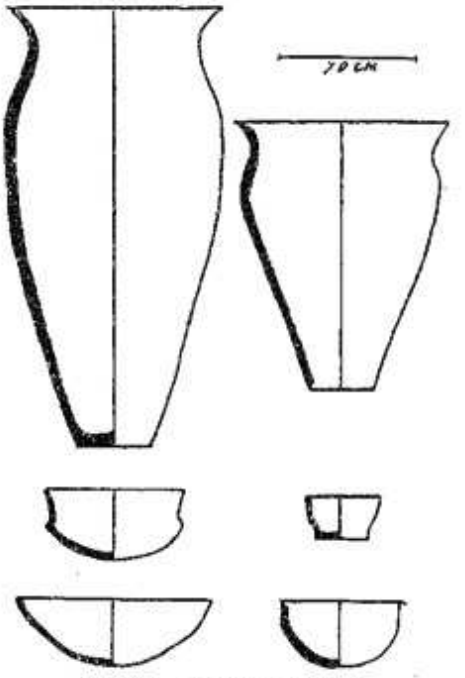
既に見て来た様な山内氏の研究と同時に、当時山内氏に師事した（注7）とされる奥田直栄氏によっても、土師器を主題にした論文が幾つか発表されている。以下では単に土師器編年としてではなく、先に指摘した山内氏の「日本考古学の組織を強化しようとする」運動の一環としての土師器に関する具体的な展開という側面にも注意しながら、この奥田氏の論文中の記述を年代を追って検討して見る事にしよう。

1935年7月に奥田氏は「中野区川嶋発見の原史時代竪穴」（予報）を発表している。奥田氏はこ

の中で、川嶋発見の土器（第4図）に対して「此種土器を出す竪穴の年代は一般に古墳時代末、或ひは奈良朝頃に下るものと考へられて居る。」（奥田1935,7 p14c2ℓ9～10）として、古墳時代末～奈良時代の具体的な時期の限定を行っている。この年代観については典拠が明示されている訳ではないが、恐らくここで奥田氏が年代の提出に際して依拠したものは"一般的に"という言葉が使われている事から考えて、先にも触れた様な当時ある程度一般化していた見解である森本六爾氏の「武蔵国荏原郡馬込村の一横穴」に起源を持つ年代観の事であると思われる。

成形、調整、整形については「然し轆轤は私の観察では殆ど使用されなかつたらしい。土器の口縁部等に於いて一見夫らしい平行線の見られるのは多くは布状の物体で器形を整へる為試取る様にしたものであらうと思はれる。」（同 p14c2ℓ2～5）として轆轤未使用と言う事と、口縁部に対する布状の物体による調整、の二点が指摘されている（注8）。遺構については、「炉は第一号式にロームが突出して其傍につくられるものと壁の附近に自然石を使用したものとが存在し何れも土器、焼土、木炭等が発見される。」（同 p13c2ℓ17～19）として、炉と竈を差異化して認識している。但し、炉を持つ住居址と竈を持つ住居址のそれぞれの覆土に含まれる土器の比較検討までは行われなかった。

尚、文中には「東京附近に於てこれと同種の竪穴としては前記の小松氏の落合の例がある。」（同 p14c2ℓ10～11）と言った記述が認められる（注9）。



第4図　川嶋出土の土師器

1936年3月には「空堀らしき溝を持つ竪穴住居遺跡」が発表された。先の川島の"溝に囲まれた竪穴群"について、既発表の「中野区川嶋発見の原史時代竪穴」（予報）の中では古墳時代末～奈良朝と一括して年代比定していたが、ここでは、

> 全部同時代のものではないのは勿論であって、土師器の相当古いと思われる「壷を伴うタイプ」割合に新しい「祝部と伴出する大形の甕を持つタイプ等」の如き幾つかの型式と認められる土器群が、それゞ単独に出土する竪穴が、この竪穴群中に多数存在して居る。（奥田1936,3 p39 c3ℓ20～p40c1ℓ4）

として、その遺物の傾向から見た年代差を強調している。そして、山内氏の土師器二大別を踏襲した形で「壷」と「祝部と伴出する大形の甕」と言ったものを、土師器二大別のそれぞれのメルクマールとしてあげている（表5）。

表5　奥田直栄氏による土師器二大別

時　期	内　容
相当古い	壷を伴うタイプ
割合に新しい	祝部と伴出する大形の甕を持つタイプ

ここでは、各々の型式がそれぞれ個別の竪穴から単独に出土すると言う指摘が極めて重要である。それは、一括性での確認と言う事が、即自的な段階であるとは言え具体的資料をもとにして型式論的取り扱いを

行う際の基本的な視点であるからである。そしてこの特定の形態的特徴を持った一群が単独に出土すると言う事は、土師器研究に於ける分類されたもの相互の関係に対しての、確かさを保証する数少ない基準でもある。何故ならば、型式論的に分類されたもの相互の差異性の検証は、高次の認識を目指す場合には分布論的な相対化を行うしか方法がなく、分布論的取り扱いでは絶えず異なった分布を示すと言う関係に於いてでしか、その差異性を捉える事が出来ないからである。つまりここで行われた奥田氏の操作の中では、山内氏によって須恵器の共伴をもとにして認定された土師器の二大別（山内35年案）が、土師器自身の分布のあり方として改めて検証されているのである。先の山内氏の視点（山内35年案）は、須恵器の共伴関係から見た一括相互の関係を基にしており、この奥田氏の視点は土師器の一括相互の関係（共伴しないと言う分布論的差異性に基づいた）を基にしているものであると考える事が出来よう。この様に分類内容としては同様なものを含んでいる両者にも論理的な位相での差異を見つけ出す事が出来、そこに認識の発展を認める事が出来る。又、同文中では、「東京附近にある是等空堀を有する竪穴群から発見される土師器の新しいものは、大体其年代が古墳時代末期歴史で言へば奈良朝あたりに位するらしい事」（同 p40c3ℓ21～25）と言った事や、又「轆轤使用の痕跡が明瞭であり、絲じりの附いた広義の土師器」（同 p40c1ℓ10～11）等の記述も見られる。

ここで土師器の分類内容について振り返って見ると、奥田氏は先の「中野区川鳴発見の原史時代竪穴」（予報）の中で一群の土器について「然し轆轤は私の観察では殆ど使用されなかつたらしい。」（奥田1935,7 p14c2ℓ2～3）として、これを古墳時代末から奈良朝頃のものとしていたが、「空堀らしき溝を持つ竪穴住居遺跡」ではこれ以外に「轆轤使用の痕跡が明瞭であり、絲じりの附いた広義の土師器」（奥田1936,3 p40c1ℓ10～11）についての記述が認められる。つまりこの両者によって、古墳時代末以降の土師器の二型式について述べられている事になる。即ち一方は、古墳時代末から奈良朝頃の轆轤が殆ど使用されていないものについてであり、もう一方は轆轤が使用されている広義の土師器についてである。

そして後者は、轆轤が使用されている点、広義の土師器とされている点に於て前者より新しいものとして捉えられていた事が明白である。これは先に触れた山内氏の土師器五細別のうち、不明瞭であった残りの二つの型式に相当している可能性が高いと考えられよう。いま仮にこれを山内氏の先の編年に接続すると、表6の様になる（注10）。

表6　山内氏の土師器五細別に関わる筆者の想定（暫定案）

			石器	祝部
	1．弥生式		○	×
日本遠古之文化補註→	2．古墳時代前半	壷、台付土器	×	×
日本遠古之文化補註→	3．中間型式	壷、台付土器	×	○
日本遠古之文化補註→	4．古墳時代後半	細長い土器	×	○
奥田氏の文から想定→	5．古墳時代末～奈良朝	川鳴出土・落合の類例 轆轤未使用		
奥田氏の文から想定→	6．（それ以降のもの）	轆轤使用・絲じり		

これは今日の土師器五型式にかなり近い内容を持つものであると言えよう。ちなみに杉原氏による土師器四型式の想定が1940年であり、『平出』の刊行は1955年である。

奥田氏は、同年5月には「古墳時代の聚落」の中で、

関東地方の古墳時代竪穴群から発見される土師器を、一つ一つの竪穴に就いて製作や器形等の点をとおして観察し整理して見ると、大体二つのグループに大別される事に気が就く。一つは小形の壺を多量に含むものであり、一つは大形の甕が多数存在する仲間である。

其処で此の二者の関係を狭い範囲ではあるが、僕の作つた東京近郷の竪穴各個に於ける共存関係の表で調べて見た。すると此の二群は、更に二三の型式に細別される可能性があるが、前者と後者とが割合に円滑に年代的に連絡するらしい事が判つて来たのである。即ち前者を主体として出土する竪穴には、後者は全然共伴せず、後者の夫も稍古いらしく思はれる型式を多量に発見し得る竪穴では、前者の小量が混入して居た。

山内清男氏は、土師器を其の祝部伴出の有無によつて二大別して居られるが、事実後期の甕を持つタイプには祝部が並存する事が確実であるに対し、前者の壺のあるタイプには殆どこれは発見されない。之等を総合して考えると土師器に於いては壺は甕よりも一般的に古い形である事が略想像される訳である。処が此の想像は壺と甕のみに就いての関係を詳細に見て行くと更に満足されて来る。即前期のものでは壺が全盛であるかはりに厳密な意味での甕が殆んど払底で反対に後期の方では甕が発育して来たかはりに壺が漸次消滅し、凡そ中期頃のものに高さの増した、口の広がつた甕に近い壺が出現して居るのである。言ひ換へれば後期の甕は同時期の壺と共に前期の壺を共同の母胎として生れて来た形であるとも考へられよう。

もし斯様な現象が正確なものであり、亦単に関東のみならず他の地方にも適用する事が出来るとすれば土師器のクロノロジーを設定する上に於いて壺と甕とが重要な役割を演ずる事になるかもしれない。但し此の場合注意せねばならぬのは比較的変化に乏しい土師器も相当な地方的の変異性を示して居る点である。其の最よい例は関東と東北の夫であつて両者共に年代的には類似の変遷をなしては居るが又前後を通じ大きな地方差の流れて居るのが認められる。東北のものに固有な要素は北海道の金属期の土器に相当な影響として見出されるらしいが関東地方でも常陸付近の土器に含まれて居る模様である。然し関東以外の地域でも東北は勿論近畿、播磨、和泉、紀伊等にあり）九州等の発見例にも前期の壺と甕が存在するから或は同様な原則の下に案外簡単に各地方が片附いて行くのかもしれない。（奥田1936,5 p31c2ℓ7～p32c1ℓ21）

と述べている（表7　注11）。

表7　古墳時代の壺と甕の関係

	壺	甕
前期	全盛	殆ど払底
中期	高さの増した口の広がった甕に近い壺が出現	
後期	漸次消滅	発育して来る

ここでは先に分布論的にも共伴しないと言う関係から差異化が確認された、土師器二大別の壺を伴うタイプと甕を持つタイプのそれぞれについて、更に詳細に分布論的に検討を行う事によって、「前者を主体として出土する竪穴には、後者は全然共伴せず、後者の夫も稍古いらしく思はれる型式を多量に発見し得る竪穴では、前者の小量が混入して居た」事を根拠として、「前者と後者とが割合に円滑に年代的に連絡するらしい事」が想定されている。そしてこの様な操作のもとに、後期には壺と甕が存在し、両者とも前期の壺を共同の母胎として成立すると言う、先の分布論的分類に

対する型式論的な解釈が初めて行われている。山内氏によって提示され更に奥田氏自身によっても再三分布論から検討された土師器の編年が、ここに至って初めて型式論の次元で検討されたのである。逆に考えるならば山内氏や奥田氏は、型式論的手法を端緒的な操作の中で前面において展開する事なく、又、良好な一括遺物から他の一括との関係性の検討を不十分なままに型式を命名する事もなく、分布論的操作で十分に検討を経た後に初めて型式論的な内容の提示に移行している。つまり先に積み重ねていた、分布論的な関係の検討をもとにして型式論的な関係が述べられる過程は、

①須恵器の共伴関係をもとにした土師器の二大別

②前者の二大別中での土師器の組成の特徴抽出

③土師器二大別の非共伴関係からの時間的差異性の確認

④土師器二大別の更に細かい共伴関係からの二大別の各々の連続性の想定

として捉えられ、この様な四つの操作を経て初めて土師器自身の型式論的な関係に言及し得たのである。回りくどい様に見えるが、方法論的には着実に認識の段階が踏まえられている研究と言えよう。

ここに於いて特定の器形の土器の形態変化を捉えて編年を行うと言う、新たな方法が明瞭に示された。これについては、土師器研究に於ける方法論的手続きを踏まえた、分布論的検討からの型式論的検討への移行であると位置付ける事が出来る。又、広域編年で地域差に注意しつつ、壺、甕を用いると言う方法も同時に提示された。慎重な手続きを経て提出された型式論的手法による分析は、個体相互の関係（型式）から関係相互の関係（系統）へという順当な手続きを踏まえており、従って関係相互の関係（系統）の地域別の比較である広域編年にまで言及し得たのである。正当な手続きを踏まえたが故の1936年段階での広域編年への言及は、正当に評価されるべきであろう。

年代論についても、下野の国分寺址採集遺物中に見られる「**各地の寺址や横址で発掘される轆轤製で絲じりの附いた極く広義の土師器**」と「**夫よりも稍古い時代に属する古墳時代末期の竪穴にある土師器片**」（同 p34c2ℓ2～6） の共在によって、これらのものが国分寺と共存する可能性、及び末期の土師器と火葬骨壷の同一性から、これらの時期を奈良朝の前後とする可能性が述べられている。ちなみに、ここで触れられている火葬骨壺云々も出典は明記されていないものの、やはり森本六爾氏の「**武蔵国荏原郡馬込村の一横穴**」に起因するところの年代観であろう。

4節　「東京市西部に於ける古墳時代末期集落の規模」の意義

正規の方法から必然的に導かれた幾つかの論点は、今日でも傾聴に値するものである。そしてそれ等の論点の多くは、今日改めて問題になっている。

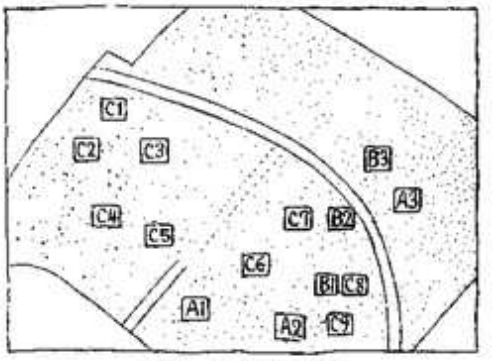
続いて、奥田氏によって1936年８月から12月にかけて『ドルメン』誌上に「**東京市西部に於ける古墳時代末期集落の規模**」（一）～（三）が発表された。この中では、山内氏等の総合的な研究戦略を理解する上で欠く事の出来ない幾つかの重要な指摘が相次いで為されている。

（一）では、住居址相互の年代的同一性について述べる中から集落景観の復元について言及して

いる。そこでは、遺構とその覆土中から出土する遺物の関係（帰属性）について、或いは型式と時間の関係について等の問題が取り扱われている。集落の遺跡では「各時代の住居址が重つて居る」ので「或時代の住居址丈を、選び出す仕事も大変な難事である。」（奥田1936,8 p27c1ℓ15～18）として、

> 住居址の各の古さを、其の内部から掘り出された遺物によつて、定めようとするには、相当な苦心が拂はれねばならない。吾々が一見した丈では、全く後世の攪乱を、受けて居ない様に見える竪穴でも、夫を発掘した際に、穴の底から極く近代の瀬戸物やビール壜の欠を発見する様な滑稽は、屢々演ぜられるのである。加之或遺物の一型式を主体とした住居を、悉く数へ得たと仮定しても、夫は其一型式の生存して居た何十年（？）かの間に、使用せられたものが、どの位あつたかを示して居るとは云へ、決して夫等全部が同時に住まはれて居たと教へる訳ではないのである。（同 p27c1ℓ20～c2ℓ20）

としている。この一括性の検討の問題は、考古学の正規の手続きとして遺物相互の関係を分布論的同一性から型式論的同一性へ移行させるにあたって、分布論に最低限必要な反省的契機である。つまり分布論的同一性として把握していたまとまりを型式論的同一性の視点から解離させる為には、分布論的同一性の相対化（一括性への懐疑と検討）が必要なのである。そしてこの問題から派生する事として、所謂集落内での同時存在の住居の摘出に関わる困難さ、一型式内での居住期間の問題等について言及が為されている。前者は今日の集落論批判の、後者は今日の移動論のそれぞれの主要論点の先取りと見做す事も出来る指摘である。そしてこの指摘をする事によって、既に型式論的同一性に対しても一定の相対化が図られている点は注目されよう。



第5図　川嶋の集落

又、奥田氏は土師器の型式についても第5図の様な川島発見の竪穴住居址の遺構配置図を掲げて、

> 御覧の通り緩い曲線を示して、据られた二条の空堀の南側に、川島A式（土師器、勿論仮称、詳細は後日に譲る）、同B式、同C式を主体とした竪穴が、不規則に据られて居る。（奥田1936,8 p28c1ℓ15～19）

と述べている。そして文末の附記では、「去年ドルメン四ノ七に報告した第一号竪穴と云ふのはC４の事である。」（同 p28c3ℓ19～20）としている。先に見て来た様に、『ドルメン』で奥田氏が第一号として報告した竪穴は古墳時代末から奈良朝とその年代が想定されていた。第6図は、1935年の『ドルメン』４巻７号の巻頭に掲載された川島の第一号住居址の遺物出土状況の写真である。従って、<第一号住居址＝

第6図　川嶋第一号住居址（川嶋C式）

C 4 >の関係から奥田氏が川島C式と仮称しているのはこれらの写真の遺物に他ならない。又、川島A式、川島B式については、1936年3月の「空堀らしき溝を持つ竪穴住居遺跡」に見られる、川島の"溝に囲まれた竪穴群"についての記述、

「全部同時代のものではないのは勿論であって、土師器の相当古いと思われる「壺を伴うタイプ」割合に新しい「祝部と伴出する大形の甕を持つタイプ等」の如き幾つかの型式と認められる土器群が、それゞ単独に出土する竪穴が、この竪穴群中に多数存在して居る。」（奥田1936,8 p39c3ℓ20～p40c1ℓ4）

から、それぞれ古墳時代の土師器二大別の壺を伴うタイプと甕を持つタイプの事であろうと考えられる（表8）。この様にして、必ずしも明示的には取り扱われていない奥田氏命名の川島出土の土師器の型式について、ある程度の復元をして行く事が可能である。

表8　奥田氏の土師器型式
1936年8月仮称の復元案（暫定案）

型式名	型　式　内　容
川島A式	古墳時代前半の壺を伴うタイプ
川島B式	古墳時代後半の甕を持つタイプ
川島C式	古墳時代末～奈良朝の土師器

尚、杉原荘介氏による土師器の型式の初出は、鬼高式、須和田式の設定に係わる1938年11月であり、従ってこの奥田氏の川島A式～C式という設定は提示方法が客観性を欠いているとは言え、それに2年以上先行するものである。

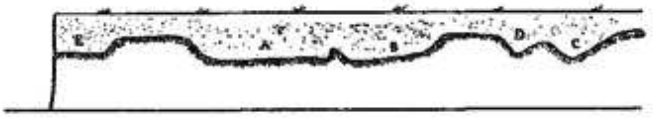
（二）の中では、先の一括性への懐疑に基づいて、更にこれを説明する実体の想定が為されている。ここでは、竪穴住居址からの寛永通寶の出土を例に取って覆土内の攪乱について触れると共に、

唯一つ此処に興味があるのは、竪穴に於いて最心を許せないのは、其真中辺の品物である事で、今迄に出た夫等のいかがはしい物の大部分は、例え底部でも中央近くで発見された。僕がもと居た家の裏庭に、竪穴式に掘つた芥溜めめがあつたが之を注意して見て居ると、捨てられた芥は縁から崩落ちる土と一緒に、何時も摺鉢形に隅から積つて行つて、真中丈が最後迄残されるのが常であった。案外こんな理由で、中央部丈が比較的新しい時代迄凹んで居たのか、或ひは何かの機勢みで品物が落ち込み易すかつたのかも知れない。（奥田1936,9 p30c3ℓ3～16）

としている。安易に実体を持ち出しこれの類型化を行う事を目的とする今日の廃棄論とは異なり、住居址覆土内出土遺物の一括性を問う基本的な論点の提示である。ここでは、先に触れた分布論的同一性の相対化が明示的に行われている。即ち住居址覆土の一括資料も、覆土中の場所によっては一括と考える事が危険であると言う指摘である。

（三）では、今まで認定して来た型式について、遺構の切り合い関係から更に検討が行われている。ここでは複数の切り合った住居址とこの中からの出土遺物について、

驚いた事には其殆ど全部が頗似通つた型式であつて、川嶋あたりで今迄一型式と考えて居た仲間なのである。後でどうやら竪穴AとDのもの、BとCのものが同一期の製作らしい事を、皿の破片と混り具合によつて判断する事が出来たが一



第7図　竪穴の切り合い

見した丈では、一寸区別の認め得ない程、年代的にも型式的にも接近して居るものであつた。

然し此の場合、A、B、C、Dが全く同一期の土器であるとは、其掘られて居る状態から推して、勿論考へる事は出来ない。AとBはまだしもCとDは約三分の一以上相重つて居るのであつて（断面の三角形なのは、斜に削り取られて居る為）、後の二つ（先づ之は同時と見てよい恐らくBとC）が掘られた時には、当然前の二つは大部分埋まつて居たものと考へなければならないであろう。

即ちかうした近い型式、換言すれば短い期間の中にも、其集落が一時中絶したらしい痕跡が窺はれるのである。（奥田1936,12 p42c2ℓ1～c3ℓ14　第7図）

と述べられている。ここでも、型式内移動の検出に関わる論点の先取りとも言える内容が、既に示されている。同一型式と認められるものを覆土中に含む住居址どうしが切り合っていると言う指摘は、型式論的同一性から導かれた視点が、再び分布論的同一性によって差異化されている事に他ならないと言えよう。つまり（二）によって、分布論的同一性の相対化で成立した型式論的同一性が（三）によって再び分布論的同一性で相対化されると言う、複雑な認識の過程をそこに認める事が出来る。この様に見て来ると、比較的軽い口調で書かれている奥田氏の三篇には、実は分布論的同一性と型式論的同一性について、相互による相対化を図りつつ認識の次元を高めて行くと言う複雑な論理構成を認める事が出来るのである。

たしかに、ここで述べられている視点を単独で取り出して現在の視点から観るならば、別段斬新なものでは無いかもしれない。しかし、これが発表された時点での学界全般の学史的位置を考えて見ると、この奥田氏の認識が卓越したものである事が理解される。逆に、現在の我々がこの奥田氏の認識に不自然さを感じないとすれば、現在の我々の認識の起源が、実に山内氏や奥田氏等がミネルヴァ論争を契機として展開した一連の研究戦略の上に位置しており、それがミネルヴァ論争で獲得された成果の賜である事が理解されるのである。

5節　小結

山内氏、奥田氏の研究は方法論的に裏付けられたものであったが、これらの方法も正当に評価され受け継がれる事はなかった。

土師器の編年を行うにあたって、山内清男氏、並びに奥田直栄氏によって採用された方法を、分布論／型式論、同一化／差異化、個体の関係／関係の関係、と言った視点で分析して見るとその構造を明瞭に理解する事が出来る。

山内氏にあっては、

①一括資料の検出　　（分布論的同一性：個体相互の関係）

②一括資料での須恵器の共伴の有無からの土師器の分類

（分布論的差異性：関係相互の関係）

③須恵器の共伴の有無から分類した土師器の形態的特徴の抽出

（分布論的同一性：個体相互の関係）

④形態的特徴が同じ土師器の、須恵器の共伴の有無からの再分類

（分布論的差異性：関係相互の関係）

となっており、奥田氏にあっては、

①山内氏の土師器二大別の両者は共伴しない

（分布論的差異性：関係相互の関係）

②山内氏の土師器二大別は連続的に推移する

（分布論的同一性：関係相互の関係）

③形態的特徴の二者（壷、甕）は変遷する。

（型式論的差異性：関係相互の関係）

④住居址覆土の一括性の問題・・・・（分布論的差異性：関係相互の関係）

⑤同一型式を覆土中に含む住居址相互の切り合い

（分布論的差異性：関係相互の関係）

と言った過程を経ている（注12）。

特徴と言えるのは、両氏とも端緒に於いては型式論に対して必ず分布論が先行し、且つ型式論的に提示された視点は必ず分布論的に相対化が行われていると言う点である。改めて述べるまでもないが、分布論的手法は型式論的手法に比した時その分類が相対的に容易で、尚且つ分類相互の関係（関係相互の関係）を決定する事も容易である。分布論に於いては、少なくとも切り合いを持つ土層や累重した土層に含まれる分布の場合には、他の分布から分布形成期の上限或いは下限を設定し得るのである。そして多くの場合は、この分布の形成に係る時間的な新旧関係の把握を行い得るのである。ここに分布論的手法の有利さがあり、この事によって研究端緒段階での資料に対する分布論的取り扱いの重要性が理解される。このような意味に於いて、山内清男氏や奥田直栄氏による土師器編年での資料の取り扱い方法は、研究端緒段階としては理に叶ったものであると言う事が出来る。或いは逆に山内氏や奥田氏の方法こそが、土師器編年研究の端緒を切り開いたものであるとも考えられよう。

編年研究に於ける分布論と型式論の相互相対化による認識発展の手続きは、今日の閉塞状況の編年研究に対して重大な示唆を与え得るものである。尚且つ、編年研究にとどまらず、遺物の出土状態に関する研究や移動論、そして分布論や型式論そのものについても十分に参考となるものである。それは、山内氏等の考古学としての研究に体系性が認められ、この体系に支持された方法が実際の分析で採用されているからに他ならない。今、改めて研究史が問直され、山内氏の足跡が追跡されるのもこの様な理由からであろう。山内氏や奥田氏によって提示された論点は、土師器の大別と細別の方針にとどまる事なく、広く遺物研究全般の根幹に関わるものであった。奥田氏は後年の他の研究者に見られる様な、憶測や安易な実体の想定「早発性解釈」（山内1939,12 p46ℓ36）を行う事なく、何よりも資料に対して分析的に合目的的な方法で対峙している。私達はそこに、未だ学ぶべき多くの点を有していると言えよう。

かつて喜田貞吉氏は、ミネルヴァ論争に於ける主張の裏付けとなった自身の方法について、後に

「瞥見考古学」（喜田1936,9 p32c3ℓ22）と自嘲的に表現した事があった。山内氏や奥田氏は「瞥見考古学」に陥る事なく、正規の発掘で得た資料を順当な方法で取り扱った最初の体系的な土師器研究者でもあった。

本来ならばこの山内氏や奥田氏の変遷観によって、古墳時代の土師器は三つに、土師器全般は五つに分類され、同時に提示された適切な方法から該期の編年作業に幾らかの見通しがつけられる様になるはずであった。これらの奥田氏の論考は、一定数の読者を確保していた雑誌『ミネルヴァ』に幾度か掲載されたが、その研究は編年論を主題としていなかったので、論考中で触れた遺物について図面の掲載が為されておらず、当時の土師器の実測図が殆ど出回っていない状況と相俟って検討対象の無いまま今ひとつ一般に流布する事が無く終わってしまった。それは、一方では戦術的な見通しの誤りであると同時に、当時の学界全般の論理的基盤と山内氏や奥田氏によって提示された方法や論点に今日想像される以上の大きな隔たりがあったからとも考える事が出来る。唯、少なくとも山内氏や奥田氏の研究では分析方法が明瞭に意識されており、分析対象に対する合目的的な方法の適用によって分析が為されているところがそれ以前の研究と大きく異なっている点であり、その点に於いて前述した様に土師器編年研究史の上に一線を画して両氏の研究を位置付ける事が出来る。そしてこの様な意味に於いて、両者の研究を科学的であると表現する事が出来るのである。

ここで再び注意を喚起しておきたいのは、1930年代に杉原氏の研究以前に既に正規の方法が提示されている事実である。一方ではこの正規の方法は研究史の中で忘却され、その一部は戦後に再生されたものの、依然として土師器編年研究が定式化されておらず、編年も完成していない。考古学が健全に発達していない事を明示する出来事であると言えよう。今、ここに述べた一連の研究の存在は、多くの土師器研究者にとっては予想もしなかった内容のものであろう。我々は、これらの研究が今日まで土師器研究史の中で正当に評価される事なく、触れられる事さえなかった点について考えてみる必要がある。正規の方法に基づく山内氏等の研究の存在は、同時代の研究者からは黙殺され、後年の研究史の執筆者等によっては隠ぺいされているのである。

ここに取り上げた山内清男氏及び奥田直栄氏の一連の論考は、土師器に触れた部分だけを単独に取り出して見たとしても土師器編年研究史の第一頁にふさわしい内容のものであり、1930年代中頃から展開される杉原氏の諸研究に比して遜色のない、そして大部分で先行しているものなのである。これら山内氏等の論考は先にも述べたように、学界動向の中で縄文時代の終末について、弥生式時代と古墳時代の関係について、土師器の編年について、或いは、考古学的な正規の遺物操作について、等の多くの事についての山内氏等の総合的な研究戦略の基に、一連の運動として展開されて来たところに最大の意味があると言えよう。

尚、本文で取り上げたもの以外にも、土師器の年代等について言及した文献（注13）が幾つか散見される。

注釈

（注1）　先史考古学に於ける山内清男氏の体系、或は考古学の理論的側面について、大塚達朗氏

の指導を得た。但し、解釈上の誤りは筆者にその責がある。

（注２）　他に、古墳出土の土師器の検討があげられる。

（注３）　「日本遠古之文化」五（山内1932,11）の中には、「現在に於ける古墳時代の知識は、大部分この古墳から知り得たものであつて、縄紋式が集落遺跡の調査の上に立つて居るのと著しい対称である。」（p61c3ℓ1～4）と言う記述がある。又、一方では、『日本遠古之文化』の補注の中で「自分は当時僅少であつたが東北及び関東の土器によつて仮にこの区分を思ひ付いた」（山内1939,12 p45ℓ33～34）と言った記述も認められる。

（注４）　山内1939,12 p45ℓ34～37に、この発表を行った事が述べられ、対応する記事がミネルヴァ創刊号の学会往来（p47）の中に認められる。大塚達朗氏の御教示を得た。

（注５）　当時、この弥生式と土師器の境界をめぐっては『ドルメン』誌上を中心として、主として山内氏と森本氏の間で論争が行われている。又、この問題と平行して縄紋式と弥生式の境界についても両氏によって論争されている。所謂ミネルヴァ論争を取り巻く学界の状況の一端として、或いはミネルヴァ論争の争点そのものとして理解しておく必要があろう。尚、前者については藤森氏の「弥生式土器と土師器との限界は近時学界を賑はせた議論の中心である」（藤森1941,11 p8ℓ6）と言った記述がある。

一連の論争の中で山内氏は、

仮に縄紋式以後古墳時代末までの土器を大別すると次のようになる。

一、弥生式（石器時代）

二、弥生式系の土器（石器を伴はない。古墳時代前半、鉄器時代）

三、弥生式系の土器。祝部土器を伴ふ。（古墳時代後半）

元来弥生式土器は関東地方の一型式に興へられたのであつたが、その意味は年代的にも地方的にも拡大されて、現在では収拾に困難な程漠然とした名称になつた。前記一－三の弥生式又はその系統のものを皆弥生式とする人もあり、一－二を合せて弥生式とする人、二－三を合わせて祝部土器又は土師器とする意見もある。しかしながら、前記の如く一、二、三の三段階に分け、各々の特徴を捕へることが必要である。（山内1932,12 p49c1ℓ16～c2ℓ7）

として学史的な理解を確認し、弥生式土器文化の後に古墳時代文化が位置付けられ、両者は並行するものではない事を明瞭に提示した。このドルメンに連載された「日本遠古之文化」の中の一文に対して、これを受けた森本六爾氏は、

縄文系の学者中にも、此の弥生式側からの提案あるに拘はらず、依然として日本遠古の文化は内地が一様に縄紋系から弥生式系に移つたとの「無邪気な慣用語」に籠つて、縦横の論を進める人も少なくないやうである。其れで私は今少し具体的に例を遺物に求めてこの問題を提出して置きたい。従つて此の小稿の目的は問題の提出であつて、問題の解答ではないこと、又問題の解答には別に正当の手続きが要ることを予め断つて置きたい。

縄紋式系もさうである様に、弥生式系遺物も亦研究の歴史を持つてゐる。弥生式系

遺物（以下弥生式と略称する）の概念を学史的に理解（或は整理）することなく単に机上で、狭義の、広義の弥生式があれこれと呼ぶ人がある。其れ等の人には弥生町式弥生式土器が狭義の弥生式で、其他の多くが広義の弥生式と呼ぶものになるらしい。しかし、斯様な区別を現在に於て立てることは、学史的に見て滑稽な程過去の弥生式研究への知見の少なさを告白するに過ぎない。弥生町式弥生式土器が弥生式の一部であることは、弥生式研究の初期から注意されてゐた。現在では云ふまでもなく弥生式の極く地方的な一様式に過ぎない。本文で云ふ弥生式は、吾々が共働者と共に今日到達した概念に拠る、弥生式系文化遺物の系列を指すは無論である。次に祝部式文化といふのは、所謂古墳の文化を指すもので、其の系統の遺物を、祝部式系遺物（略して祝部式）と呼んで、本文を進めたい。これは私の用語に対する「附註」である。（森本1933,1 p7c1ℓ7～c2ℓ12）

として、縄紋式時代の有る部分が弥生式系文化と祝部式系文化に接触していた事を明言している。更に、

東日本、特に関東及び東北の縄文時代の或時期に於ける、弥生式祝部式の要素の摘出は、二つの方面でされるやうである。其の一つは一遺跡の同一文化層中に、縄紋式と弥生式、或は祝部式の共存することを指摘する事によつて、も一つは縄紋式一遺物そのもの丶中に弥生式又は祝部式の要素を具備してゐることの指摘である。最初の場合に於ては従来、後世に於ける遺物の混合と解し去られ勝ちであつた。後の場合に於ける要素の決定には、最初から工藝趣味的に文様を重視した従来の観念を放棄してかゝることが必要である。（同 p8c1ℓ11～19）

としてその根拠を二種類に分類し、分布論的方法と型式論的な方法に対してそれぞれ問題を指摘した後、分布論的な証拠として、

先づ土器から見よう。第一の場合では、昨年十二月号に徳富武雄、中根君郎両氏が報告された常陸女方の遺跡は薄手式の末期、所謂「安行」式が特徴づけ代表する遺跡であるが、一群の弥生式土器片が摘出されてゐる（人類学雑誌四七ノ一二）。徳富君は常陸上高津の薄手式を主体とする貝塚から弥生式土器を検出した（考古学一ノ三）同國飯出貝塚も、縄紋式・弥生式・及び両者の中間式を出しまた一顕すべき貝塚である。坪井正五郎博士によつて報告された弥生町（向ケ岡）の貝塚にかの有名な弥生式土器が薄手縄文土器と混在してゐたのであつた（東洋学藝雑誌）。祝部式土器の方では陸前國桃生郡小野村川下り響貝塚から縄文土器と共に（脚部に透しのある）高坏形祝部土器の脚部の切断されたものが出てゐる（杉山壽栄男氏蔵）。又所謂「安行式」によつて特徴付けられる武蔵真福寺遺跡からは、未だ報告されないが、田澤金吾君に依れば祝部式土器が出てゐる。神奈川県菊名の貝塚では、薄手縄文土器初期の層に弥生式土器及び祝部式土器を伴つてゐた（據田澤氏）。（同 p8c2ℓ5～20）

をあげ、続いて型式論的な根拠として、

第二の場合では、巴里ルーブル美術館には、陸奥國十腰内出土遺物廿七点中の一に、

明かに古墳時代の即ち祝部式袋形土器の形をもつた所謂「亀ケ岡式土器」がある。関東では「安行式」及其の前の「加曽利B式」等には明かに祝部式土器の坏の形を採つてゐるものが、東大人類学教室蔵品中に若干例見られる。下野の野沢の土器に到つては、かの有名な顔面附土器の顔面が、其の地方の埴輪土偶の焼成及び表現に近い。八幡一郎君の如き、私達の指摘した顎をしやくつてゐる顔面、又竹管文のある後頭部の特徴から、これを肯定されたやうに記憶する。一方この地方の埴輪土器の土偶の表現に、縄文土器の要素を持つてゐるらしいのと併せ考へるべきであらう。而して此の土器が、一方では所謂「安行式」の土偶と、顔面に若干の類似があると云はれてゐることも注意してよいのではなからうか。野沢からは平織の布の圧痕ある土器片が出てゐる（八幡一郎氏人類学雑誌四六ノ九）。これらの平織の圧痕及土製紡錘車の縄文土器中に於ける有無の検索は、（農耕と関係ありと思はるゝ石器と共に）、弥生式、祝部式の要素の摘出の問題と密接な関係を持つてゐるものとして、今後注意すべきである。野沢からは別に祝部式土器の坏の形を襲つたものが出てゐる（東大人類学教室蔵）。
（同 p8c2ℓ20～p9c1ℓ17）

とし、更に金属器、石器、玉類、漆器について、共伴例等をあげて縄紋式と弥生式系或いは祝部式の一部の同時性を主張している。又、2年後には、

学史の素養のない徒輩は、石器と伴ふもののみを弥生式土器と僭称するが、弥生式土器はかくの如き様式の外に、石器を伴はぬ様式もあり、縄文土器の中に誤り入れられてゐた様式もある。（森本1935,6 p87ℓ13～16）

として、石器の有無で縄紋式文化と弥生式系文化を区別する事が出来ない点についても明言している。

又、小林氏は

今とりあげてゐる小型丸底の土器が登場するのは、丁度かうして確立せられた夫々の地域的様式が相互に浸透し合つて、類似の道へ共通の路へと向ふ様に舞台が出来上つた時である。様式を一の動態現象と見る立場からいつて、弥生式土器の第三の様式の時期に当るわけである。（小林1935,1 p2ℓ16～p3ℓ1）

として、全国的な土器の様相の類似を、弥生式の第三様式として位置付けている。

これに対して山内氏は、

尚杉原荘介氏は独自の研究により三つの区分（前野町式・鬼高式・須和田式：大屋注）を試みて居るが（人類学雑誌53巻、昭13年）、追加改編を要すると思って居る。一方森本六爾、小林行雄氏等東京考古学会側では古墳時代前半の土器を弥生式に編入して居ったのであり、これは同会が古墳時代を祝部時代と称して居る事と甚だ調和して居ったのであるが、最近に於いては暗黙のうちに古き土師器を弥生式から離さうとする傾向が見られるのである。これは大変結構なことである。（同会発行弥生式土器集成図録昭13その他）。（山内1939,12 p46ℓ4～10）

として、先に掲げた小林氏の型式観の誤りを指摘している。

杉原氏は

先づ先史時代・原史時代の時代概念は、前者は文献の全くない時代、後者はそれがあつても不完全な時代と云うのであつた。これは考古学的時代区分を文献的立場から説明したものであつて、自己撞着も甚しいものである。それでこの時代概念は考古学的に再び規定せられなければならない。考古学的に規定せんとすれば誰もが考へる様に石器の使用如何が問題となり、殊に縄文式文化の後行的文化として弥生式文化の石器使用期の最後が考へられよう。又或るものは石器使用期のみを弥生式文化と称へんとするであろう。然し弥生式文化に於ける石器使用の問題はその両時代を区分する程重要ではないのである。即ち弥生式文化に於ては、最近種々の証拠より日本に於けるその文化の当初より金属器があつたらしいのである。唯それが普及されてゐたか否かゞ問題なのである。それで弥生式文化の石器の有無の問題は、石器の消失が金属器の開始を意味するのではなく、石器を使用しなくてもよくなつた状態即ち全体的に見て消極的に解される処の意味に過ぎないのである。（杉原1940,1 p19ℓ14～p20ℓ4）

と言った考え方を表明している。

藤森氏は、下蟹河原に於ける土器のあり方について、

未だ所謂坏としての分化を見ない椀等を包含した一群の古式土師器が、殆ど弥生式土器として疑ひない二三の壺形土器と共存（藤森1939,11 p562c1ℓ16～c2ℓ1）

としており、同地方に於ける弥生式末と古墳時代初頭とみなした土器群の存在形態について並行するものとして捉えていたが、後に立場を補正して、

弥生式土器と土師器との限界は近時学界を賑はせた議論の中心であるが、結論は何れも石器伴出の有無、轆轤使用の有無等の理由では解き得ないものがあると云ふに過ぎない。土師器そのもの呼称が後の王朝の故制に依つての甚だ便宜的なものであるにも拘らず、その上限を極めるべき議論は、精緻なる科学の理論に依つて甚だ感覚的なロマンを説明しやうとするにも似た愚かしき業である。末期弥生式土器の形式細分の完成が先づ第一に必要であり、之に弥生式土器と土師器との限界を設けるべき必要あるものとするなら、一定の条件の下に比較的飛躍を認められる二形式間に一線を画する便宜的な約束の外にあり得ないであろう。今吾々の間に於ては、杉原荘介氏の提唱する関東の前野町式と和泉式の間にこの一線を認めやうとしてゐる。（藤森1941,11 p8ℓ6～14）

としている。

但し、これらの引用文には発表時の年代差があり、山内氏のものは土師器自身が全く不確定なその編年研究黎明期のものであり、藤森氏のものは既に幾つかの型式設定が為されたその後のものである点、そして何よりもミネルヴァ論争に象徴される学史的な背景に特に注意されたい。

山内氏が、弥生式と土師器の弁別について石器の有無に言及したのは、弥生時代を石器時代として、鉄器時代である古墳時代とのその社会の根本的な差異に注目して、広域的に

編年を可能とする唯一の方法として提示したのであって、同時にそれは当時弥生式と土師器について各人各様に行われていた経験的な分離と、その上に立つ並行論に対して客観性を持った遺物からの分期の方法として提示したものであったと思われる。

(注6)　山内氏は山内32年案についてその提出当時を回顧して、1939年の『日本遠古之文化』の補注の中で「自分は当時僅少であつたが東北及び関東の土器によつて仮にこの区分を思ひ付いた」（山内1939,12 p45ℓ33～34）としているが、山内32年案を提出した『ドルメン』の連載で、「日本遠古之文化」五の文中には「現在に於ける古墳時代の知識は、大部分この古墳から知り得たものであつて、縄紋式が集落遺跡の調査の上に立つて居るのと著しい対照である。」（山内1932,11 p61c3ℓ1～4）と言った記述が認められる。しかし当時の古墳研究或いは古墳出土遺物研究の成果について山内氏が全く無知であったとは考え難い事から、少なくともこれらの成果の一端は土師器二大別の参考になっていると考えられる。

(注7)　山内1939,12 p45ℓ37～38

(注8)　これは、ほぼ同じ時期に発表された杉原氏の観察と対象的である。杉原氏は、久ヶ原遺跡出土土器の第三類（従来埴部式土器と称されてきたもの）について、「器形は甕形・坏形及び高坏形が発見されて居る。文様は全く見られない。器面には明に轆轤使用の痕跡を認める事が出来る。」（杉原1935,7 p334ℓ15～16）として、土師器器面の成形痕跡に対して轆轤の使用を推測している。

(注9)　この小松氏とは東大専科での山内氏の先輩にあたる小松眞一氏の事で、小松氏の落合の例とは、小松1924,11 を指していると考えられる。

(注10)　但し、山内氏が行った土師器五細別は、筆者が想定した様な土師器全般に対する五細別ではなく、古墳時代の土師器についての五細別であった可能性もある。

(注11)　この甕による大別の年代交差と地域差と言った視点については、1950年代に資料の蓄積が為され、広く具体的な検討が可能となり再提起されたと考える事が出来る。

(注12)　但し、奥田氏の操作の内、②については分布論的同一性として片付けてしまうには問題がある。奥田氏の言わんとする事は理解できるが、方法に多少の問題が残ろう。

(注13)　この他にも、和島誠一氏の論考（和島1938,9等）等に土師器の細別に関する記述が認められる。和島氏は東京志村の竪穴住居址について、

> 殆んど全部が土師器と須恵器とを伴出する原史時代のものである。未だ土器の精査を行っていないが、一般に土師器としては長手の甕と皿とが目立ち、壺が少く、高坏は例外的にしかない。これに伴う須恵器は皿が普通であり、坏・壺・甕が稀に見出されるに過ぎない。ただ、A－十六の土師器は長手の甕もあるが壺が多く、他の多くの竪穴出土のものと異った類として分けられる様である。C－三からは台附壺を出しているが、これもA－十六の類に近いと思われる。（和島1938,9 p2ℓ2～9）

としており、そこでは先の山内氏や奥田氏と全く同様の見地からの土師器の細別が認められる。又、文末の教示者の中に山内氏の名前を見出す事が出来る。山内氏はこの当時、多くの研究者に土師器の編年について教示している様である。

第3章　杉原荘介氏による諸型式の設定：1930年代後半～40年代前半

1節　杉原荘介氏の端緒的操作が内包する諸問題

30年代の後半から40年代の前半にかけて杉原氏等によって、土師器についての幾つかの型式設定が行われた。しかしこの中では、前述した山内氏等の成果には触れられる事がなく、尚且つ、山内氏等によって実践された合目的的な研究法の適用も欠落して行き、曖昧な感覚的方法にとってかわられる事となった。

1930年代の中頃から杉原荘介氏を中心とする人々によって、幾つかの具体的な資料が標準として提示され始めた（注1）。そしてそこでは結果的に、或は恣意的に（注2）前述の山内氏等の見解に沿って土師器が祝部との共伴関係から2者、或は3者に大別されている。しかしこれらの中では山内氏等の所説が引用される事はなく、或いは奥田氏の見解に見られた研究上の手続きや、甕の形態変遷による細分にまで論及される事もなかった。山内氏等の見解或いは方法については、何故今日まで無視され続けて来たのか不思議である（注3）。唯、杉原氏等が甕の細分に言及しなかったのは、この段階で標準として提出された遺物群（型式設定に関わる遺物群）が厳密な一括性に乏しかった事に起因していると考えられ、尚且つ、壺と甕を基軸として編年研究を進めていた、山内氏や奥田氏に対する関係上の事である可能性も考えられよう。戦間期の杉原氏の編年体系の中では、壺や甕に対する言及或いは検討が避けられる傾向が強く認められる。

山内氏や奥田氏が土師器の編年研究で見せた方法は、初めに分布論的同一性を提示し、次いで型式論的同一性でこれを相対化し、更に二つの契機を相互で相対化しながら分類を行ってゆくものであった。しかし杉原氏に於いては、分布論的同一性の契機を著しく欠いた偏った型式論的同一性が主張されている事をその特徴としてあげる事が出来よう。例えばそれは鬼高式の提唱に当たって、鬼高式一類、二類、三類、として設定した三つの類の取り扱いの方法を見れば一目瞭然である。

尚、杉原氏の分類操作についても、分布論的同一性の契機が全面的に欠落していた訳ではない。唯、杉原氏の操作に認められる分布論的同一性は調査区としての一括性であり、対象に対する「単純遺跡」と言う仮定に立脚する傾向が強く認められ、それ自体何等限定性を持たないものであった。分布論的同一性の保証は絶対的なものではない。しかし、重複した土層や切り合い関係を有する土層の中に含まれるものとしての分布は、他の分布によって上限、或は下限を設定し得る様に相対的な限定性を有するものである。それ故に、端緒に於いては先ず分布論的同一性の確認が先行して為されるべきであり、次いで型式論的同一性が検討され、その後に相互相対化が為されるべきである。この様に、杉原氏の方法はその立論の端緒に於いて既に問題点を多分に内含しており、これを研究史の出発点と見做し、これ以降意識的な形で方法論上の問題が提起される事が無かったところに今日の土師器研究の大きな問題点があると言う事が出来る。

分布論的同一性を巡る取り扱いについて、この当時の多くの報告では調査区内の資料を一括して扱っている事が特徴的に認められる。この様な調査区全体からの出土遺物を一括して取り扱う姿勢

については、その学史的な形成過程が注目されるところである。即ち、先史考古学の中でも縄紋土器の研究にあっては層序の中に含まれるものとしての分布を基本として、この前提の中で各々の遺物について型式論的な分類と検討を行う事により諸型式の設定が行われて来た。一方の弥生式の研究に於いては、縄紋式の研究法を基礎としながらも先験的伝播論の中で次第に分布論的な同一性が閑却され、これが「単純遺跡」と言う仮定に置換されて行ったのである。この様な背景の基に、土師器の研究では「単純遺跡」の仮定に立脚し、分布論的な検討の契機を欠いた型式論的な契機のみの研究が実践されて行く事となる。当時の東京考古学会を中心とするこの様な研究は「単純遺跡」を見い出し、この遺跡自身に文化内容の伝播と型式内容の変遷過程上の意味付けを積極的に進めて行く、様式論的思考と表裏一体のものであると考えられよう（注4）。そしてこの様式論的な思考は、今日問題として取り沙汰されている調査区全体を静的な集落景観とする見解の根源であるとも言えよう。

又、杉原氏は少なくとも1940年には原則としては伝播論を否定する立場に立ち、これに置き換わるものとして播布性の概念を提唱している。しかしながらそれ以前に発表された諸論考、及び同年発表の報文に到っても、森本氏以来の東京考古学会に伝統的な伝播論的発想を認める事が出来、これを払拭するには到っていない。弥生式の研究に於いては一定の成果をおさめたと考えられている様式論的手法も杉原氏による土師器編年研究への適用を見る限り、後年の混乱した研究に対する出発点としての評価を下さざるを得ないものである。杉原氏による一連の型式設定は、従来の様に無前提に顕彰されるべきものではなく、このような前提のもとに方法論的に検討を加えられるべき性質のものである。そしてこの様な杉原氏による諸研究とは対称的に、山内氏等によって提示された正規の方法は、この時期以後の土師器研究に於ては全く省みられる事が無くなってしまうのである。

以下では順を追って、杉原氏の戦間期の土師器研究を検討して行く事にしよう。

2節　須和田遺跡と杉原荘介氏の方法

杉原氏の須和田遺跡を中心とした土師器に関する論考の中に、幾つかの原則的な問題点を見出す事が出来る。

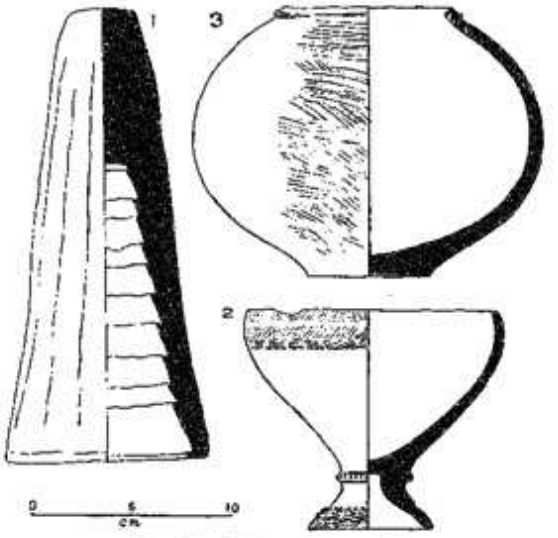
杉原氏は1932年4月及び6月、雑誌『武蔵野』誌上に「下総東葛飾郡国分村須和田弥生式遺跡研究摘要」と題した上下二篇の論考を掲載している。その上篇では須和田遺跡発見の竪穴住居址の分類と編年等が為されており、下篇では須和田遺跡の年代が検討されている。

これ以降、須和田遺跡に関する記録が研究史上に幾つか見られる様になる。

当時の須和田遺跡について、1934年に八幡一郎氏が『人類学雑誌』に於いて「下総国須和田の弥生式土器」として資料紹介した冒頭で、「下総国東葛飾郡国分村須和田の諸貝塚は武蔵国南加瀬貝塚と共に、関東地方の弥生式貝塚として早くより知られ、且つ重要な遺跡である。」（八幡1934,9 p42c2ℓ3～7）と記しており、学界では比較的古くから著明であったらしい事が解る。同文中での資料紹介は、第8図の土器を須和田発見（1、2は国府台女学校の渡辺省三氏発見、3は東京大学人

類学教室蔵、又、図示はされていないが稲生典太郎氏発掘の側縁に縄紋を持ち底部に布圧痕をもつ土器底部にもふれられている）の遺物として為されており、その年代的な位置付けでは、

> 1乃2と3乃既述土器底部との間には型式上の距離乃至異質性が存する。距離とは年代的な差であり、異質性とは前者が純然たる弥生式、後者が縄紋式の遺制を併せ有することを指す。須和田遺跡と呼ばれる内には弥生式土器と祝部土器とが存し、しかも弥生式土器自身の内にも型式上の新古が認められるらしい。（同 p44c1ℓ15～c2ℓ5）



第8図　須和田出土の土器

として、須和田貝塚出土遺物が三分期（弥生式土器古、弥生式土器新、祝部土器）される事を述べている。そして、「如上の問題をより確実に具体的に論証する為には諸貝塚乃之を含むところの須和田遺跡の正しい調査が要望される。」（同 p44c2ℓ14～17）と締めくくっている。

これに対して、森本六爾氏が同誌翌月号に「下総須和田の土器について」と題した論考を掲げ、

> 須和田の集落遺跡は今年7月杉原荘介君の厚意によつて踏査し、同君等の発掘に係る多量の土器類を中島弁智氏の御宅で実見した。其等は凡そ3様式（3期）に分たれる点で興味を惹いた。目下杉原君が鋭意調査中であるから、他日同君によつて詳細が報ぜられるであらう。八幡君の報告は、以上の事情で注意して読んだ。（森本1934,10 p39c1ℓ26～c2ℓ26）

として状況を述べると共に、八幡氏の掲げた遺物に対して逐一論評を行っている。この中で、1については「須和田では杉原君発掘品中の恐らく第2期に相当」するとし、その用途について「ハツキリ云へば煮沸器に対し五徳の如き用をなしたものの一部であらう。」（同 p40c1ℓ7～16）とし、2については八幡氏が言うように壺ではなく、その年代についても「これは杉原君発掘品中の第1期に属し、上述久ヶ原及び上練馬例と伴行し、南関東の古式弥生式たる久ヶ原式の系統に相当するものである。」（同 p40c1ℓ27～31）としている。又、八幡氏の言う「縄紋式の遺制を併せ有する」（八幡1934,9 p44c2ℓ1～2）弥生式については、「単に須和田に限らず、伊勢湾以東の古式弥生式土器が、それ以西の地方に比して特に、縄紋式土器末期の影響を受けてゐることは今や学界の常識となつてゐる。」（森本1934,10 p40c2ℓ24～28）として、

> 一例として南関東の古式弥生式たる久ヶ原式系統のものをとると、其のA類（煮沸形態をA類と呼称：大屋注）の一型式に底部に平織の圧痕あるものを含むところの、B類（貯蔵形態をB類と呼称：大屋注）施文には多少縄紋式の所謂堀之内式末期等と関係する所が見出され、吾々の間に於いては施文に於ける久ヶ原式B類と堀之内式との関係の解明が当面の問題の一となつてゐる程である。（同 p41c1ℓ20～28）

等と極端な解釈を取りつつも、「八幡君図2と図3及び該土器底部との差は両者共に強弱ながら縄紋式の手法の影響をうけてゐる点で、量の問題であり、質の問題でない。」（同 p41c2ℓ5～9） としている。尚、第3期については、「第3期は更に新しく、往々にして文字ある坏を伴ひ、或種の竪穴生活者に文字の及んだ時期のものである。」（同 p40c2ℓ7～9） と記述している。そして、「言はんとする所は挿図1と2との間に明瞭な一線を画すべく、図1と2との距離は図2と図3との距離よりも遙かに大きいであらうといふことである。」（同 p42c1ℓ11～14） と締めくくっている。

先の八幡氏の見解では須和田遺跡の内容は、

・弥生式土器古

・弥生式土器新

・祝部土器

の三者であるとされていたが、この森本氏の見解では、

・第1期（久ヶ原式の系統）

・第2期（弥生式系（土師器を含めて））

・第3期（或種の竪穴生活者に文字の及んだ時期）

であるとされている。

この様な状況の基に、待望の須和田遺跡の研究が杉原氏によって発表される事となる。

杉原氏は、1935年6月に東京人類学会の第 488回例会で「下総須和田遺跡の調査を終りて」と題する講演を行った。講演の内容は、翌7月の『人類学雑誌』の「会報」中に杉原氏の手記の形で掲載されている。この手記に拠れば、須和田遺跡の出土遺物は「竪穴式住居趾の重接せる事実により、本遺跡には大体三期の大きな時期があることを知り得た。」（杉原1935,7 p43c1ℓ23～26） として、「本遺跡に於ける第一期即ち弥生式の時代、第二期は古墳築造の行はれた時代、第三期は奈良朝から平安初期の時代に大体相当すると思われる。」（同 p44c1ℓ5～8） とし、先に森本氏が触れた分期の内容について更に明確に規定している（表9）。ここでは須和田遺跡出土土器の大別にあたっては、分布論的な差異性から検討が行われていた事が理解される。そしてこの発表で、先の森本氏の論中で明瞭さを欠いていた須和田遺跡の第二期、第三期の年代的な位置付けが提示された。これについて土師器の編年の上で特に意義を認める事が出来るのは第二期と第三期を分けて捉え、住居趾等の特徴にも言及した事であろう。但し、第二期、即ち古墳時代の土師器については既に山内氏によってより詳細な分類が為されており（1932年）、第三期の遺物についても森本六爾氏が、既に1926年に「武蔵国荏原郡馬込村の一横穴」の中で漠然とではあれ言及しているのである。

表9　杉原氏の第488回人類学会講演での分類

時　期	時　　代	住居趾などの特徴
第一期	弥生式の時代	角が非常に丸みを持った矩形炉趾も明瞭
第二期	古墳築造の行はれた時代	住居趾が非常に制定　明らかに短形　中央に炉趾がある
第三期	奈良朝から平安朝初期の時代	規模としては非常に退化　その中に炉趾の認められる

この第二期は後の鬼高式となり、第三期が後の須和田式、そして更に真間式、国分式へと改称されて行く事となる。又、杉原氏は、この須和田第二期（後の鬼高期）の住居趾の特徴として「中央に炉趾がある」（杉原1935,7 p43c2ℓ18～19） 事をあげている。

杉原氏は、翌1936年２月に「須和田遺跡に於ける考古学的調査の意義に就いて」を発表した。この予報では個々の遺物についての具体的な説明は行われておらず、型式の提唱も行われていない。しかし後の須和田式（真間式、国分式）に相当する土器について、

> 本遺跡は、北方に下総国々分寺趾の存在する丘陵と対峙するのであつて、本遺跡から出土する遺物と、同国分寺趾から出土する遺物は非常に類似しているのである。本遺跡の第一号竪穴住居趾より出土した骨壺や、朱字の書かれている盃等はその好例である。この事実は、一つには、本遺跡の下限に絶対年代を附與する手懸となる（杉原1936,2 p43ℓ6～10）。

として、須和田第三期の土器の年代比定にあたって、国分寺趾出土遺物との類似性より時間的位置付けを試みている。そしてこれは、後に須和田式として提唱される事となる。但し、森本氏がかつて指摘した骨壺と言う見解に対して未だ拘泥されている部分が認められる。

ここでは、以降の杉原氏の研究を理解して行く上で欠く事の出来ない杉原氏の方法の特性について、この予報を手懸りに検討してみたい。それらは考古学的な手続きを踏んでいるとは言え、先に観て来た山内氏等の方法とも異なるものである。

この中で杉原氏は住居址とその中から出土する遺物について、「竪穴住居趾内に、それと同時代の遺物を伴うと云ふ問題は、なに故に伴ふかと云うことよりも、伴つていることが事実として、我々に先に接するであろう。」（同 p42ℓ15～17） と言った捉え方をしている。これは奥田氏のそれと比較した時、杉原氏の土師器研究、或は杉原氏が設定した土師器諸型式を理解して行く上で非常に象徴的な事であると言えよう。住居址とその覆土に含まれる遺物に対するこの様な捉え方は、未だ型式が定まらない研究の黎明に於いては暫定的な方法として一定の有効性を持っている。つまり、住居址覆土に含まれる土器を一括して取り扱い、これによってある時間幅を代表させる手法である。しかし、一旦型式が設定されこれらの境界が問題になって来ると同時にこの方法は俄に適用範囲の限界に達し、住居址内出土資料に対する型式論的手法からの相対化が必要となって来る。そして再び分布論的検討等が必要となって来るのである。型式の境界は型式内容の同一性に相即的に規定されるものであって、この同一性がある程度明瞭にされていないと当該型式存立の基盤が何等保証されていない事となる。そしてこの型式の相対化は、型式内容相互の概念化を基にした相互対比である事に他ならない。杉原氏がここで述べた方法は、住居址覆土の遺物を一括して取り扱うと言う操作にとどまるものであり、次の段階へと認識を発展させる為の操作とこの点に関わる意識が大きく欠落していると言えよう。

奥田氏の、

> 住居址の各の古さを、其の内部から掘り出された遺物によつて、定めようとするには、相当な苦心が拂はれねばならない。吾々が一見した丈では、全く後世の攪乱を、受けて居ない様に見える竪穴でも、夫を発掘した際に、穴の底から極く近代の瀬戸物やビール壜の欠を発見する様な滑稽は、屢々演ぜられるのである。（奥田1936,8 p27c1ℓ20～c2ℓ13）

と言う記述は、喜田貞吉氏のみならず、まさに喜田氏同様にミネルヴァ論争の争点の一方の側を担っていた杉原氏の見解にも対置して捉えるべき性格のものである。

今日多く見られる資料に対する型式論的取り扱いと編年論的取り扱いの半ば無意識的な渾然一体化も、遡れば先の杉原氏の見解の中にその萌芽を認める事が出来よう。又、杉原氏は、

> 本遺跡の如き、一地域に数時代にも亘る竪穴住居が営まれる時は、必然的にその重接をみるのであつて、これは前述の関東ロームや、人口的に床を作ることの好条件と相俟つて、竪穴住居趾それ自体の編年を確立出来ると供に、それ等の住居趾内に包含されている遺物の編年をも可能にするのである。（杉原1936,2 p42ℓ10～14）

と言った見解を示すと共に、分布論と型式論についてこの様な即自的な認識にとどまっていた。つまり住居址に遺物が含まれその住居址が切り合っているので、含まれる遺物が編年出来ると言う主張である。これは一見正しい様に思われるが、考古学的な一連の資料操作の中で考えるならば皮相的な見方であると言わねばならない。杉原氏の論理は、住居址内にその住居と同時代の遺物を含む事を前提としているが、分布論的な同一性で把握された一括を適切な方法の媒介なく型式論的同一性で把握し直す事は出来ないであろう。現に今日まで資料は増え続ける一方でありながら、適切な編年の提示が為されていない事が何よりもそれを雄弁に物語っていると言えよう。そして杉原氏に於いても自己の規定した型式内容に対して、長年に渡って齟齬を来し続けていると言った事からもこの点が肯首されよう。

これと関連して、杉原氏の考古資料に対する様式論的な構えの位置について検討しておく事も重要である。以前に小林行雄氏はその極めて実体的な様式論を提示し、その中で最初の様式「海を越えて伝へられた弥生式土器の最初の様式」、第二の様式「新なる沃土に芽生へ育まれた第二の様式は夫々の平野々々に特有な様式として発達して行つた」、第三の様式「丁度かうして確立せられた夫々の地域的様式が相互に浸透し合つて、類似の道へ共通の路へと向ふ様に舞台が出来上つた」（小林1935,1 p2ℓ3～18）の様に弥生式土器の様式について述べている。これに対して杉原氏は、山内氏同様に「日本先史時代に於ける縄紋式文化と弥生式文化は、大和民族の西方よりの移動と云ふ先入観的説明によってゞはなく、考古学的事実として対立すべき二大様式である。」（杉原1936,2 p40ℓ16～18）として、対象への学問的近接法を強調している。ちなみに山内氏は、『日本遠古之文化』の中で縄紋式と弥生式の関係について、

> 今日まで、縄紋式は関西に於いて早期に弥生式に置換され、東方に於いては永く遺存したものと考へられて居つた。西方に弥生式遺跡、東方に縄紋式遺跡が濃厚であるのは、住居の時間に比例するものと説かれて居る。しかし関西にも東方と同様一通りの縄紋式の階段があるので、この考案は成立困難である。縄紋式の各階段が西方に発達し、又は到着し、相ひ継いで東方に流出したと云う考案も亦、縄紋式全般の縦横観から見て、甚だ不利な状態である。遺跡分布の濃度に関しては多くの検討を要するが、弥生式の如く農作する住民と、縄紋式の如き採集生活者との間には集落占居の状態に相違があることは容易に點頭けるであらう。
>
> 東北の縄紋式が如何に遅滞したか、その推定及び論拠は様々である。信ずべき論拠より、むしろ「文化は西から」の先入観から出発した所説が多い。今や考古学者はこの偏見を清算しな

ければならぬ。文化の動向は考古学的手段によつて追求さるべきであらう。（山内1932,10 p 51 c1ℓ16～c2ℓ15）

と述べている。

尚、1941年には杉原氏自身の近接法が主題として理論的に展開される事となるが、必ずしも実態的様式論的な発想を脱し切れてはいなかった。ここでの小林氏の<人間集団>を実体とした様式の把握に対して杉原氏が提示したものは、<型式概念>を実態とした様式論であり、それは小林氏の<人間集団>を<型式概念>で置換したにとどまっているものであった（注5）。その<型式概念>が、考古学的な手法に基づいて検討され、厳密な論理による裏付けの基に提出されたものであれば問題は少ないと言えるが、そのような操作を必ずしも十分に経ていない杉原氏の実態としての型式概念は、小林氏の実体としての<人間集団>の様式論に容易に転化し得るものである。

方法として考古学的操作を経ないで感覚的な言明をした当時の小林氏の様式論に対して、杉原氏が考古学的概念である<型式>で論を進めた事は、確かに進歩であると言えよう。しかしそこで述べられた杉原氏の型式は、実際の杉原氏の分析の中に於いて見る限りでは分布論的同一性とこれの差異化と言った契機が極めて希薄で、考古学的な遺物の取り扱いの中から概念的に設定され説明される型式とは異質のものであると言えよう。

3節　鬼高式の設定（古墳時代＝鬼高式＝祝部第一類）

杉原氏によって鬼高式と須和田式が命名されるが、方法では分布論的検討に型式論的検討が優先し、型式内容については祝部以前の土師器が認識されておらず、又、奈良・平安時代の土師器も細別されていなかった。

1937年6月に杉原氏は、佐藤吉彦氏と共に東京人類学会の第508回例会で「市川市鬼高の原史時代遺跡に就いて」と題する講演を行った。そして、翌年の1938年11月に「下総鬼高遺跡調査概報」を発表し、鬼高式の提唱を行った（表10）。そこで提唱された鬼高式は、先の須和田遺跡第二期の内容におおよそ相当するものである。

鬼高式については、土師器に関して具体的な型式名を冠した点と具体的資料を提示した点、そして型式内容の一部が概念化されて提示された、と言う3点を満たす事に於いては最初の型式設定である。

表10　原史時代の文化編年

	時　代	時　期	土　器　編　年
先史時代	弥生時代	前野町期	前野町式土器
原史時代	古墳時代	鬼高期	鬼高式第一類～三類、祝部第一式土器
歴史時代	奈良 平安朝初期	須和田期	須和田式土器　　祝部第二式土器

第9図が、杉原氏の設定に関わる鬼高式の標式資料である。ここでは、鬼高式は一～三類に細分類され、例えば坏類（但し、鉢、皿、盃、盤、等と呼ばれていた）についてはそれぞれの形態的特徴が、

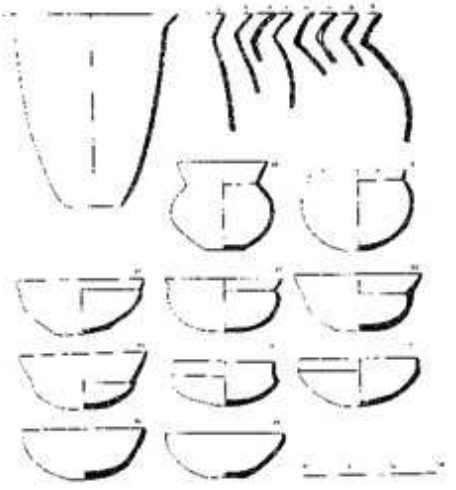
・第一類は、口辺部外側に一種の縁を付す

・第二類は、口辺部内側に一種の縁を有す

・第三類は、口辺部無縁である

の様に概念化されて取り上げられている（注6）。そして対象資料全般に渡り、この概念化された形態的特徴から三類に分類が行われている（第10図）。

この杉原氏による鬼高式の提唱に見られる様な分類時に於ける遺物の操作方法は、先の山内氏等の分類の方法と大きく異なるものである。即ち、山内氏等に於いては先ず分布論的同一性と差異性が端緒となり、次いで型式論的同一性と差異性でこれを相対化し、以下では相互で相対化を図りつつ認識を深めて行く方向性が認められた。しかし、ここに見られる杉原氏の操作はこの逆を行くもので、型式論的同一性と差異性から分類を行い、これに対して調査区内での一括性から型式論的同一性の異なった三つの群に対して時期的な同一性が設定されているのである。そして杉原氏の場合には分類の端緒となった型式論に於いても検討が必ずしも十分ではなく、概念化された型式相互の同一性と差異化からの系統関係の把握が不可能となっているのである。それ故に土器の編年体系としては、内的には発展性の契機（細分）が乏しく閉塞的であり、唯一、全く新しい異なった形態的特徴を持った一群を見つけ出し新たな型式を設定すると言う外的な方向にしか発達を為し得ないものであると言える。換言するならばこの事は、これ以降杉原氏の方法を踏襲する限り鬼高式の細分研究は進行せず、他の型式を設定し認定して行く過程の中では鬼高式との関係の上で型式論的に明確に位置付ける事が出来ないと言う事である。そしてこの閉塞性は土器自体の分析からではなく、<古墳時代>或いは<奈良・平安時代初期>と言う枠組みの中に逆に土器を当てはめると言った、演繹的な土器型式認定の方向に容易に転化し得るものでもある。



第9図　鬼高式の標式資料

この杉原氏の方法が、論理的な次元で既に問題を含んでいる事は明瞭であろう。この様な土師器に対する把握の仕方がそれ以降の土師器研究を規定しており、この延長線上に今日の多くの編年研究が位置付けられるのである。そしてこの様にして設定された杉原氏の鬼高式は、直ちに型式内容の問題を指摘されると共に、型式としての鬼高式に関する混乱を生み出し続け、これ以降の研究史を大きく規定して行く事となった。この編年に対して山内氏が、「日本遠古之文化」補註付・新版での補注の中で「尚杉原荘介氏は独自の研究により三つの区分を試みて居るが（人類学雑誌53巻、昭13年）、追加改編を要すると思って居る。」（山内1939,12 p46ℓ4～6）と述べているのである。尚、ここで用いられた相対的な年代の決定法は注目されるところである（注7）。

第10図　鬼高式の三つの類

先に見て来た様な論理的な次元にとどまらず、具体的な型式内容に関しても山内氏等の土師器編

年と杉原氏のそれとでは大きな違いが二点認められる。

一つは、山内氏は古墳時代の土師器を前半と後半に二分し、後半では祝部を伴い前半では祝部を伴わないと大別しているのに対して、杉原氏は古墳時代の土師器として単に鬼高式のみを設定し、これに祝部第一式土器が伴うとしている点である。即ち、祝部を伴う以前の土師器と言った古墳時代前半の土器に対する認識が杉原氏に於いては欠落している点（表11）があげられる。

他の一つは、奥田氏が古墳時代後期以降の土師器について行った轆轤の使用が認められない古墳時代末～奈良朝頃のものと、それ以降の轆轤使用の痕跡が明瞭で絲じりのついた広義の土師器と言う二分に対して、杉原氏は奈良・平安朝初期の土師器を「**轆轤による整形が顕著に見られ、土器底部には殆ど絲切りのあとがのこされている**」（杉原1938,11 p35ℓ25～27）と一括している点である。つまり古墳時代以降の土師器に対しても、やはり糸切りを持たない前半部分の認識が欠落している点が第二にあげられる。

前者については鬼高式提唱の翌年である1939年に藤森氏等によって祝部を伴う以前の型式が提唱され、引き続き杉原氏によっても和泉式が提唱される事となった。後者については、型式設定に関わる基準資料が提示されなかった事と相俟って、実に1950年代まで型式内容に混乱を来し続けたのであった。

表11　山内氏と杉原氏の土師器分類

a．山内氏の1932年の認識

		土師器	祝部
古墳時代	前半		伴はない
	後半		伴ふ

b．山内氏の1935年の認識

		土師器	祝部
古墳時代	前半	壷，台付土器	伴はない
	後半	細長い土器	伴ふ

c．杉原氏の1938年の認識

	土師器	祝部
古墳時代	鬼高式ⅠⅡⅢ類	祝部第一式

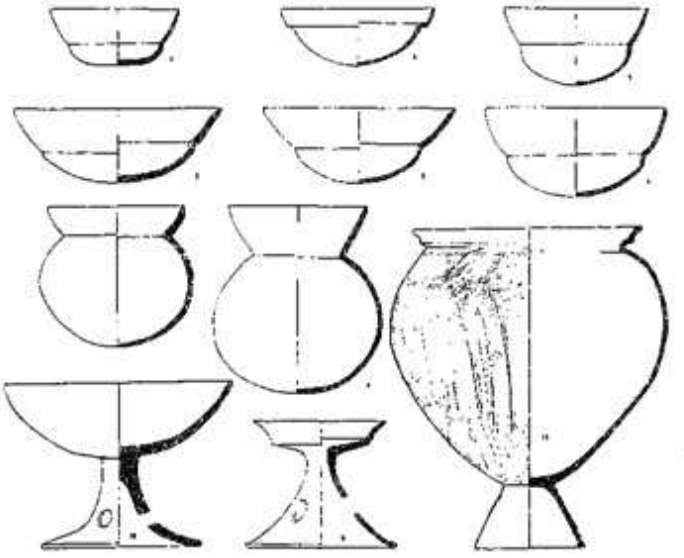
4節　祝部出現以前の土師器の認識

杉原氏の認識に欠落していた祝部出現以前の土師器について、藤森氏等によってこれに該当する型式の提唱が行われた。

1939年には雑誌『考古学』誌上で藤森栄一氏によって「**信濃下蟹河原に於ける土師器の一様式**」が、寺内武夫、篠崎善之助の両氏によって「**下野中原遺跡調査概報**」が発表され、下蟹河原式、中原式がそれぞれ提唱された。この両論考は先に述べた様に、杉原氏が古墳時代の土師器として鬼高式のみを提示し、共伴するものとして祝部第一式土器をあげた事、更に鬼高式の型式内容を共時的な三類に分けた事の二点に対しての反論として位置付ける事が出来るものである。即ち、杉原氏の提示した鬼高式の三つの類は共時的なものではなく通時的なものを含んでおり、その中には祝部式土器を共伴しないいわば祝部出現以前の土師器が存在する事を指摘して、純粋にこれのみから成る独自の型式を提唱している点に下蟹河原式と中原式提唱の意義が見い出されよう。

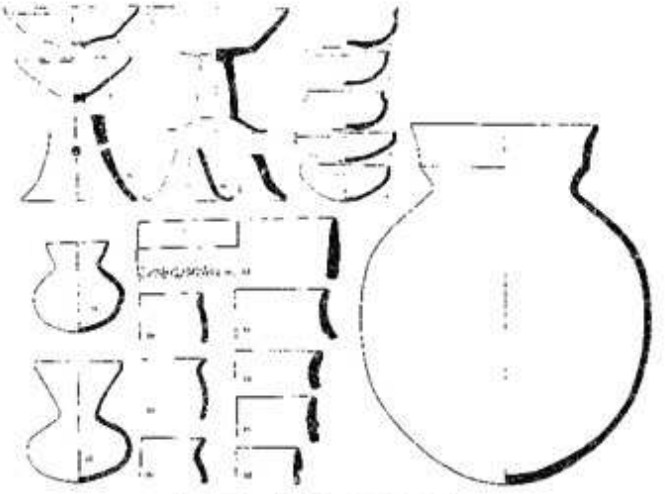
藤森氏は下蟹河原遺跡出土の土師器（第11図）に対して、口辺部内側に一種の縁を有する事をメルクマールとして、「大和丹波市布留の土師器遺跡の土器群の一部に包含されるものであり、亦、杉原荘介・佐藤吉彦氏の下総市川市鬼高遺跡の土師器群の第二類に相当するものである」（藤森1939,11 p561c1ℓ18～c2ℓ3）とし、「立派に一様式凡つ一時期として存在する有力なる資料であり、之を下蟹河原式として土師器の一様式を定め之を以て代表する下蟹河原期なる一文化期を設定」（同p562c1ℓ4～7）した（注8）。

寺内氏等は中原遺跡出土の土師器（第12図）に対して、口縁部の外側に何れも緩やかな稜を描く事から「大和布留遺跡の一時期を代表するものであり、下総鬼高遺跡の杉原氏の第一類なる一時期の独立して純粋に存在する時期の所産」（寺内他1939,11 p537ℓ18～p538ℓ3）とし「中原期」及び「中原式」の設定を行った（注9）。



第11図　下蟹河原式の標式資料

この両者は祝部土器出現以前の土師器を祝部土器出現以降の土師器から分離すると言う点については、既に山内氏の度重なる指摘があるので決して独自のものでは無いとは言え、杉原氏の所説に対しての重大な改訂案の提示と見る事が出来る。しかしながらここに提示された2つの型式は、未だ鬼高式自身の内容が土師器の他の型式との差異化のもとに概念化されていなかった事、更に翌年追いかけるようにして杉原氏自身が鬼高式以前に位置付けられ祝部式土器を共伴しない和泉式を提唱した事等によって杉原氏設定の型式と競合し、その結果杉原氏の型式が一般的となり、下蟹河原式或いは中原式はそれ以降取り上げられる事も無くなり、研究史の中で忘却されてしまった。



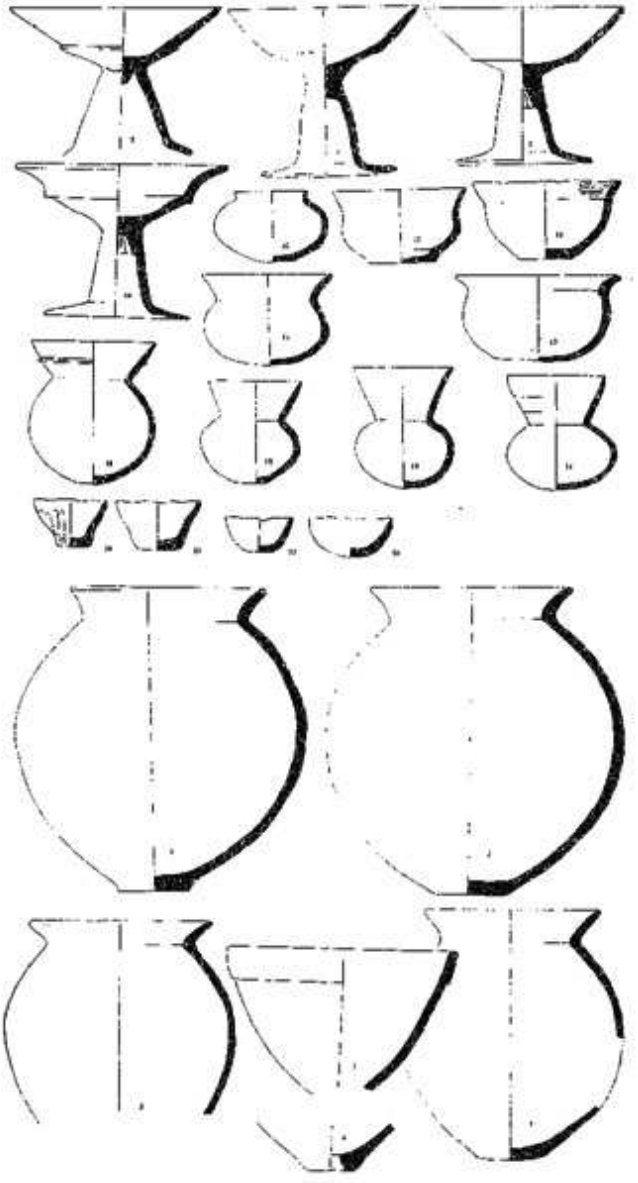
第12図　中原式の標式資料

この様な背景をもとにして杉原氏による1940年の「武蔵和泉遺跡調査概報」が発表された。ここでは鬼高式以前に位置し、祝部土器を共伴しないところの土師器である和泉式の設定が行われた。（第13図）。その一群の遺物の編年的位置については、「鬼高式土器の前野町式土器と形態の上に於て

かなりの径庭をもっていたこと」（杉原1940,5 p295ℓ12）から、和泉式が「前野町式土器の系統を多分に受け」た事を論拠として前野町式と鬼高式の中間に入るとした。又、「祝部土器はその破片すら発見されない」（同 p297ℓ3） 事を指摘している。

先に、杉原氏の編年体系が内包する内的な閉塞性に対して、体系を発展させる唯一の手段として、全く異なる形態の土器群を取り出して別型式の設定を行う外的な発達の方向性を指摘したが、和泉式の設定はこの方向性を端的に表しているものである。即ちこの和泉式の設定に於いては、先の鬼高式の分類とは何等型式論的な関わりなく型式設定が行われているのである。そして僅かに「先に鬼高式土器第一類に仮に入れられていた高坏形土器の中、脚が中膨みして柱脚裾と角をなす例は、明らかに和泉式土器の範疇に入るべきものであつた。」（同 p295ℓ14～16）と言う、個別的な遺物の帰属に関する記述が見られるだけである。

この様にして杉原荘介氏は、祝部土器出現以前に位置し前述鬼高式とは異なった別の型式として和泉式を設定し、これを前野町式と鬼高式の間に挿入したが、何よりも祝部出現以前の土師器に対する型式設定を第一としており、又、杉原氏自身の体系から来るところの問題によって、具体的な各形態毎の和泉式と鬼高式との差異化、或は連続性について積極的に論じられる事も無く、従って型式内容の概念化が行われていなかった。この点についても、後年の研究に与えた影響は大きいと言えよう。又、和泉式の提唱によって、結果的に鬼高式は祝部出現以降の古墳時代の土器に限定して捉えられる様になる。但し、この和泉式と鬼高式の境界について、杉原氏はこの時点では何等言及していない。この点についても、後年の混乱をまねく要因となっている。鬼高式、或いは和泉式の設定に見られる杉原氏の方法は、標識資料を提示するだけで型式としての概念化が不十分である



第13図　和泉式の標式資料

事をその共通の特徴としており、それ故に型式としての存立基盤が非常に危ういものであったと言えよう。

5節　杉原荘介氏の土師器編年の変遷

杉原氏の型式内容の認識をその編年表を中心として辿って見ると、方法論上の問題を確認する事が出来る。

杉原氏は1935年6月の東京人類学会の第 488回例会以来、幾度か土師器の編年案を提示している。そして、これらの中で幾度か名称を変更している。これについて、以下では古墳時代の土師器とそれ以降の土師器について、その編年案中の名称の変遷と系統関係を検討してみよう（第14図）。

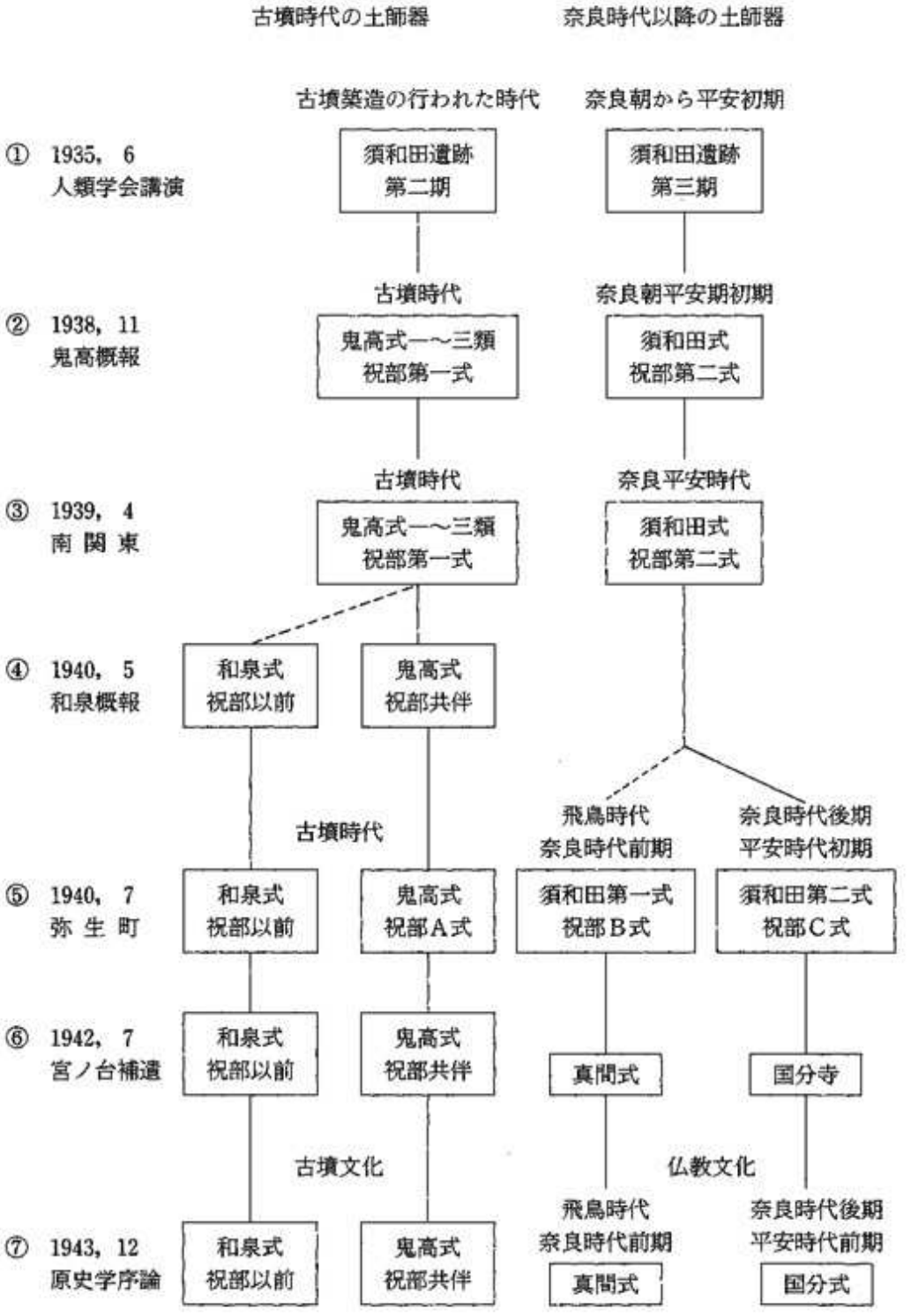
1935年6月の人類学会講演では、前年に森本氏が触れたのと同様な分類、即ち須和田遺跡出土の土師器について、須和田遺跡第二期と須和田遺跡第三期に分けて考えていた。ここで興味を惹かれるのは須和田第三期の下限の問題である。杉原氏は須和田第三期の下限について、平安初期としている。この下限の設定根拠については杉原氏自身が触れていないので詳細は不明であるが、国分寺の造営期間或いは土師部の動向に対する意識があった事も考えられよう。

1938年11月には「下総鬼高遺跡調査概報」の中で先の須和田二期に相当するものを鬼高式とし、須和田第三期に相当するものを須和田式として設定し、祝部については前者に伴うものを祝部第一式とし、後者に伴うものを祝部第二式とした。

1939年1月の東京考古学会での発表（その内容は、同年4月の「南関東を中心とする土師部祝部土器の諸問題」に掲載）では同様な区分に基づいていたが、須和田式の年代については奈良平安時代としており下限が異なっている。ここで注目すべき事は、これが東京考古学会第一回総会での発表であり、山内氏もこれに出席していた事である。恐らく文献等を参照して演繹的に設定した平安時代初期と言う下限に対して方法論的に問題があり、やや根拠が希薄であると杉原氏自身で判断して平安時代全般としたものであろう。

1940年5月の「武蔵和泉遺跡調査概報」では、従来古墳時代の土器として一括されていた鬼高式に対して、新たに祝部を伴わない前半部分が和泉式として差異化され認識されている。先に杉原氏は古墳時代の土器として鬼高式を設定していたので、古墳時代前半の土器としての和泉式の設定は鬼高式からの和泉式の分離と考えられない事もない。しかし型式内容については、鬼高式として設定されていた三つの類とは何等型式論的な関連性の指摘なく和泉式が設定されているのである。今日一般的に流布されている、鬼高式第二類の土器群を分離・独立させてこれを純粋に出土した和泉遺跡出土土器に代表させ和泉式を設定した、とする考え方は本来的には正しくないと言えよう。

1940年7月には「武蔵弥生町出土の弥生式土器に就いて」の中で、先の須和田式が須和田第一式と須和田第二式に分離されて、各々の年代が飛鳥時代～奈良時代前半、奈良時代後半～平安時代前半とされている。この分離の契機も不明である。筆者の想定では、



第14図　杉原氏の土師器編年案の変遷

本遺跡は、北方に下総国々分寺趾の存在する丘陵と対峙するのであつて、本遺跡から出土する遺物と、同国分寺趾から出土する遺物は非常に類似しているのである。本遺跡の第一号竪穴住居趾より出土した骨壺や、朱字の書かれている盃等はその好例である。この事実は、一つには、本遺跡の下限に絶対年代を附與する手懸となる（杉原1936,2 p43ℓ6～10）。

と言った、杉原氏による須和田遺跡の遺物に関する記述、或いは、

その他の特徴としては轆轤による整形が顕著に見られ、土器底部には殆ど糸切のあとが残されてゐる。なほ本土器の重要なる点は墨書或は朱書による文字がたまたま筆書されてゐることである。この土器を出土する集落遺跡は千葉県市川市須和田遺跡であつて、他にこの遺跡ほど集落との深き関係に於て発見せられてゐるのを経験しないので、この型式の土器に対して須和田式と称しておく。（杉原1938,11 p35ℓ24～p36ℓ1）

と言った、杉原氏による鬼高遺跡の概報に見られる須和田式の設定に関わる記述からも解る様に、細分される以前に須和田式として設定されていた土器群は比較的新しい様相のものであって、古墳時代以降の土器群のうち糸切りを持たない一群の認識が欠落していた。従って従来須和田式としていたものは国分寺との関係が強く考えられる一群であり、国分寺建立期を念頭に於いての型式設定によって独立させる事とし、奈良時代後半～平安時代初期と言った国分寺建立期に関わる年代観を与え、一方後に検出されて来たより古い様相を持ち異なった特徴を持つ土器群に対して、国分寺建立期以前で古墳時代以降の意味から、飛鳥時代～奈良時代前半の年代を与えたものであろう。この様な理由で従来の須和田式が＜飛鳥時代～奈良時代前半／奈良時代後半～平安時代初期＞と言った二つの時期に分離され、異なった型式として細分された可能性が高いと考えられる。この意味では和泉式同様、須和田第一式（後の真間式）は、名称或いは時代区分上では須和田式から分離されたものであるが、型式論的には既に設定されていた須和田式とは関係を持たず新たに設定されたものであると考えられる。尚、この時点で鬼高式に共伴する祝部第一式は祝部A式と改称され、須和田式に共伴するとされていた祝部第二式は、須和田式の二分に伴ってそれぞれ祝部B式、祝部C式と細分・改称された。

1942年7月には、「上総宮ノ台遺跡調査概報－補遺－」の中で、須和田第一式と須和田第二式が須和田式の名前を小田原期前期の土器に譲る事になり、それぞれ真間式と国分式に改称され、ここで用いられた名称のまま1943年の『原史学序論』に至る事となる。

この様にして型式内容は不鮮明であったが、ともかく現行の土師器に対する型式名称のうち、和泉式、鬼高式、真間式、国分式の四型式が設定されて行ったのであった（注10）。

6節　杉原荘介氏による先験的伝播論の否定と播布性概念の提出

杉原氏の体系を理解して行く上で、播布性の概念の意義は重要である。従来、この播布性の概念についてはあまり取り上げられる事がなかった。

戦間期の杉原氏の体系を理解して行く上で重要なものは、この播布性の概念である。従来杉原氏

の播布性の概念は、その重要性にも関わらずあまり主題的に取り上げられる事が無かった。しかしながら、少なくとも土師器の研究史に関する理解は、この播布性の概念の検討無しには行い得ないと考えられよう。以下では、この杉原氏の播布性の概念について検討を行って見よう。

播布性の概念については、1940年1月の「武蔵前野町遺跡調査概報」の中で用いられているのがその初出であると考えられる。同文中では、前野町式土器が全国的な斉一性の傾向を持ちつつも型式として差異化、定立される事、或いは弥生式土器文化と古墳時代文化の境界についてこの播布性を一つの根拠として検討を行っている。

1940年3月には、「武蔵久ヶ原出土の弥生式土器に就いて」の中で、「播布性の概念」及び、その上での「選択」について言及している。同論考の中では、南関東に於ける久ヶ原式と伊勢湾の高倉式との共通点について、「一つには数型式の土器が夫々地域を異にして居ながらも、系統的なる姿としてゞはなく発生的なる姿として同じき容色を呈することが問題であり、又一つには斯くも同じき容色を示す夫々の土器が、ことさらに型式として地域を限定してゐると云うことが問題であるのである。」（杉原1940,3 p142ℓ3～5）として、類似した型式が多元的に発生する事と、その型式がそれぞれ分布圏を持つ事の二点について考察し、

> 私は曾て前野町式土器の性格を論じた折に、その文化の根底に「播布性」と「選択」なる潜流のあることを提唱した。この二つの相互性を有する原則は、実は久ヶ原式土器を説明するために最も相応しい原則なのである。第一の問題、即ち地域の相隔たる久ヶ原式土器と高倉式土器との絢爛たる相貌の一致は、弥生式文化の底流として「播布性」があるからである。又それが美しきもの、有効的なるものに関する限り既述した如く簡単に「流行」の力の大なるに換るとしてもよいのであらう。第二の問題、即ち久ヶ原式土器と高倉式土器との相貌の相寄るにも拘らず、しかも夫々が個性を保持してゐるのは「選択」を持つてゐるからである。然らば久ヶ原式土器に於ける選択とはそも如何なることであらうか。久ヶ原式土器を保持する社会団体にも、他の例へば高倉式土器を保持する社会団体と一般の文化の交流はあつたのである。然し、久ヶ原式土器を使用する団体は、久ヶ原式土器を使用することでよかつたのである。これが「選択」である。久ヶ原式土器に於ける場合は前時期たる小田原期後期の土器形態を受け継いだ形跡が多い。而して久ヶ原式土器の「選択」によつて構成されたるその分布圏は何を意味するであらうか。それは「選択」なる故に外的掣肘の結果とすることは不適当である。それは内的に換るものとして解釈せられることがより妥当的に思はれる。分布圏の構成を内的動機によつて解釈せんか、それは何であらう。それは土器の交換圏である。久ヶ原式土器の分布圏は久ヶ原式土器の交換圏なる経済圏である。
>
> 「選択」は久ヶ原期、弥生町期、前野町期を経て段々型式の差を少なくして行き、遂に「播布性」と一致して鬼高期の土器の姿を現出する。この時は既に経済圏は交換圏が配給圏にとつて代はられた時期である。（同 p142ℓ6～p143ℓ2）

としている。先の「武蔵前野町遺跡調査概報」の中では、前野町式土器の系統と分布の多様性の中から型式としての前野町式の独自性を説明する仮説として提示されていた「播布性」並びに「選択」と言う概念が、「武蔵久ヶ原出土の弥生式土器に就いて」の中では、久ヶ原式やこれに並行した、

地域を異にしながらも類似する土器について、伝播論的な視座に対する反定立としての多元的な発生を説明する仮説として更に具体的に展開されている。この「武蔵久ヶ原出土の弥生式土器に就いて」の中で、「播布性」の概念が初めて伝播論を意識してこれの反定立とした形で取り扱われている。

その後、杉原氏は1941年2月に「弥生式文化研究上の二三の問題」を『古代文化』誌上に発表し、先に述べた問題を大局的に整理して、

> 即ち弥生式土器より知り得たる文化の動向は、弥生式文化には播布性が認められること、そしてこの播布性は選択を持ち、軈てその選択を失つて飽和の状態に統一せられるのである。具体的に述べれば弥生式文化は通有性を持ちながらも又地域性を有し、然しながらこの地域性はその中に消失して全国的に帰一せられるのである。この変換は、弥生式文化の今迄の研究の中に於ては、最も大きな事象であると私は思ふのである。それで私はこの文化の選択を持つまでを弥生式文化となしたいと思つてゐるのである。それが土器に関しては弥生式土器と云ひ、それ以後のものに就いては、さう称することが許されゝば土師器と云ひ度い。具体的に云へば、南関東では前野町式土器以前が弥生式土器であり、和泉式土器以後は全国的に存するものとして土師器である。先史時代・原史時代なる用語も、その本来の意味よりして差し支へなければ、その境を此処に置いたらよいと思ふ。（杉原1941,2 p27ℓ13～p28ℓ2）

としている。

そして、同年4月に至っては「日本古代文化に於ける播布性に就いて」を発表し、この播布性の概念を主題的に取り扱っている。以下では、この播布性の概念が全面的に展開されている「日本古代文化に於ける播布性に就いて」を見て行く事にしよう。この中では、

> 日本古代文化の研究に於て、学徒の絶えざる努力の結果、最近遺趾・遺物の型式の定立が多数発表せられるやうになつた。
>
> 今、これ等の型式を通観すると、その地理的条件を無視して、夫々の間に於て、甚だ類似するものゝ存在するを知るのである。（杉原1941,4 p26ℓ10～13）

とした上で、

> これ等の類似もよく観察すると、それは単なる類似性ではなく寧ろ酷似性と云うべきであり、その関係に就いていへば、偶然的ではなく明かに必然的と解するべきものである。
>
> 而して、この夫々の型式間に於て必然的なる関係を認むるといつても、私は型式と型式とが直接的に関係を持つたと云ふものでもなく、又さういふ表面的事実を問ふてゐるのでもない。
>
> 私はその各型式が必然的関係を表象してゐるところに或る潜在する流れを注意するのである。一つの強靱なる力がそれ等の事象を可能にしてゐると解釈するのである。
>
> 私はこの文化の一性質を播布性と称する。
>
> 日本の古代文化に於ては、この播布性が比較的に明瞭に認められるやうである。然し、何故にかゝる現象が存在するのかといふ問題に関しては、それはたかだか民族の一般的性質とか、日本が島国であるからといふやうな学的に無意義な答しか得られぬであらう。その文化に播布性が認められるといふことを前提とし、その文化内容を考察してゆくことに於て、それは重要

なる意義をもつてくるのである。（同 p26ℓ17～p27ℓ9）

として、まず分析の前提としての播布性の位置が明らかにされている。そして、この播布性には三者（牽引・選択・飽和）があるとして、牽引については、

第一は型式間の類似性が非常に強いにもかゝはらず、比較的に型式が広範囲に存在し、その距離も遠い。各型式の分布は散漫であり、その密度も小である。実例を示せば、縄紋式文化に於ける押型文系列の土器、弥生式文化に於ける遠賀川系列の土器等である。これ等の型式が遠距離に存在しながらその類似性が強いといふことは、相離れることに反比例して互に牽く力が強いと見られ、古代にあつては型式が孤立すればするほど相引く性質が起きると解釈せられるのである。これは現在の民族が分立して最初に見られる現象に徴しても考へられることである。この性質を播布性に於ける牽引と呼ぶことにする。（同 p28ℓ4～9）

としている。度々登場する選択については、

第二は播布性の存在により型式間の関連が充分に認められるかゝはらず、各々の型式に於てもまた夫々個性をもつ。各型式の分布は限界を有して、その密度は大である。実例を示せば、縄文文化に於ける安行式土器と雷式土器の如く、弥生式文化に於ける高倉式土器と弥生町式土器の如く、なほ幾多の例を挙げることが出来る。この関連を有しながら一方に個性を持つといふことは、個性のみの側から見るとそれは自然的環境に制約されたものと考へるであらうが、既に関連を有すること即ち播布性が認められそれは地理的条件を無視するが故に、その個性の誘因は外から働いたものでなく内から働いたものでなければならない。即ち夫々の型式の個性はそれをよいとしたのであり、それでよかつたのである。この様相は時間的に延長を有し、系統として保存せられると思はれる。これ等の性格は現代の関東人と関西人との関係によく表現せられてゐるのであらう。この性質を播布性に於ける選択と呼ぶことにする。（同 p28ℓ10～17）

としている。又、飽和については、

第三は播布性の現象が極端に発展して、各型式は同じ様相をもつて斉一化し、即ち一つの型式として統一せられ、地方色は単に技術の相違とか材料の変化によることしか意味してゐない。型式の分布はそのまゝ播布性の作用を表現する。実例を示せば弥生式文化の系統である和泉式土器とか鬼高式土器とかゞこの様相を具体的に表はしてゐるものである。縄文文化に於てはかゝる現象は認められない。弥生式文化に関してもこの現象の認められるものは、この文化と切放して別の文化として扱つたほうがよいことは既に屢々説いてきたところである。この性質を播布性に於ける飽和と呼ぶことにする。（同 p28ℓ18～p29ℓ5）

としている。この播布性の仮定のもとに提出された、牽引、選択、飽和と言ったそれぞれの概念は、

この三者に夫々属してゐるところの型式を検討してみると、各々の文化に於て牽引性を示してゐるものが最も古いものであり、選択性を示してゐるのものがその次に古く、飽和性を示してゐるものが最も新しいやうである。私は牽引・選択・飽和の三つの様相が、その様相として夫々の順位に時期をもつと云ふのではない。あくまでも編年は型式より示現されなければならない。夫々の様相所属の型式の編年が結果としてその様相の順位を構成すると云ふのである。斯くしてみると、日本古代の文化に於ては当初より播布性の現象が見られた、しかし最初はそれは牽

引的であり、次に選択的となり、最後に飽和的となつたといふことが出来るであらう。日本古代文化に於ても、縄紋式文化に就いては飽和の状態がみられなかつた。然し弥生式文化に就いてはそれは聴て飽和の様相を将来する新文化を迎へた。飽和の様相に於ては型式の分布がそのまゝ播布性の作用である。しかし播布性は型式の分布を限定しない。即ち飽和の状態は播布性の否定であると同時に、それは播布性のなほ次の力への肯定である。此処に日本古代文化に於ける播布性の重要意義がある。（同 p29ℓ6～15）

として、播布性の概念が日本古代文化の大局的な動向把握の一つの手段となっているのである。そしてそれにとどまらず、播布性の概念は縄紋文化と弥生式土器文化の関係、或いは弥生式土器文化と古墳時代文化の関係を解き明かす一つの方法でもあった。杉原氏は、小林行雄氏を代表とする先験的伝播論に対して、

型式の各相応するものの空間的序列が系列であるとすれば、型式は自体の時間的限定を持つが、この系列の時間的限定はなし得ない。一系列中の型式はAからB、BからCと発展的階様を辿つたものであるかも知れないのである。然し、播布性は関連に於て型式を存在せしめるものである。故に播布性の認められる文化に於ける一系列中の型式は同時に存在したものと解せられるのである。播布性は型式に系列の時間限定性を與へるのである。日本の古代文化に於て二つ以上の系列が認められゝば、それは時間的に差を有するものであらう。又縄紋式文化にせよ、弥生式文化にせよ、その終末に於て型式の系列が認められゝば、その終末は同時といふことが出来るのである。文化終末の同時問題は各型式の層位学的方法や編年学的方法では果し得ない。播布性の存在を前提として、その時期に型式の系列が認められるか否かによつて決定せられるであらう。（同 p30ℓ4～11）

として、反論を行っている。

ここで杉原氏が言わんとしているのは、即ち広域編年に於ける同時性の保証について伝播論の上に立つ限り、幾ら層位や編年を検討したとしても距離と伝播時間との関係が介在してしまうので相対的な同時性は計測不可能であると言う事である。そして、先験的伝播論の仮定に立つ事を取りやめて広く関係の緊密な同一の文化が播布していると仮定すれば、この同一な文化の播布と言った概念によって距離と伝播時間という要因を取り除く事が出来、広域編年に於ける同時性は型式相互の関係として抽象化出来ると言う事なのである。

この論考が発表された1941年（昭和16年）という状況を考える時、小林行雄氏に代表される先験的伝播論や、これに無批判に追随して神武東征神話と意識の上で重複して反動的な論調を帯びつつあった戦間期の考古学の傾向に対して、大きく発想の転換を迫ったものであると評価する事が出来よう。同時にそれは、弥生式土器文化以降の問題を取り扱う上で、森本六爾氏以来の東京考古学会が常に掲げていた姿勢に対して一定の反省を迫るものでもあった（注11）。

続いて、型式の時間的序列についても触れ、

又、型式の各相応するものゝ時間的序列が系統であるとすれば、型式は自体の空間的限定を有するが、この系統の空間的限定はなし得ない。一系統中の型式はAからB、BからCと発展的階梯を辿つたものでないかも知れないのである。然し、播布性は関連に於て型式をそんざい

せしめるものである。故に播布性の認められる文化に於ける一系統中の型式は同域に存在したものと解せられる。播布性は型式に系統の空間限定性を與へるのである。我が古代文化に於て形態学的方法即ち原始形態・退化形態等の概念の適用されることもこの播布性が認められて始めて可能であらう。系統の不明瞭なる材料を如何に比較してみてもその結論は想像に終るのである。又一材料を示して、その型式の分布区域を推定せしむることが、我が國の古代文化に属するものに関しては、或る程度可能なるも、この播布性が存在して始めて許されることである。（同 p30ℓ12～p31ℓ1）

としている。

つまり系統性についても、伝播論的な考えに立つならば地域を越えた伝播によって系統関係の捉えどころが無くなるが、播布性の立場に立つならば系統性は広く播布している文化の中での選択に関わる地域に固有な伝統的な傾向と考える事が出来ると言うものである。型式論的操作が暗黙の前提としている部分を突いた鋭い指摘も見られるが、これについては直ちに全てを肯定する事は出来ない。

尚、杉原氏が播布性について述べた次の文章、

播布性に於ける牽引の状態を示す型式が、夫々文化に於ても古い時期を限定してゐること、型式と型式の距離の遠いこと、完全なる分布圏をもたぬことに関しては既に述べた。これ等の事象よりして、この様相は文化伝播の事実を物語つてゐると思はれ、播布性を考へることにより、その型式の地理的位置は自然に支配せられたものでなく、自から利用した文化通路であり、牽引の様相を考へることにより、その伝播は比較的急速に遠距離まで行はれたと解釈するのである。縄紋式文化の押型文系列の型式や、弥生式文化の遠賀川系列の型式が文化の最も初期のものと確定するにはなほ検討が必要である。然し、少くともこの時期の様相を示してゐることは誤りないであらう。

この牽引の様相即ち伝播の時期は短かつたと思はれる。その次の時期をつくるものは、直に播布性に於ける選択の状態を示す各型式である。この型式が牽引の様相を示す次の時期に位置し、その分布圏は確然として密度も大であること、型式間には関連があるが個性も顕著であること等既述のとほりである。これ等の事実よりしては、伝播した文化は直に適当の位置を得て定着し、文化力も増大して、風土化したと解せられ、播布性を考へることにより、その型式の個性は自然的環境に制約されたのでなく、自然を利用した証拠であり、選択の様相を考へることにより、その自然の利用は纏て自体の特性として消化したと推察されるのである。縄紋式文化に於ける安行式・雷式等の型式、弥生式文化に於ける高倉式・弥生町式等の型式はこの時期の様相をよく現してゐるものである。（同 p31ℓ15～p32ℓ9）

は、小林行雄氏の先験的伝播論の代表的著作に見られる、以下の文章、

海を越えて伝えられた弥生式土器の最初の様式が、西日本の海辺岸辺にほゞひとつ様の技術のあとを残した時、新なる沃土に芽生へ育まれた第二の様式は夫々の平野々々に特有な様式として発達して行つた。美し國々に尋ね着いた人々は、今その土地によつて彼等の一連りの行動から切断されたのである。分離せられた所から個性の一複数的な意味に於ても一行為は始めら

れる。古き『部分』から新しき『全体』への道が人々の自由なる処理を待つたのであつた。これは丁度破壊の時期であつた。古き文様、古き形態、はては古き技術までが試みの業にくづされて行つた。しかも同時にそれは建設の時期であつた。いくつかの破壊の結果、変容の結果が選択せられて、公定の様式の方向が指示せられる。破壊の力が大きければ大きいほど建設の意途は根強い。新なる様式への執着はその普遍化に努め、広く一つの地域を一の様式に統一してしまふ。かうして此処に夫々の地域的様式が確立せられ、第二の様式の時期が最高潮に達したのである。

今とりあげてゐる小型丸底の土器が登場するのは、丁度かうして確立せられた夫々の地域的様式が相互に浸透し合つて、類似の道へ共通の路へと向ふ様に舞台が出来上つた時である。様式を一の動態現象と見る立場からいつて、弥生式土器の第三の様式の時期に当るわけである。

（小林1935,1 p2ℓ3～p3ℓ1）

に対して、意識的にこれの反定立として書かれている事が明らかである。

この「日本古代文化に於ける播布性に就いて」の中では、従来、選択と飽和を含んでいた広義の「選択」が、「牽引」、「選択」（狭義の）、「飽和」、の三者に細分されている。この様にして杉原氏の播布性の概念は定式化されて行ったのであった。

尚、杉原氏は翌1942年３月には東京考古学会東京支部の例会で「伊予阿方・片山及び中寺遺跡の調査ー弥生式文化瀬戸内東漸説への反省ー」と題する発表を行っている（『古代文化』13巻３号扉の例会通知参照）。これについては当時の発表内容を知る事は出来ないが、やはり小林氏を中心とした戦間期考古学の風潮に対する一定の反定立としての意識をそこに認める事が出来よう（注12）。

この様に、自身も東京考古学会の主要構成員でありながら、尚且つ東京考古学会的な先験的伝播論に対する批判として発表された「日本古代文化に於ける播布性に就いて」、或いは先験的伝播論に対置すべく提出された「播布性」の概念について正当な評価を行う事が必要であり、戦間期に於ける杉原荘介氏の学問体系から提出された播布性の概念について、一定の検討を行う事が必要であると言えよう。

この「日本古代文化に於ける播布性に就いて」は、1943年に刊行された『原史学序論』の中に「第二章　古代文化に於ける播布性」として採録された。しかし戦後の1946年に再版された『原史学序論』再版＝戦後版では、既に作者自身によって削除されている。これについては、あえて演繹的な仮説を提示した戦間期に於ける必要性（東京考古学会の伝統的な先験的伝播論への反省と、この立場への反定立）が終戦と共にその必要性を失ったので、取りあえず演繹的な仮説の全面的な提示よりも考古学的な実証の積み重ねによる帰納法的な操作を重んじる立場より、再版にあたっては割愛したものであると捉えておきたい。

今ここでは学史について述べる充分な用意がないが、杉原氏によって戦間期に為された研究の経時的変遷は、森本六爾氏を基とし小林行雄氏を強く意識する中で大局的に捉えて行く事が出来ると考えられる。本節で取り上げた播布性についても当初は森本氏の影響で伝播論的な考え方を持っていたものが、一方では小林氏の研究を強く意識しこれに対抗する中で、初めは弥生式土器と土師器との境界を説明するために用いられていた播布性が急激に転質し、伝播論に置き替わる作業仮説と

して再生されこの中から形式的には先験的伝播論が超克されて行ったものである（注13）。播布性の概念使用当初の直接的な目的は、弥生式土器と土師器の境界についての型式論的検討の欠落を補う演繹的な操作の必要性に求められる。杉原氏の体系の中では弥生式と土師器の境界について、最低限必要な型式論的検討が行われず、その替わりに播布性の概念を用いる事によって弥生式と土師器の境界が説明されてしまったのであった。そしてこれがある時から伝播論を超克する概念として用いられる事となったのである。この様に杉原氏の播布性の概念には当初の弥生式土器と土師器の境界の設定に関わる仮説としての初期の側面と、後の先験的伝播論批判の後期の側面の二通りの形態＝変遷が認められる。

7節　小結

杉原氏の土師器研究には二つの問題点が認められる。一つは、方法論的な問題であり、分布論に先行する型式論的な取扱である。もう一つは認識論的な問題であり、考古学的な事象の把握の背後にある様式論的な発想である。

1930年代後半から1940年代にかけての土師器研究は、山内氏等の提出した論点に対して杉原氏のそれに中心が置き変わって行った点を特徴とする。そしてこれに伴い、1930年代を通じて山内氏等によって提示された分布論的方法や形態の変遷を把える方法が実施される事が無くなり、竪穴住居址出土の一括資料に対して論理的な把握を行う事も無くなって来た。その反面、複数の住居址からなる調査区の資料を一括して、これに対して理論的解釈を行おうとする傾向が顕在化した。そしてこの傾向は、東京考古学会及びその機関誌である雑誌『考古学』を中心として弥生式土器研究で行われた方法と不可分の関係にあった。尚、これらの東京考古学会の人々の様式論では、土器の分析にとどまる事なく、その社会の分析を目的とする事が唱えられている。しかしその方法論に於いては、分析対象と分析者との間に介在する方法に対してあまりにも無自覚であったと言えよう。

例えば杉原氏は、雑誌『考古学』の中で須和田遺跡を題材にして竪穴住居址の発掘法について言及している（注14）。その発掘法自体は非常に優れており、それのみを見れば当時幾らか行われていた該期の竪穴住居址の発掘に比した時、恐らく最も科学的であると言う評価を下す事さえ出来るかも知れない。しかし、考古学の体系の中での資料の収集手段としての発掘と言った点については十分に自覚的でなく、発掘で得た分布論的同一性で把握された一括資料に対して切り合い関係等で分布論的差異性を捉え、更に型式論的操作、或は再び微視的な分布論的同一性と差異性（住居址内の出土位置、状況の検討）でこれを相対化して行くと言った具体的な操作が、土師器の編年に関わる資料操作の中ではついに行われる事がなかった。そしてそこに提示された標識遺跡での標識資料についても、多くは型式論的な位置付けを欠いたまま、一部のものについては異なった型式さえも混在して、提唱の10年以上後まで型式内容が不確定のまま混乱を来し続けるのである。鬼高式の住居址の中央から炉址が検出された須和田遺跡の一般的傾向も、この様に考える時非常に象徴的な事であると言えよう。

土師器に関する1930年代の杉原氏の研究、或いは編年では、考古学の方法について目的的選択や明示的使用が為される事がなかった。それは森本六爾氏を師とした杉原荘介氏が1930年代の研究に於いては未だ森本氏の体系に多くを依存していたからに他ならない。森本氏の病没を契機として、小林行雄氏を絶えず意識し続ける中から、1930年代後半から40年代の杉原氏の研究が成立する。鬼高式の設定に関わる1938年の論考「下総鬼高遺跡調査概報」の中での鬼高式の設定は手続き的に唐突であり、どの様な操作を経て古墳時代の土器として鬼高式を析出したのか不鮮明である。そしてこの時の須和田式への言及は予言的ですらある。

この様な資料に対する感性的分離は他の研究者に伝達され易い性質のものではなく、発展の契機が内的に保証されたものでもない。そして杉原氏の諸型式設定は逆に杉原氏自身の土師器研究を規定し、閉塞させてしまうものであった。それ故に新たな発展の為には、新しい体系を構築するか他者の体系に移行するかの選択を迫られる事となった。この点については、次章で述べたい。

分布論的な検討に先立って行われた型式論的な検討が含む問題を端的に現しているのもこの鬼高式の細分である。型式論的な視点が先行する事によって器形の相同性から分類された鬼高式Ⅰ類〜Ⅲ類は、同一の時期に帰属すると結論されていたのである。杉原氏の鬼高式の分類は、この様な分布論的な検討に先立つ型式論的な検討の危険性を十分に知らしめてくれるものである。

この様にして杉原氏等は、山内氏や奥田氏の先行研究に触れる事なく独自の研究を展開して行った。そして今日では、杉原氏以前に先行研究があった事や、その時点で既に提示されていた重要な視点が全て忘れ去られているのである。唯、この様な中にあっても、杉原氏が提示した播布性の概念は、正しく評価される必要がある。杉原氏による播布性の概念は当初、弥生式土器と土師器の境界設定に関して、型式論的取り扱いによる決定を回避する為に導入されたものであった。しかし、何故か急激に転質するところとなり、〈小林氏等による伝播論〉を超克する為の概念として再生されたものである。少なくとも1940年以降の杉原氏の研究については、この播布性の概念の理解なしに検討する事は出来ない。

次に、様式論的手法の出現の契機についても考えてみよう。

第2章で述べた様に考古学に於ける分類では、その根底に分布論的手法と型式論的手法が用いられる。ここで注意しなければならないのは、型式論的取り扱いによって分類が出来るのは原則として同一系統上にあるものだけである（注15）と言う型式論の制約である。換言するならば、多様化した器形を統一的に捉える事に対して、相同性、相似性を基本原理とする型式論はその方法を持っていない。それを為し得るのは本来は分布論なのである。この分布論的同一性をもとにして初めて異なった系統間の型式相互の並行関係について把える事が出来るのであって、その同時に存在する異なった系統どうしをくくる範疇として採用されるのが様式である。従って、様式は即自的には分類時の方法ではなく、前提として分布論的な同一性とこれに含まれる各型式の型式論的同一性が保証された上での、同時に存在する異なった形態の土器をくくる単なる範疇なのである。

しかし、一方で範疇としての様式は、設定されて以降あたかもそれが分類方法であるかの如く出土遺物の分類に用いられる事となり、範疇としての様式によって感性的に遺物が分類されて行く傾向が生じる。今日の様式論ではこの事が見過ごされ勝ちで、逆に一括出土遺物を様式で解体すると

言う事さえも日常的に行われているのである。様式は第一次的には範疇であって、型式論や分布論と同次元で遺物の分類方法として用いられるべき性質のものではない事を、ここで再確認しておきたい。

杉原氏は1939年頃から矢継ぎ早に、弥生式及び土師器についての関東各地の遺跡を報告し、諸型式の設定を行うと共に、1941年以降先史時代から原史時代までの研究を論理的に扱った幾つかの論文を提示し、ついに1943年に『原史学序論』を上梓した。この『原史学序論』初版＝戦間期版は書き下ろしではなく1941年以降に古代文化に掲載した論理的側面を扱った諸論文、同じく、41年以降に大学で行った発表や会報に掲載された論文、そしてそれ以前の卒論等を採録したものである（杉原1943,12 p3～4　注16）。

注釈

（注１）　杉原氏の鬼高式（1938年11月）・和泉式（1940年５月）、藤森氏の下蟹河原式（1939年11月）、寺内氏の中原式（1939年11月）等が該当しよう。

（注２）　近年自分の腹案では関東地方の土師器に少くとも五型式の細分を認めて居る。これは文書としては未だ発表して居ないが、時折請はれるままに説明することがあり、一部分は或る人々の報告の中に巧に織り込まれて居る様である。尚杉原荘介氏は独自の研究により三つの区分を試みて居るが（人類学雑誌53巻、昭13年）、追加改編を要すると思って居る」（山内1939,12 p46ℓ1～6）

と、山内氏が記している。この記述から1939年12月以前の出来事として、当時の土師器研究者には、①山内氏とは直接の関係がなく土師器の研究を行った杉原氏、②山内氏の教示を受けそれをあたかも自説のようにして発表を行った複数の人々、と言った二者があった事が理解される。これらの研究者は、山内氏等の研究に触れない事をその特徴としている。

（注３）　藤森氏も、後にその論中で「弥生式土器と土師器との限界は近時学界を賑はせた議論の中心である」（藤森1941,11 p8ℓ6）と述べている様に、山内清男氏の土師器研究については、第一に森本六爾氏が弥生式の研究者としての立場から主として弥生式と土師器との限界の問題として山内氏に対して反論を行い、少なくとも1932年の「日本遠古之文化」六以降、『ドルメン』誌上を中心として＜弥生式土器土師器境界論争＞が行われていたのであり、（前章注５を参照されたい）この様な背景から山内氏の土師器研究は1930年代の学会の中では、周知されていた事が明白である。。

（注４）　これについては山内清男氏が、

東日本の弥生式土器の調査には二つの宗派がある。その一つは縄紋式土器の細別に従事して来た連中の側であつて、八幡一郎氏の信濃南佐久郡及北佐久郡の調査の如く、縄紋ある又は縄紋式に近似した弥生式を古いと考へる立場であつて、自分もこの方の立場である。これに反して近頃東京考古学会側の若手連中は畿内九州方面の弥生式年代順の推定を利用して、東日本の弥生式の新旧を論ずる立場である。これは吉田富夫

氏（尾張、三河方面）杉原荘介（関東地方）藤森栄一（信濃）江藤千萬樹）伊豆）等の諸氏で、その報告は「考古学」誌上に陸続と現はれて居る。後者は弥生式の本源を北九州あたりに置き、その東方への進出を感激に満ちた調子で叙述する傾向を有して居るのが特徴である。自分はかくの如き早発性解釈を暫くおき、資料の整備を先づ心がけたいと思つて居る。（山内1939,12 p46ℓ28～37）

として批判している。

（注5） 杉原氏は、1943年8月の「原史時代文化に於ける様相に就いて」の中で、考古学に於いては様相を用い、様式概念を批判している。しかし研究史を鳥瞰するならば、その研究は様式論的であると言えよう。

（注6） この細分類された一～三類は、当時は共時的な存在として把えられていた。尚、この鬼高式の坏を構成する三つの類と言う分類は後々まで引き継がれて行く。この時点での三つの分類は共時的な形態についてのものにすぎなかったが、旧版『考古学講座』ではこれが共時的な存在の坏の二つの系統と一つの塊になり、更に『八王子市中田遺跡　資料編III』では共時的な坏の三者の、通時的な変遷過程の把握へと変わって行った。

（注7） 即ち、器形や器種構成について前代との類似から＜久ヶ原→前野町＞とし、鬼高式については鬼高式土器と祝部第一式土器が供に古墳内副葬品として発見される事から年代や共存関係を指摘し、須和田式については須和田式土器と祝部第二式土器の器形の一致により同時期のものであるとし、この両者はたまたま奈良朝平安朝初期の廃寺趾より出土するものと同式であり、又、文字を有する須和田式土器のその書体は明かに奈良朝平安朝初期の書体と一致するので、この時期がそれ等歴史時代の諸時代と同時期であるとしている。

この様に器形と器種構成の類似、古墳内の副葬品として共伴、特徴的な遺構からの出土、書体の一致、等から年代決定を行っている。しかしこの手法には、型式内細分の契機が一切含まれていない点に注意を喚起しておきたい。

又、鬼高式の設定から和泉式の設定を経て『原史学序論』に至る一連の著作の中で＜真間式＝飛鳥時代～奈良時代前半＞、＜国分式＝奈良時代後半～平安時代初期＞と言った規定が出来上がって行き、型式に対する絶対年代への言及の端緒となっている事も見逃せない。一旦型式の絶対年代について言及を行うと、それ以降では演繹的な操作により型式が年代に逆規定されると言う論理的操作の反転が容易に行われる様になる。この様な土器型式の設定に対する演繹的な傾向は、型式論的な現象に対する動態把握と言った魅力的な側面も多々あり、この事をうまく捉えた研究が認められる事は事実である。しかし型式論的把握に先行した時代概念からの逆規定と言った型式設定の仕方は、土師器研究史の中では具体的な型式内容を巡って多くの問題を残してしまった。少なくとも、型式論的観点からの相対年代の十分な検討を優先させる事が本来的に必要であったと言えよう。

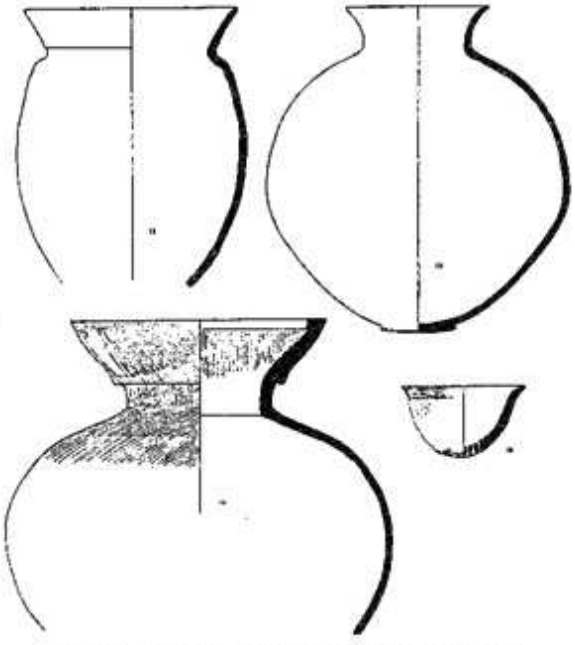
（注8） 藤森氏は、後述の中原式を鬼高遺跡の第一類と同様として祝部土器第一類に伴うものとし、下蟹河原式を鬼高遺跡の第二類と同様として祝部土器第一類以前の土師器としている。そしてこの時点では杉原氏は祝部土器出現以前の土師器について言及しておらず、藤森氏

等の発表から一年後の1940年に、「武蔵和泉遺跡調査概報」の中で初めて和泉遺跡の土器に「祝部式土器はその破片すら発見されないのであつてこの型式の土器に祝部式土器が伴はぬことは、本遺跡の事実に関する限り云へるであろう。」（杉原1940,5 p297ℓ3～4）として、祝部式土器出現以前の土器型式である和泉式を提唱し、結果的に山内氏の指摘「尚杉原荘介氏は独自の研究により三つの区分を試みて居るが（人類学雑誌53巻、昭13年）、追加改編を要すると思って居る。」（山内1939,12 p46）の通りになっている。

又、興味深い事に藤森氏は同遺跡からの出土資料17個体のうち、明らかに新しい末期の祝部土器２個体を除外した残りの15個体（１～15）について、１～11までを下蟹河原式とし12～15をその型式設定からは除外している。

今、下蟹河原式の型式設定から除外された各個体（第15図）に関する藤森氏の説明を見てみると、12については「往々土師器遺跡から出土してゐる。」（藤森1939,11 p560ℓ13～14）とし、より新しいものと考えている様であり、13・14については「由来かゝる器型は疑もなく末期弥生式土器の範疇に加へられて居た。」（同 p561ℓ2～3）或は「焼成・刷毛目では土師器に近いがかゝる形態も、各地末期弥生式土器に現はれるものと現在では信じられてゐる。」（同 p561ℓ9～11）としている。15については考察から除外されている。

ここで特に注意しなければならないのは下蟹河原式と、13、14の土器との関係について、「未だ所謂坏としての分化を見ない塊等を包含した一群の古式土師器が、殆ど弥生式土器として疑ひない二三の壺形土器と共存」（同 p562c1ℓ16～c2ℓ1）したと捉えられている点である。藤森氏に於いても東京考古学会的な様式論の基に、その文化伝播の図式から下蟹河原例を末期の弥生式土器と古式土師器の共存と捉えていたのである。尚、12についての「往々土師器遺跡から出土してゐる。」とした見解は、山内氏や奥田氏の土師器研究を参考にしたものであろう。



第15図　下蟹河原式設定から除外された資料

又、鬼高式Ｉ類に関する観察の内、「中原式土師器の特徴である口縁の軽い内屈と、それによつて器外面に現はれる浅い段は、明かに古式祝部土器、恐らく杉原氏の祝部第一式に相当するであろうが、それの蓋坏の口縁より示唆されたか、亦は伴存したと信ずべきも

のである。」（同 p562c2ℓ12～18）と言った、須恵器と土師器との形態上の関係に言及している点は注目される。

（注9）　寺内氏による杉原氏の所説に関する引用には幾らかの混乱が認められるが、基本的には中原遺跡出土の土師器を鬼高遺跡出土の土師器の第一類と同様であると見做し、更にこれを祝部土器出現以前のものとしている。

（注10）　ちなみに以上の事だけから考えると、杉原氏は先行研究者であった山内清男氏とは全く接点を持たずに独自に土師器の研究を行っている様にも思われる。この事について、山内清男氏と東京考古学会、或いは、森本六爾氏との関係の脈絡のもとで多少触れて見たい。

少なくとも1932年に森本氏が帰国して以来、山内氏と森本氏の間には学問的に多くの点で対立があったと思われる。山内氏による縄紋式以降の時代への言及がこの対立の直接的な原因であったと考えられよう。特に、農耕の問題、或いは『ドルメン』に連載された「日本遠古之文化」の中で具体的に展開された方法論上の問題等は、森本氏の研究と多くの部分で抵触するものであった。この様な対立は考古学研究に於ける方法論確立の問題とも相俟って、山内氏を土師器の研究へと向かわせる事ともなった。この様な経緯の中で、1935年12月の原史文化研究会での発表「土師器の二大別」が為されるのである。この時点では山内氏が、森本氏と森本氏の主催する東京考古学会、或いはその機関誌の雑誌『考古学』に対してかなりの抵抗を持っていた事は想像に難くない。翌1936年には山内氏に師事した奥田直栄氏が『ミネルヴァ』誌上に多くの論考を寄せ、土師器研究の具体的な方法がかなり明らかになって来る。この様な中で森本氏は同年に病没し、東京に於いては杉原氏が森本氏の遺志を継ぐ事となった。従って同年頃より杉原氏の土師器研究は活発化して行く事となった。1938年には東京考古学会と貝塚研究会との合同を契機として東京考古学会に新しい動向が生じ、これに伴い貝塚研究会の研究連絡誌『貝塚』が東京考古学会の会報となって、酒詰仲男氏や和島誠一氏による学界点描や小文の中に山内氏の動向が掲載される様になって来る。この様な機運の中、東京考古学会は幅広く学界に訴え、新たに研究者の結束を図る事となる。そして1939年１月に東京日本橋倶楽部で東京考古学会第一回総会が開催される。この東京考古学会の呼びかけは、坪井良平氏による「開会之辞」に詳しい。即ち、

本会に就きましては、兎角従来外部からは森本君一派の機関であるが如く見らるゝ傾きがあり、森本君在世中には又左様みらるゝも已むを得ぬ事情もあつたのでありますが、かくては考古学研究の公の機関として遺憾の点もある訳でありますから、この十周年を迎ふるに当りまして同人一同協議の結果、学界の各方面に亘つて有力なる方々に本会に御参加を願つて、本会の機能を発揮するに就きまして遺憾なきを期し度いと思ふのであります。又中央並びに地方の研究機関とも一層連絡を保ち、本会の進展と共にそれらの機関の御発展にも寄與し得る事が出来れば大変仕合せだと思つて居ります。

一部識者の間には考古学関係の範囲内に置きまして、いくつかの異つた機関の存立

することは結局無用の摩擦を生ぜしめて学問の発達上面白くない結果を生ずるものでないかと心配せらるゝ向きもあり、且つ実際的に考へまして、もしその機関を運用する人々の間に何等かの関心があり、感情の問題をこれになひまぜました場合　誠にご心配の如き傾向の生ずることは蓋し否定出来ない事実であることを私も認むるものでありますが、又一方各種の会合には夫々の異つた伝統があり、気風があり、それが各〃相競ひ各〃刺激し合うことによつて、そこに学問の発展もみらるゝ次第でありますから、徒に感情に流るゝことを抑止し、各会合の特質を発揮せしむることに努めまするならば一つの学界内に於て異る機関の存立することは必ずしも排斥する必要はないと考へますので、私共としては、かくの如き関心が本会に対して抱かれてゐるといふ事に思ひを致して、飽くまでも会合は考古学の為めにあるのであつて、会合のために考古学があるのでないといふ事を常に念頭に置き、大いに学問の向上進展に努力する考へでなければならぬと思ひます。

我々の企画致しますことは、一に繋つて考古学の発達以外に他意ないのでありまして、親密な気分で和衷協同して、斯学の向上を図り度いといふ事を指標とするものでありますから、万一我々の行動が排他的にとらるゝやうな事がありましたならば、それは決して我々の本意ではないのでありまして、もしその間、我々に不用意なるものがあれば、之を是正することに吝かでないものであることを、こゝに申上げて置き度いと思ふのであります。（雑誌『考古学』10巻4号 1939,4 東京考古学会第一回総会記事 p186c1ℓ9～p187c2ℓ12）

と述べられているのである。この様な呼びかけを受けてか、この1月8日に行われた総会、研究発表会、懇親晩餐会、及び、翌9日に行われた東京帝室博物館見学、特別講演会、等に山内氏は全て出席している。同総会後の研究発表会では、杉原氏の「南関東を中心とせる土師部祝部土器の諸問題」が発表され、又、同年中には寺内氏や藤森氏の土師器に関わる論考が発表されている。この様な中で同1939年12月には山内氏によって、「日本遠古之文化」が補註付の新版の形で出版される事となる。そしてこの補註の中では再び森本氏や東京考古学会に対して痛烈な批判が行われており、同年中に山内氏をしてこの様な状態に至らしめる何らかの出来事が起き、再び東京考古学会と対立して行く事となったと考えられよう。そして補注の中での土師器に関する次の記述、

近年自分の腹案では関東地方の土師器に少くとも五型式の細分を認めて居る。これは文書としては未だ発表して居ないが、時折請はれるままに説明することがあり、一部分は或る人々の報告の中に巧に織り込まれて居る様である。尚杉原荘介氏は独自の研究により三つの区分を試みて居るが（人類学雑誌53巻、昭13年）、追加改編を要すると思って居る。（山内1939,12 p46ℓ1～6）

が、見られるのである。

この様な事から少なくとも1938～39年中には山内氏は東京考古学会と比較的親密な関係にあった時期があり、土師器の研究に於いてもある程度の交流があったと考えられ、これ

を裏付ける記録も残されている。

和島氏は、1939年７月に発行された東京考古学会々報の『貝塚』第十一号に「原史時代部会の須和田遺跡見学」として一文を掲載しており、これによれば、

> 原史時代部会では去る五月二十八日（日曜日）下総須和田遺跡の見学を行つた午前十時、市川駅に集つた面々は、七田中村、江藤、長田、寺内、篠崎（善）、乙益、島田、杉原、神林、和島と珍しくもジエラード・グロート氏を加へて十二名。（和島1939,7 p4c1ℓ30～c2ℓ4）

であり、その後、

> 予定通り市川市の杉原家に赴き、須和田を始め各地の発掘物を前にして杉原氏の説明を聞く機会を得、更に夜に入つて自由討論を行ふ。杉原氏が人類学雑誌に発表した土師器の編年は今日の問題の中心となつた。更にこの部会が今後進むべき方向に就いても議論は熱心に行はれた。
>
> 先ず一般論として弥生式土器、土師器に就いての既存の概念を明かならしむること及び古墳出土の土師器、祝部土器の集成と再検討の必要なことが云はれ、また特殊なテーマとしては小型丸底土器及び既に山内清男氏も注意されてゐるが長手の甕の問題が出た。（同 p4c3ℓ11～25）

としており、杉原氏を含めた東京考古学会の原史部会で、山内氏の土師器編年について検討が為されている事が解る。

又、翌年の『貝塚』第十八号に掲載された、Ｓ・Ｊと言うイニシャルで書かれた「「人類学・先史学の用語に関する座談会」に出席して」という文中には、東京人類学会主催の談話会の内容について、

> 次に縄文土器か縄紋式土器か、或は弥生土器か、弥生式土器か、須恵か祝部土器か、土師はあるのかないのかと云ふ様な事が議論されました縄文は比較的多く使はれてゐるが字としては紋が正しいと云はれ、弥生式は入れる方の賛成者が絶対に多く、祝部は祭器作りの部があらうと云ふ空想から誤つてつけられたものだが、須恵はこれより合理的であるにも拘らずやはり使ふ人が現在少い様であると云はれ、最後に土師が最も問題になりました。山内氏は石器伴出の有無でわけ、後藤氏は轆轤使用の有無でわけると云はれましたが結局賛否半々で、近いうちに実物を持ちよつて展覧会をする事に話がきまりました。（酒詰他1940,3 p6c3ℓ7～39）

と言う記述が見られる。この記載では、山内氏も参加して発言したのか、或いは山内氏が以前から発表していた説が同日引き合いに出されただけなのかが不明瞭である。しかし、山内氏の土師器に関する説が検討されている事に変わりはない。

この様に山内氏の土師器研究は東京考古学会の人々と全く無縁で行われていたものではなく、山内氏は杉原氏等の土師器研究を批判しており、東京考古学会の人々も山内氏の土師器研究について討議しているのである。従って、互いの研究内容については、十分に知っていたと考える事が出来る。

(注11)　この点については森岡秀人氏が、考古学研究会第33回総会研究発表会で「弥生時代の時期区分原理について」の中で、

さて、杉原氏の弥生式文化研究の中で注意しなければならないことが一つあります。それは実は『原史学序論』の中の弥生式文化の問題の中で書かれておりますけれども、立屋敷期と唐古期そのものが弥生文化発祥の上で最古期で同時であるという指摘があります。杉原氏のこの考え方は、当時板付Ⅰ式の登場の前後から考えますと、非常に微妙な問題を含んでいるわけでありますが、工楽氏はこの弥生時代開始に関する杉原氏の評価に対し、疑義を抱かれ、一文を述べておりまして、「私の憶測に過ぎないかもしれませんが、史実としての九州弥生文化の東漸が、当時横行していた神武東征神話に利用されることを案じての配慮ではなかったか」と推察しています。これはあくまで工楽さんご自身の想像でありますが、杉原氏が亡くなられた現在、その適否自体わかりません。ただ、昨晩戸沢先生からは「そういうことを考える人ではない」という杉原先生の人格論を聞かせていただいたわけですが、この時期には当時の国家体制も関与して、こういった微妙な問題が時期区分なり時代区分の手法に影を落としているわけであります。（森岡1987,9 p36c2ℓ21～p37c1ℓ13）

としている。戸沢氏による杉原氏の人格論への言及はおくとして、小林氏の先験的伝播論に対しての杉原氏の「播布性」と言う概念の提出と、戦間期に於ける考古学の展開としての東漸説に対する批判、と言う点では工楽氏の想定は、的を得ていると考えられよう。

(注12)　これは戦後『考古学集刊』第2冊（第1巻2号）に「伊予阿方遺跡・片山遺跡調査概報」として発表されている。戦後行われた発表では、戦間期の風潮に対する反定立という側面が割愛されていると考えられよう。

(注13)　この播布性の概念に関する型式論的取り扱いを回避する用法から伝播論超克への急激な転質については、その理由を山内氏と杉原氏の関係に於いて捉える事が出来る可能性があろう。

(注14)　杉原1937,2

(注15)　この他に山内氏の業績である、相同の関係を持つ文様帯の比較という手法をあげる事が出来る。

(注16)　戦後の再版では内容の異同が認められる。『原史学序論』の構成については、星野1981,3に詳しい。

星野氏の論考中では杉原氏が用いた概念の変遷が検討され、この中から杉原氏の所説の発展過程が描き出されている。しかし杉原氏の研究を位置付けるには、単に用語法ではなく、杉原氏の資料に対する近接法、或いは同時代の他の研究者との関係、そして学史的に杉原氏の研究を規定している状況について等の研究の脈絡の中での検討が必要であって、星野氏の論考の取り扱い方では、全体として杉原氏の研究の特性が鮮明となっているとは言い難い。

第4章　萩原弘道氏による型式内容の検討：1950年代前半

1節　形態の連続的変遷に関する視点の再生

1950年代には、都内の開発の活発化に伴い土師器の住居址一括資料が増加して来た。この様な背景の中から、一括資料を中心として器形毎（注1）の相互比較から土師器の変遷を捉えて行こうとする視点が再び登場して来る。

土師器の資料、それも従来の調査区一括ではなく住居址一括資料の提示が行われ始め、これらの型式論的な取り扱いと編年論的な位置付けをめぐって様々な方法が模索される事となった。『西郊文化』（注2）が創刊を見たのも丁度この頃である。萩原弘道氏は東京の西郊、杉並での様々な発掘を通して、そこから検出された資料をもとに和泉式から鬼高式に至る土師器の変遷過程を提示し、これに基づいて中山淳子氏等と論争をくりひろげると共に、その成果はやがて中山氏によって1955年の旧版『考古学講座』の中に包摂されて行った。

この時期の研究史的な意味として、形態の連続的変遷と言う山内氏や奥田氏が提示しそれ以降等閑視されていた編年の視点が再生されて来た事があげられる（注3）。この様な、形態が連続的に変化して行くと言う考え方から、或る形態の遺物についてそれ以前とより以後の形態が検討の対象となり、この器形変遷の連続性を辿る事によって間型式的な器形の連続性が明らかになって行った（注4）。そしてこれは形態変遷上の特定段階を区切って差異化すると言う、編年の手法に採用されるところとなった。この様な考え方は従来杉原氏等によって行われていた、特徴的代表的な遺物を提出し、それをもとに型式を設定すると言った方法とは全く異なるものであり、山内氏や奥田氏の視点を再生させたものであると位置付ける事が出来る。

型式間の形態的連続性の把握によって、それぞれの遺物が変遷の中で支持され形態に付される名称も定まって来た。そして名称が整備される事によってより一層形態的特徴の概念化が進行し、この概念化されたもの相互の関係として型式が捉えられる様になって来た。即ちそれは、＜具体的な遺物群を指して型式のメルクマールとする＞従来の方向から＜概念化された内容で型式を論じる＞方向へと、研究の位相が高まって行った事に他ならない。又、これらの連続的変遷の中で、特定段階のみに出現する特徴的な遺物が注目される事となり、それをメルクマールとした編年も行われた（注5）。

本章では、萩原氏の論考を経時的に見て行き、この様な編年観或いは手法の成立する過程を検討して見よう。

2節　萩原弘道氏による従来編年への懐疑

萩原氏は杉並区を中心とした発掘を通じて、実際の住居址一括出土資料の取り扱いの中から従来の編年に対する懐疑的な姿勢を強めて行くと共に、山内氏や奥田氏等によって提示さ

れた視点の再生を図った。

萩原氏は1951年5月に「都内杉並区方南町峯に於ける竪穴群概報」を発表している。この中では鬼高式のあり方、或いは弥生式土器から土師器への変遷について言及がなされている。例えば、

> 神田川及び善福寺川沿岸に連なるこれら遺跡群より出土する土師器の概見した型式は、所謂鬼高式の範疇に加へられる。然しこの土器に関して次の点に留意したい。即ち、層序を有して前野町期より移行しており、初期型式たる所謂和泉式を知らぬこと。それらは器形の種類に乏しく甕・皿・盃が大部であり、壺を若干出土せしめ、他は例外的で寧ろ存在を認めない。出土土器の器形の仔細に及んだ時、皿・盃にみるそれは明らかに鬼高式と相違を持つ。須恵器を伴出しないこと等々に地方的な様式を示すものとして吟味検討の余地を認めるものである。（萩原1951,5 p90c3ℓ1～11）

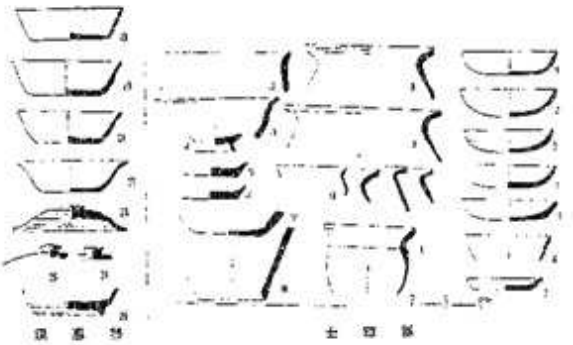
として、従来鬼高式と言われていたものと峯で検出された資料の差異に注目している。又、弥生式土器と土師器との関係については、

> 吾国の古墳文化は弥生式文化の漸進的な発達としてではなく、突然変異的に既成形態として見出されると小林行雄氏は説かれている。この事は古墳に於いてのみ言はれるのではなく住居址構造、土器などにみる改革も又突然変異と称しても宜しく思へる。古式古墳の出現を時間的に遡らせても現在の時代系列の意識を越すものではない。同様に弥生式末期より割然として土師式文化が出現したのであり、土器型式上、或いは住居址構造上その差違の甚だしいのを知るものである。（同 p90c3ℓ15～23）

として、急激な変化をしたと考えていた。この時点で既に従来流布されているものとしての鬼高式の内容にはやや懐疑的であり、眼前の資料から鬼高式の型式内容を把握して行こうとする傾向が窺える。又、資料の取り扱いも、基本的な単位として住居址一括を主体として為されている。

1952年12月には「銚子市松岸町原史時代遺蹟に就いて」を発表し、同遺跡出土遺物について、

> 以上述べた如く本遺跡出土の土師器、須恵器並びに施釉陶器は当地方に於ける這種遺跡のうち、最も新しいものゝ一つであつて、奈良時代前後の様相を多分に示しており、殊に施釉陶器が普遍化し、土師器、須恵器と交替する時期まで継続された遺跡と考へられる。即ち七世紀後半八世紀にかけての銚子地方の文化を示現ものである。（萩原1952,12 p26c2ℓ13～18）



第16図　松岸出土の土器

としており、鬼高式以降の土師器と須恵器についても言及している（第16図）。唯、従来から研究史の中でも指摘されている様に、萩原氏の紹介に為る松岸の資料は包含層と散布地の資料であって一括性が全く不明であり、従って資料取り扱いに関わる方法についても取り立てて斬新さはない。

同1952年12月には、「上代集落の形態」も発表している。この中でも、峯遺跡での住居址単位の遺物の取り扱いが認められ、

土器はその形態、数量共に多岐に亘るとは言へ、弥生式は完形品に乏しい上、煙滅址即ち工事による出土が大部分を占めるので、こゝでは八号址出土以外の土師器のみを採り上げてみたい。これは現在謂はれている鬼高式の名称を冠すべき形態、色調、焼成等の範囲を出ないもので、大局的には土師式中期であることは言を贅しない。然しながら鬼高式の土師器と伴存すべき須恵器の発見がない。これは本遺跡に限られた問題ではなく、南関東発見のこの期竪穴共通の事例であつて、そこに特殊な意義の包含がないならば、須恵器との関係は再考の余地を認めよう。それを理由とするとは考へないが、或いは信州、或いは常州出土の中期土師器と比較してもその差甚だしく、中期土師器中の最も精巧な遺品に言はねばならず、殊にその器質の緻密なることは他に類をみない。その分布の状態は未だ把握するに至らないが、長胴の煮沸用甕がその目安とされよう。これと共に特異なことは高坏を伴はないことである。既に高坏の使用は当地方においても都下和泉等の遺物に徴して明白であり、当時も当然存在したにも拘らず、全くその使用をみていない。これに関しては、祭祀の関係、部族の関係と、種々の憶測もあるが、今は触れることなく資料の増加に期し、後考に俟つのが賢明かと考へられる。（萩原1952,12 p27c2ℓ8～p28c2ℓ5）

として、特に鬼高式に該当する時期に須恵器を共伴しない事が強調され、又、長甕が中期の土師器の目安とされている。更に高坏の存在しない事も特色としてあげられている。高坏の転用支脚について触れた注の中で、奥田直栄氏の『中野区川嶋発見の原史時代竪穴』や『東京市西部に於ける古墳時代末期集落の規模』（1）同（2）を類例としてあげており、少なくともこの時点で奥田氏の一連の論考に目を通しており参考としていた事が窺われる。これ以降に提出される事となる萩原氏の一連の視点が山内氏、或いは奥田氏によって戦間期に提示されたものの再生である事に対して示唆的である。

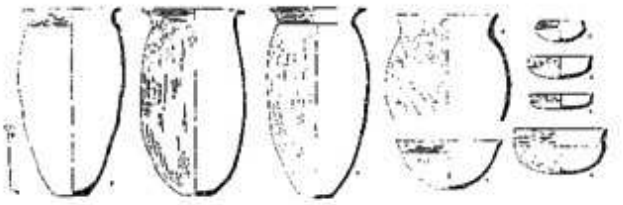
3節　萩原弘道氏による形態変化の把握

萩原氏は様々な発掘資料の取り扱いの中から、戦間期に提示されていた形態の連続的変化と言う視点を再生した。そして具体的な発掘資料とその状況に基づき、遺物に対する論理的操作を行った。

萩原氏は、1953年4月の「杉並区松ノ木中学校々庭の土師式竪穴遺構」で、同遺跡から検出された一軒の竪穴住居址出土遺物（第17図）について紹介している。この中で2について「南関東に分布する同形の土師器に於ける典型的な器体で、中期の所産とされる。」（萩原1953,4 p20ℓ16～17）としており、既にこの段階では学界の中で模倣坏が中期（鬼高期）のメルクマールとして認識されていた事が解る（注6）。3については、

3も聊か異形。全体は偏平で、内外面に著しい段状の凸凹を認める。即ち底部との境界をなす

外面の突出が大きく稜をなしこゝからやゝ内曲する。口縁近くに至り、外側に折れ、更に口唇が上部に向けて突出する。従つて本器体に於いては上下二段の稜線が構成される。内面に於いても同様に口縁部近く複雑であるが、外面に比すれば、鋭い凸凹はない。器面は丹塗施彩する。（同 p20c2ℓ16～p21c1ℓ5）



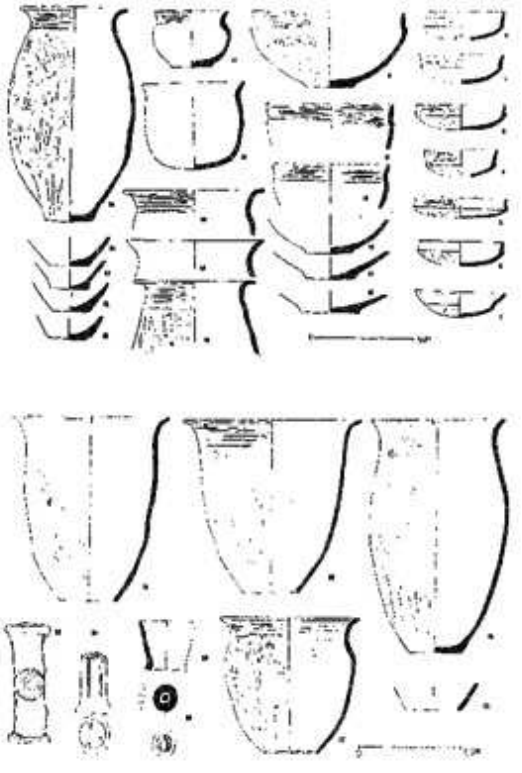
第17図　松ノ木出土の土器

と述べ、特異な形態を持ち尚且つ赤彩された坏の存在に注意している。6の甕についても緩い"くの字"形で括れる事を指摘し、「器体その他は稍古式に近いようである。」（同 p21c1ℓ22）としており、和泉式以降甕の口縁の屈曲が緩やかな方向に変わって行くと言う、形態変化による編年の見通しを持っていた事が理解される。7、8、9の甕については「関東地方に屢々発見され概ね中期に比定されるもの」（同 p21c1ℓ23～24）と述べている。そしてこれらの一括について、「本例にみる器体によつて代表される土師器は中期の所産で略々南関東に盛行をみたと解釈される。」（同 p22 c1ℓ14～15 注 7）と説明している。ここでは、2と3の共伴関係（特にこの模倣坏は器高に占める口辺部の割合が半分以下）に注目しておきたい。

萩原氏は続いて、同年12月の「杉並区堀之内済美台土師式住居址調査報告」で、同住居址出土遺物（第18図）のうち1～5について「本地方の土師式中期の典型をなす器態で、本竪穴の概ね竈周辺より見出された。」（萩原 1953,12 p37c2ℓ11～13）とし（6、7は本竪穴外）、その中でも5については、

5は器態としては比較的珍しく、近くでは松ノ木遺跡に一例認められる。焼成緊緻、薄手づくりで胎土に砂粒が含まれ、内面には丹塗する。口縁部には上に小さく突出してから内曲し、再び稜に向つて外反する。底部は極めて平坦で平盤を構成する。外面稜線以下には太く長いひつかき文をもつ。（同 p37 c2ℓ18～23）

と述べ、ここでも松ノ木中学校校庭の遺跡と同様に特異な形態を持ち赤彩されている坏が注目され、この坏と模倣坏との共伴関係（ここでも検出された模倣坏は器高に占める口辺部の割合が半分以下）が確認され



第18図　堀之内済美台出土の土器

ている。遺物全体については、「その年代的位置は、土師式中期に比定せられる」（同 p40c2ℓ6～7）としている。

尚、甕については幾つかの形態を説明した後に「この他水甕の口縁部は多数出土しており、17に近いものも少くない。従つて、この口縁の動きをもつて当地方土器の編年は殆んど不可能に近い。」（同 p39c2ℓ7～10）として一括中の口縁部形態に多様性が認められる事から、和泉式以降の甕の口縁部屈曲の弱まり具合いを基準とした先に示した変遷観が成立しづらい事にやや落胆している。

この二遺跡の調査報告の中での萩原氏は、土師器の編年研究に関して、

・基本的に住居址一括の資料を中心に考えて行く

・住居址一括出土遺物を同時期に帰属するものと見做した

・器形が時間的に連続して変遷すると見做した

・一括出土遺物に多様性が認められるとした

と言った各点に関する明瞭な認識を持ち、操作の基本としていた事が理解される。松ノ木中学校校庭の遺跡、或いは堀之内済美台の遺跡では、何れも一括を基本的な認識の単位として検討を行っている。そしてこの一括に対しては、同時に存在しているものであると言う前提のもとにその検討が行われているのである。この様な検討の中で甕の形態を中心として器形が連続的に変遷して行くと言った変遷観が確立されると共に、この多分に直感的な把握のされ方である単一的変遷観に当てはまらない多様性も、相即的に認識されて行ったのである。

尚、ここで取り上げた見解の多くの部分は、既に戦間期に山内清男氏や奥田直栄氏が到達していたものである。同氏等に於いてはこれらの認識は分布論的検討と型式論的検討の間断なき反復の過程として実現されていたのであるが、杉原氏に代表される東京考古学会を中心とする研究の中で、基礎的な操作が必ずしも十分ではない安易な型式の設定と言った異なった方向へと転換され、遺物操作に於ける正規の方法と編年の有効な視点が忘却され、これを前提として戦後の諸研究が成立している。萩原弘道氏の研究もこの様な東京考古学会を中心とする研究を前提としながらも、この中で再び戦間期に獲得されていた視点が再生されたものである。

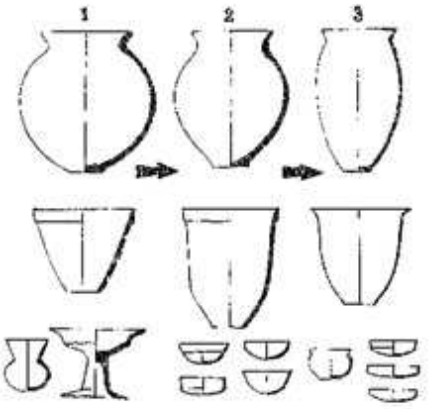
4節　矢倉台式の提唱

萩原氏は矢倉台出土の土器を和泉式との類似から前期とした上で、矢倉台の資料を出土した住居址が竈をもっている事から前期を二分し、前半を和泉式、後半を矢倉台式として新型式の定立を行った。

1954年7月には、研究史上著名な矢倉台式の提唱「土師式文化前期に對する一考察」が発表された。これは1952～53年に渡って浜田達一郎、青木一美、榊原松司の各氏によって調査された矢倉台遺跡の資料を基に、萩原氏が型式設定を行ったものである。

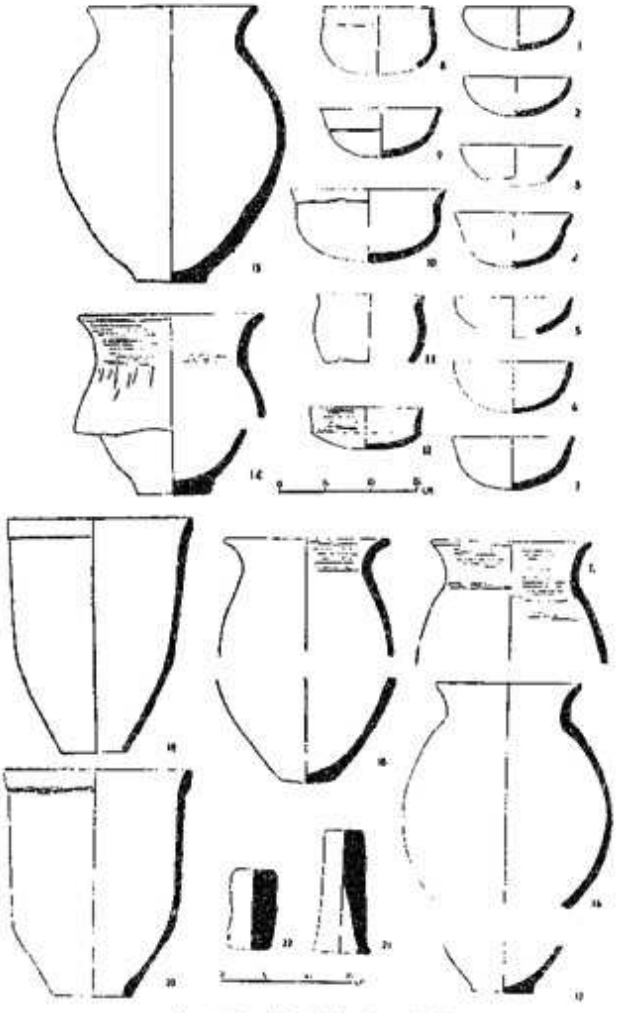
この矢倉台式の設定は、先に杉原氏が提示した和泉式と自身が中期の典型として認識し紹介した松ノ木、或は済美台出土の土師器との間への、矢倉台遺跡出土資料の位置付けと言った側面を持っ

ている。従って矢倉台遺跡出土の土師器について、先の両者の中間に位置付けられる根拠の提示が必要であって、この為<和泉→矢倉台→鬼高>と言った通時的な器形毎の変遷観、或は各期を特徴付ける文物がここで初めて示される事になる（第19図）。これは土師器編年研究に於いて、一括を基軸としながらも複数型式を通じて器形毎の連続的な変遷観を具体的に図示して型式設定を行った最初のものである。そしてそれは形態の変遷観の中に各型式を位置付けると言った意味で型式が概念化されているところに、最大の意義を認める事が出来るものである。



第19図　土師器の形態変遷

この図版説明には「特に甕・甑に形態移行が認められるが、坩、坏、盌、の類は各期特色をもって相互に連絡が少ないようである。」（同 p49c2）と記載され、各期の特徴が甕については形態の変遷として、坏については特徴を持った形態の入れ替わりとして把えられている。又、特に模倣坏については矢倉台式として提示された土器（第20図－12）の他型式との差異化に際して「12は中期の盤形土器と類似した器形であるが、口辺の高いこと、即ち稜線が中央より下部にあることが中期の上部にあるものとの相違点であつて、これが両者の標識相違となるようである。」（同 p48c1ℓ18～21）として、従来鬼高式のメルクマールとされていた模倣坏が経時的な変化（器高に占める口辺部の割合が次第に小さくなる）を示す事が具体的に提示され、これの中での型式としての分割が行われた。ここで注意すべき事は、萩原氏は従来の<中期の鬼高式、そしてそのメルクマールとしての模倣坏>と言う考え方に対して模倣坏を差異化して見せ、より古い（口辺部が器高に占める割合が半分以上）と認定したものについては中期から分離して前期に帰属させ矢倉台式として定立した事である。


第20図　矢倉台出土の土器

尚、萩原氏によって提示された変遷模式図を見てみると連続的変遷を辿る

とされた模倣坏以外のものについては、各期に特徴的に出現する特異な形態の坏類があげられ、矢倉台式では半球状のものや口辺部に折返しを持ったものを、鬼高式では再三注目してきた特異な形態で赤彩されたものをあげている。特に、甕の形態変遷の模式図が作成された事は重要である。

その古い部分を矢倉台式として分離・除外した後に残された鬼高式に該当する部分の細分についても「集落址の竪穴住居が確実に二期乃至それ以上に分類し得ても、土器形態に全く差異が認められないまゝ、依然土器によつてこれを割出すことができず、問題になり得ていない。」（同 p53c2ℓ14～17）として分期の困難さを吐露する一方「従つて鬼高式の位置は盤（坏）形土器の一部によつて前後を判定するのみで、標識的な（第二図12）土器を伴出しない限り、現在のところ難解な状態である。」（同 p53c2ℓ17～19）として、鬼高式としてくくられる型式内部での具体的な個別資料に対する相対的な位置付けについて、模倣坏の形態から判断出来ると認識していた事が解る。この編年的位置のメルクマールとされた模倣坏の形態的な特徴は、先に矢倉台式と鬼高式の弁別時に指摘された稜線の位置であろう。即ち古いものほど稜線の位置が低く（器高に占める口辺部の割合が大きく）、新しいものほど稜線の位置が高い（器高に占める口辺部の割合が小さい）と言う事であると考えられる。尚、同氏によって提示された編年表（同 p54c1）の中では鬼高式は１と２に二分されている（第21図）。

第21図　萩原氏の編年表

ここで特に注目しておきたいのは、おおまかな甕の形態変遷、模倣坏の形態変遷のばらつきの中に埋没してしまう時間幅の検出の難しさが問題とされている事である。これは一括を基軸として、その一括を形態の連続的変遷の中に位置付け並べて行く操作の中で形態変化の細分が進行し、もはや住居址覆土内一括の組成に認められるばらつきを越えてしまったと言う認識である。つまりここでは、一定の枠組みの中での型式論と分布論の相互相対化が閉塞状況に達しているのである（注８）。少なくとも土師器研究に於いて、具体的な資料を用いてこの認識に至ったのは奥田直栄氏による1936年12月の「東京市西部に於ける古墳時代末期集落の規模」（三）以来の事であろう。

ここで萩原氏の操作を振り返って見ると、これらの操作は、

①住居址内覆土に含まれる一括資料の把握（分布論的同一性の把握）
②器形毎の把握（①の型式論的差異化による相対化）
③一括を単位とした器形毎の比較（②の分布論的差異化による相対化）
④各器形での変遷のモデル作成（③の型式論的差異化による相対化）
⑤連続的変遷中での型式境界の設定（④の型式論的同一性による相対化）
⑥連続的変遷モデルの一括による検証（④の分布論的同一性による相対化）

として、概念的に把握される。土師器についてのこの様な操作は、先の奥田直栄氏以来絶えて久しかった事である。そしてこの様な方法は、杉原氏の一連の論考中には認める事の出来ないものである。

尚、表12は萩原氏によって述べられた各遺物の特徴的な形態と帰属時期を示したものである。

ここで矢倉台式の提唱にかかる萩原氏の問題構成を確認しておこう。即ち、萩原氏は土師式文化自体の編年を目的として掲げており、それ故に「土師器及び竪穴によつて特色づけられるいわゆる土師式文化」（同 p46c1ℓ3～4）について、「土師器の編年とは別に、土師式文化の編年を組む上の、大きな把握点に、竪穴住居址の内容が挙げられる。」（同 p46c2ℓ17～p47c1ℓ1）として、土師式文化の編年の下位に土師器の編年と竪穴住居の編年を位置付けている。そしてその上で、

表12　矢倉台式提唱時の土師器の形態と帰属時期

	模倣坏	特色を持った坏	甕
和泉式	存在しない	存在しない	球形
矢倉台式	口辺部が半分以上	半球状のもの 口辺部を折り返し	やや引き延ばした球
鬼高式	口辺部が半分以下	特異な形態で赤彩	胴長

> 和泉遺跡に発見された二例の竪穴住居址は、掘窪められた炉によって照明と炊事を兼ねていたことから、土師式文化前期に於いては未だ竈の使用をみなかつたと仮定され、かつこれは定説化していつたのである。従つて現行の定説に従えば、竈は中期に於いて粘土製として出現し、後期に於いて石組に変ずるのである。（同 p47ℓ3～8）

と言った竪穴住居址の編年に於けるカマドの発生の位置付けを確認した上で、矢倉台遺跡出土の土器を先ず土器編年の上から「和泉式と同様な様相を有」（同 p47ℓ14）する事を根拠として前期のものとし、しかる後に前期和泉式との差異化として前述した「土師式中期の土器に移行する形態を併せ有するものであつた」（同 p47ℓ14～15）事、並びに竪穴住居址の編年の上から竈を有している点をあげて、これらの事より矢倉台出土の土器を土師式前期の終わりに位置付けているのである。従って他の研究者が矢倉台式を是認する時にも、否認する場合に於いてはなおさら、この様な矢倉台式の提唱方法に留意する事が必要であって、この萩原氏の矢倉台式について論理的に検討が行われるならば、今まで触れられる事がなかった和泉式と鬼高式の境界の問題を取り扱わざるを得なくなり、必然的に型式概念の問題へと論が発展して行く事になるのである。この様な経過のもとに、土師器の型式概念が主題的に論じられる背景が矢倉台式の提唱と共に形作られて行った。矢倉台式の提唱は従来評価されていた矢倉台式という型式の提唱と言った側面のみならず、この様な型式論研究上の大きな意味を持っていると考えられる。

5節　小結

萩原氏は資料操作の中から器形の連続的変遷と言った視点を明示し、それは以前山内氏等が打ち立てた基本的な方法から得られた結論、或いは奥田氏によって実践された分類の視点と非常に近接したものであった。

萩原弘道氏によって行われた、器形毎の変遷傾向を捉えこの器形の連続的変遷の中で具体的なメルクマールを設定して型式を認定して行くと言う考え方は、戦間期に杉原氏によって行われた諸型式設定でのあり方、即ち特徴的な組成を持つ遺物群を型式として設定すると言ったものとは全く異

なり、山内氏や奥田氏によって提示された視点を再生させたものであった。この様な方法を採用する事によって始めて型式の概念化を行う事が出来、従ってそこから型式概念の相互関係、つまり系統を論じる事が出来る様になったのである。この様にして把握された型式概念は細分の契機を内包し、型式概念の外延としてこれの相互関係である系統性の問題、つまり広域編年へとつながるものであった。山内氏或いは奥田氏によって提示され、杉原氏によって閑却されていた論点を再び萩原氏が再生した事によって、それ以降の編年研究に一定の理論的な背景が付与されたのである。

しかし、ここに於いても何故か萩原氏は杉原氏と同様に、戦間期に行われた山内氏や奥田氏による先行研究に対して言及する事が全くなかった。従って一連の研究の中で萩原氏が採用した視点については、山内氏、或いは奥田氏の所説との近接性が認められるものの、これらの先行研究との関連性が必ずしも明瞭ではなく、萩原氏の先取権をどの部分についてどの様な範囲で認めるか難しいところである。

尚、松ノ木中学校の遺跡、堀之内済美台の遺跡共に赤彩された特徴的な形態の坏が検出されており、この特徴的な坏が萩原氏の鬼高式細分（その古い部分を矢倉台式として除外した後に残された鬼高式の細分）に於ける鬼高式の新しい部分のメルクマールとなっている。この事は、後に岡田氏によって提唱された中田遺跡の報文である『八王子市中田遺跡　資料編Ⅲ』に掲載され一世を風靡した編年案（以下では中田Ⅲ編年と略記する）の中で行われた分期のメルクマールと密接な関係を持っており、注意しなければならない事である。

岡田氏は中田Ⅲ編年の中で鬼高式を三細分し、この中の鬼高式Ⅱ類のメルクマールとした坏に対して、

> この坏形土器は、本遺跡とその周辺では、非常に整った住居址にともなって発見され、器形成法もきわめて類似する。共伴するその他の器種から推して、鬼高期の中葉頃に比定されることは確実である。少なくとも東京都西部地域にかぎって、この坏形土器をひとつの時期決定のめやすとすることができるかもしれない。（岡田1968,3 p110ℓ26～29）

と述べている。この一群の特徴的な形態を持ち、赤彩された坏が鬼高式の後半の編年的目安になると言う視点、及び東京都西部地域と言う限定は、岡田氏の論考中にはその依拠するところが示されていないが明らかに萩原氏の一連の論考によるものであり、萩原氏が1953年の松ノ木中学校、或いは堀之内済美台で検出し、その特異な形状に着目して報告し、1956年に鬼高式の後半として位置付けたものであった。

注釈

（注1）　従来一般的に器種と言われているものに相当しよう。一般的な用法での器種は彼岸の用途を想定した含みが比較的強い概念なので、ここではこの用語の使用を避け器形と表現した。又、器種とした時には彼岸の用途との関係上、<坏>ではなく<坏形土器>と呼称するべきであろうが器形とした場合には唯単に坏と呼称しても差し支えあるまい。本論考中では全てこの呼称法に統一した。この事を了解した上で、器種と読み替えて頂いても差し

支えない。

（注２）　『西郊文化』（せいこうぶんか）は杉並区史の編纂に伴いその資料拾遺として企画され、1952年に杉並区史編纂委員会によって創刊された。以降年４冊を発行の目安とし、区史刊行以降は萩原弘道氏を主幹とする西郊文化研究会にその編集を引き継ぎ、1959年に18号までを刊行した。1962年には『歴史科学』と改題する事となったが、これは創刊号のみで廃刊となってしまった。同誌は土師器研究史上では、矢倉台式の提唱が萩原氏によって為された事等で著名である。

この『西郊文化』全16冊等については、杉並区教育委員会の重住豊氏の御好意で全冊の閲覧を初めとする様々な資料提供を受ける事が出来た。

（注３）　既に前章までで見て来た様に、この形態の連続的変遷が編年に有効であると言う視点については、その視点を提出するに至る過程で根底にあった分布論と型式論を根幹とした方法と共に山内氏と奥田氏の研究に先取権を認めるべきであろう。それ故に本論考中では萩原氏による再生と表現した。

（注４）　経時的な形態の変遷と言った考え方により具体的な甕の形態変遷の図が萩原氏によって作成され、又、模倣坏の口辺部の器高に占める長さの割合も、経時的な変化として把えられた。この様な視点から具体的な作図を行って提示したのは萩原氏が最初であろう。

（注５）　特異な形態を持った赤彩された坏が、鬼高式の後半に特徴的に出現する事が萩原氏によって注目された。これは現在比企型の坏と呼称されているもので、恐らく最初に注目して記述を行ったのは萩原氏であろう。そして萩原氏はやがてこれを鬼高式後半のメルクマールとして積極的な位置付けを行い、やがてこの視点が岡田氏によって採用され鬼高式Ⅱ類のメルクマールとされる事となった。

（注６）　杉原氏の鬼高遺跡の調査概報にこの形のものが掲載されて以来、所謂須恵器模倣坏と今日呼ばれているものが鬼高式の組成の中で捉えられる事になったが、この模倣坏を鬼高式のメルクマールとして明瞭に規定した文献は戦間期には見当たらない様である。各大学の研究室などで鬼高式を見分ける方法として相伝され、次第に学界の共通認識となって行ったのではないかと思われる。

（注７）　ここで萩原氏の言うところの中期とは、縄紋式、弥生式、に対応する概念としての、土師式（土器時代）の中期である。ちなみに型式内容については今日の型式名が指し示すものと同一であるとは言えないものの、古墳時代の分期と対応する型式名の関係は、前期＝和泉式、中期＝鬼高式、後期＝真間式・国分式と言った枠組みであった。又、この時点では既に模倣坏が鬼高式のメルクマールとされていた。

（注８）　これは一時的なものである。このような論理的な閉塞状態の中で、一方では型式論的同一性が問い直され、又、一方では分布論的同一性が問い直され、この様な状況の中で相互共により高い次元での新たな対立関係として捉えられるべきものである。例えば型式論は系統関係の問題として、分布論は微視的な遺構内出土状態論として相対化されるべきであろう。

第５章　中山淳子氏による型式概念の検討：1950年代後半

１節　中山淳子氏の矢倉台式に対する反論

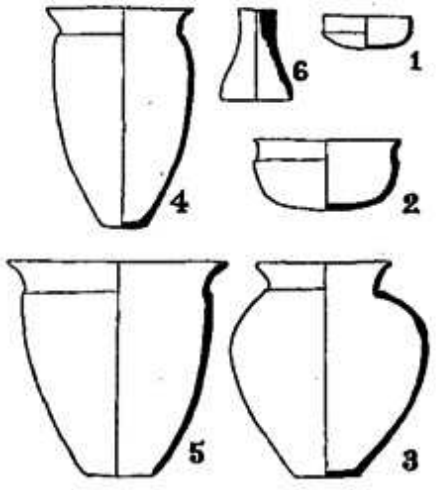
萩原氏の矢倉台式の提唱に対して、杉原荘介氏に師事する中山淳子氏によって二点の反論が行われた。

前章で見て来た様な、山内氏或いは奥田氏によって展開された戦間期の土師器研究を彷彿とさせる萩原氏の諸論考に対して、学界からはどの様な反応が示されたのであろうか。土師器四型式の名称を設定し、戦間期の東京考古学会、或いはその後身である日本古代文化学会の東日本に於ける諸活動の主導者であった杉原荘介氏は、戦後に於いては登呂遺跡、或いは岩宿遺跡の発掘等、しばらくの間は土師器研究に対して積極的ではなく、杉原氏に師事した中山淳子氏が、戦後の土師器研究に於いては杉原氏に代わって登場する事となった。

萩原氏による矢倉台式の提唱から５カ月後の1954年12月に、追いかけるようにして同誌10号の誌上に当時明治大学の学生であった中山淳子氏が、「中野富士見台遺跡の小さな結果」を発表した。その文中では明確には触れられていないが、この中山氏の論考は先の萩原氏の主張（矢倉台式の提唱）についての、型式内容に対する型式概念からの反論として位置付ける事が出来るものであった（注１）。

そこでは富士見台遺跡出土の資料を基にして、萩原氏が前掲の文中で述べた坏の変遷観と同様な見解を取りつつも、模倣坏の出現と言う須恵器の形態の模倣による飛躍から＜模倣坏の出現＝鬼高式＞であるとして、富士見台の資料を鬼高式として明示すると共に、これによって同様に矢倉台遺跡の資料、並びに矢倉台式に対しても鬼高式の古い部分として把えると言う姿勢が暗に示された。

第22図の遺物について、「富士見台の土器は中期の中でも古いものに属すると思う。」（中山1954,12 p29c1ℓ21～22）と述べ、古い理由として「坏の口縁部の段の上が高く、須恵器の古いタイプのものに類似していたこと」（同 p29c2ℓ2～3）と言った萩原氏と同様の主張をしている。つまり、模倣坏の変遷について器高に占める口辺部の割合が少なくなって行くと言った萩原氏の主張を認めつつ、変遷理由として須恵器との関連性「そして鬼高期でも盛期のもの終末に近いものがあるわけであり、現にその移行も須恵器の変遷に相まつて展開されて来ていると思われる。」（同 p29c2ℓ4～6）を提示している。これによって、表記の資料を萩原氏と同様の模倣坏の変遷観から古いと位置付けている訳である。そして型式概念についての批判では「然し、それ等の新古の関係は、一つ一つ型式として設定すべき意味はないのではないかと考えている。」とし、「土師器



第22図　富士見台出土の土器

をいくつかの時期に分ける時、その時期との間に、飛躍が持たれているであろう。例えば、和泉期から鬼高期への過渡が須恵器の模倣によって、それまで全つたく考えられもしなかった異なったタイプを編み出していると云う様に。」（同 p29c2ℓ6～15）と述べている（注2）。即ち、<模倣坏の出現＝鬼高式>と言う考え方である。

ここでの中山氏は、具体的に矢倉台式の名称を出してこれに対する批判を行っている訳ではないが、前後の経過から見て「中野富士見台遺跡の小さな結果」は、矢倉台式の設定に対してこれへの批判として書かれている事が明白である。しかしその文中では矢倉台出土の資料の組成内容については多く言及されておらず、あくまでも型式概念の問題として模倣坏の出現を前代の和泉式と鬼高式の差異化の画期にすると言う事を主張しているのである。この結果、全体的な様相が和泉式に似ている事から萩原氏によって中期の所産であるとされた矢倉台式が、模倣坏の存在によって鬼高期に含まれる古い部分であるとされ、更に新型式としての矢倉台式の分離・定立には型式概念の意義から反対した訳である。

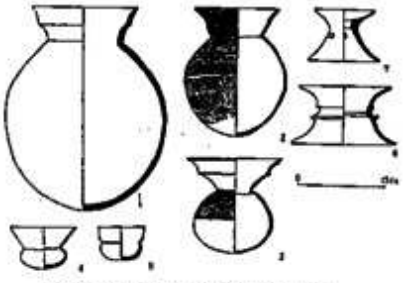
この段階の中山氏の論点の中では、模倣坏の出現即ち鬼高式と言った視点を明瞭に提示した事が重要であると言えよう。

2節　型式内容提示とこの中での形態毎の変遷観

形態の連続的変遷と言った萩原氏によって再生された視点が中山氏或いは杉原氏に受け継がれ、両氏の編年体系の根幹となって行った。

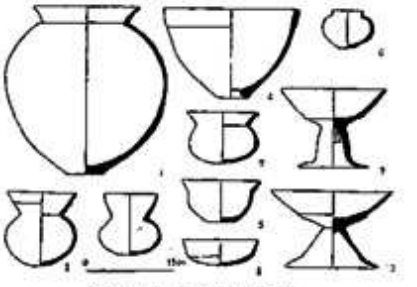
1955年には、杉原、中山両氏共著の「土師器」が旧版『日本考古学講座』5に発表された。この論考が百花繚乱のごとき状況を呈していた当時の土師器編年研究に於いて、一つの体系性を確認した意味は大きい。そしてその体系は、山内氏以来の諸説を総合化して形成されている事が最大の特色である。

戦間期に杉原氏によって提唱され戦後の研究の中で疑問視されつつあった土師器四型式が、この論考の中で形態の連続的変遷と言った視点を取り込む事によって再生される事となった。そしてこの時に、和泉式以前に位置付けられた土器も提示された（第23図）。



第23図　和泉式以前の土器

ここで鬼高式として掲載された模倣坏は中山氏が富士見台出土として報告されていたもので、和泉式（第24）として掲載された坏は他の遺物が全て和泉遺跡の出土の土器であるのに、この一点だけが長野県伊久間遺跡出土のものである。何故この長野県伊久間遺跡出土の土器がここに和泉式土器の代表としてあげられて



第24図　和泉式土器

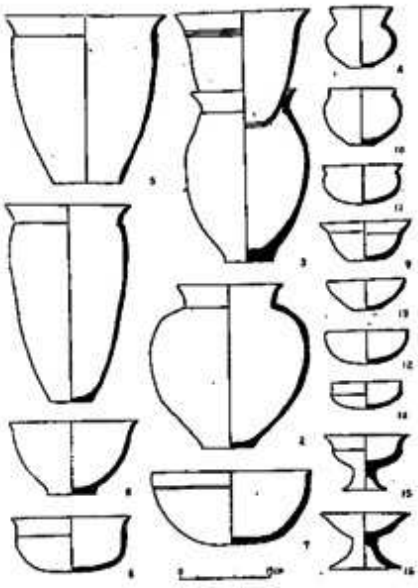
いるのか、大きな疑問である（注3）。

土師器の型式概念については、

> 和泉式期の終りから真間式期に至る土器の変化を見ると、広く鬼高式土器に含まれるこれらの土器は、甕は口縁が徐々に立って、胴が長くなって行き、坏は胴部が大きく、したがって口縁部が小さくなって行き、また坏は、口縁部が外に広がって行くのであるが、このような変化は、決して飛躍を持たない一連の漸移的変移である。
> そこで、これの新古を、変化の程度によって見極めるならば、それは容易になし得ることがある。すなわち、おそらく他型式の土師器より長く使用されていたであろう、鬼高式は、さらに二つ以上に分類することが可能であるといえる。　（杉原他1955,7 p214ℓ17～p215ℓ5）

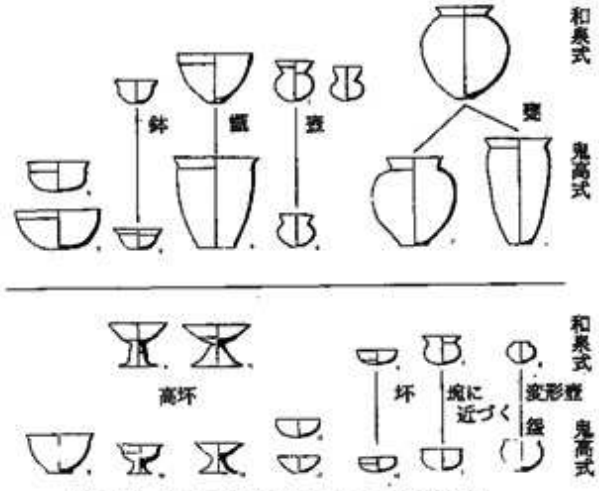
として細分する事は出来るが、型式としての定立は行わない事が重ねて主張されている。

この様にして富士見台遺跡出土遺物を鬼高式の標準とし（第25図）、和泉式の中に和泉遺跡出土の遺物に加えて伊久間遺跡出土の坏を挿入し、坏の須恵器模倣を和泉式と鬼高式の画期として、矢倉台式の型式内容を漸移的な変化の中の一場面として捉えて型式としての矢倉台式を否定し、その編年の体系化が図られて行った。これによって矢倉台式は和泉式と鬼高式の境界の概念的取り扱いの問題の中に解消され、具体的な決着を見ないまま以降再び取り上げられる事が無くなってしまうのである。



第25図　鬼高式土器

ここで鬼高式として掲載されている坏類について見てみると、先の鬼高遺跡で一～三類として形態によって細別されたものがそれぞれ坏の二者と塊に相当し、新たに盌が加わっている（注4）。甕については二形態の分化を示している（第26図）。

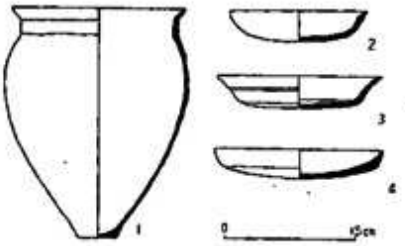


第26図　和泉式から鬼高式への形態変化

尚、真間式、国分式に関しては、型式設定から13年（須和田第一式と須和田第二式と言った細分からは、15年）経たこの時点で、初めて型式設定者等によってその組成の一部と考えられるものが明らかにされた。

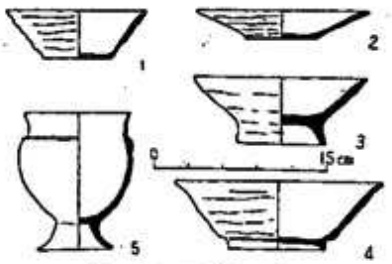
真間式（第27図）について甕形土器は「鬼高式土器の時期において、甑の下に重ねて用いられた

深甕の後身であって、胴は鬼高式よりもさらに長く、口縁部は大きく頑丈に作られるようになる。」ものと、「器肉の薄いそれほど長くないものである。口縁部に特徴が見られ、滑らかに外反せず一度垂直に立ち、口縁の上端で急に外屈している。底部が小さく、貯蔵様の甕と考えるには疑問がある。」の二者をあげ、坏形土器は、「底部がわずかに内曲した丸底で、口縁部は真直ぐに上外方に伸びているものであるが、底部と口縁部との境に稜が残っているものと（第３図３・４）、稜がなく滑らかに曲線を描いているものとがある（第３図２）。」（同 p211 ℓ18～p212ℓ7）としてやはり二者をあげており、その他高坏等にも言及している。



第27図　真間式土器

国分式土器（第28図）については、甕形土器は「肩の張った器形で、底は平底であり、胴部にはロクロあとと思われる平行線が横に走っている。口縁部は外反しているが、四角く稜を立てて作ったり、口唇を上に折ったりして、須恵器の口縁部との関係を思わせる。」としており、坏形土器は、「底部から口縁へ向って真直ぐに広がっているもので、ロクロのあとが縞状に残っている。口縁は鬼高・真間両型式と異なり、平面上に伏せて製作されないので、上下に歪んでいる。底部は糸切り底で、糸切りのあとがそのまま残っているものと、ヘラで擦って消してあるものとがある（第４図１・２）。また、勾台のあるものもある（第４図３・４）。」（同 p213ℓ3～ℓ11）としている。ここで述べられている甕についての説明が、どの様な資料に依拠しているのか不明であるが、同様の特徴を持った土器は例えば萩原氏が1952年に報告した「銚子市松岸町原史時代遺跡に就いて」の中に認められる。



第28図　国分式土器

坏類について真間式の特徴として上げられているのは坏形土器が盤と呼ばれる形態になった事で、同様に国分式の特徴としてあげられているのはそれまで板の上で伏せて作られていた坏形土器（それ故に、口縁が平）が、ロクロによって作られる様になった事（口縁が上下に歪む）であるとまとめる事が出来よう（注５）。

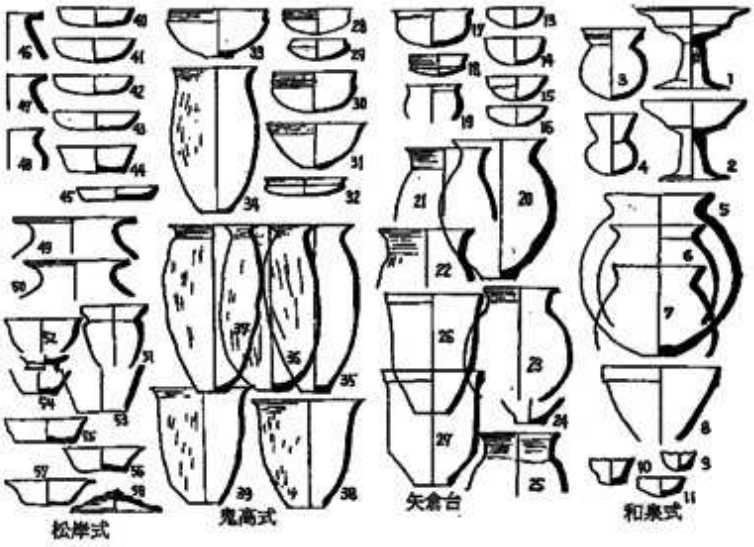
尚、ここで見られる型式内容についての幾つかの混乱は、杉原氏等がまだこの時点で良好な一括資料を認識していなかった事に起因すると思われる。逆に考えるならば、この時点に於いても未だ分布論的同一性の検討が不十分なままで型式が論じられていたものであると言えよう。特にこの傾向は、甕類の取り扱いに於いて顕著に現象している。この事は資料が研究の全てを規定するものではなく、研究者のあり方、つまり方法や視点が逆に資料の位置付けを規定し、認識を制約して行く事を端的に物語っている。

３節　萩原氏の再論

形態変遷を基軸とした土師器の編年とこの中での矢倉台式の提唱に対して、中山氏から土

師器四型式を固持する反論が為された。そしてこれに対して萩原氏によって再論が為された。

翌年の1956年には、更にこれを追いかけるようにして萩原氏が「土師器とその文化」を発表し、杉原氏等の見解に対置すべく自己の提唱する土師器編年を整備体系化して提示した（第29図）。ここでは、甕、坏について同氏の見解の総まとめが為されている（表13）。和泉式～鬼高式については、基本的に、甕、甑、坏の変遷観からの分類と言えよう。又、以前からの課題であった鬼高式の細分について、甕では「下ぶくれの形もあり、肩の張つたものもあるが、同一の竪穴から伴出するので、今のところ流行の新旧は詳かでない。」として依然進展しておらず、一方、坏については「図32の如き土器が出土する場合もあるが、これは後期に近い。」（萩原1956,2 p35c3ℓ7～p36c1ℓ3）として、ここで鬼高式（矢倉台式に相当する部分を除外した後に残されたものとしての鬼高式）の更に後期に近い時期のメルクマールとして、初めてこの坏を位置付けている。



第29図　萩原氏の編年標式資料

この特異な形態を持つ赤彩の坏が、鬼高式でも後期に近い部分のメルクマールとされた事に特に注目しておきたい。松ノ木遺跡、或は済美台遺跡では、いずれも口辺部の短い模倣坏と特異な形態の赤彩の坏が共伴しており、これらの資料を基にして鬼高式でも後期に近いとしたものであろう。

表13　「土師器とその文化」での土師器の形態と時期

	甕	坏
和　泉	球のような甕	
矢倉台	ぐつと横巾が狭くなる	口辺部が高く横線と縦線の交わる点が中央より下部にある
鬼　高	いよいよ長手になつてくる	稜の横線と断面の縦線が交わる点が中央よりやや上部になる

ここに至るまでの1950年代の研究を振り返ってみると、杉原氏等の研究方法の変化が解る。つまり、これ以前の段階では、杉原氏、中山氏と萩原氏の編年は方法論的に大きく異なっていた。

以前から杉原氏等は、異なった内容を比較的純粋に持つ遺跡を見つけ出して、この調査区内出土遺物に対して型式として定立を行っており、一方の萩原氏は住居址内の一括を基本的な単位としてこれらの器形毎の相互比較（差異化と同一化）から配列を行い、各配列の中で型式の境界を検討して行った。しかし、この旧版『考古学講座』を境として、杉原氏等の方法の中には萩原氏の分析法が包摂される事となった。

戦間期に杉原氏によって提唱された土師器四型式は必ずしも客観的な性格のものではなかったが、

萩原氏が矢倉台式の提唱に関して1954年に発表した「土師式文化前期に對する一考察」の中では、土師器の型式が土師器相互の中での差異としてある程度明らかにされ、これを受けた中山氏等による1955年の旧版『考古学講座』、或いは更にこれを受けて1956年に発表された萩原氏の「土師器とその文化」等によって、土師器の形態変遷についての考え方がある程度一般化して来る事となったのである。しかしこの様に土師器の形態変遷に関する知識が周知化した事は、残念ながら土師器の型式論的取り扱いや編年論的取り扱いが適切な方法を以て為されていた事を必ずしも意味するものではない。寧ろ戦後の土師器編年研究は、戦間期に山内氏等が到達した論理的な側面に比べて重大な後退をしているのである。これは土師器研究に限った事ではなく先史考古学に於いても同様で、いわば戦後に編年研究に参入して行く事となった人々の研究に共通の問題であると言えよう。編年研究黎明期には眼前の資料によって各自の方法が不断に試され、意識的であると否とに関わらず、研究者はそれぞれの方法を先鋭化させて行った。即ち、そこでは各研究者の方法がその研究成果として直ちに示され、諸論争の中で研究者の方法の有効性が明瞭になって来たのである。しかし戦後に研究に参入した人々の前には既に編年の大枠とある程度の方法が提示されており、従ってことさら意識的に進めるのでない限り、論理的な側面が閑却されがちであった。この様な点に関しての反省は『考古学手帖』等に集約的に現れており、同誌の中では考古学の理論的側面や学史的側面の検討が多く為されている。例えば、高橋護氏は『考古学手帖』2号掲載の「土師器研究に対する疑問」の中で、

> 土師器の研究においても忘れてならないことは、土器の研究に先立って、その土器概念の範囲や、性格を規定すべきではない。それらのことは、土器の年代的にも地域的にも詳細な分析を通じて、はじめて導き出される。（高橋1958,6 p4c1ℓ23～24）

としている。戦後に土師器編年研究に参入した世代が無意識の内に陥ってしまっている、土器の分析に関する誤った立場に対しての批判である。又、

> 現在土師器の研究において最も強く要望されることは、弥生時代から古墳時代への歴史の発展において、人人の生活がどのように変ったかということ、すなわち古墳時代の一般の民衆の生活の中に、壮大な古墳によって象徴されるような、社会の基礎を見出すことであろう。このような立場からして残念なことは、土師器に対する見方がしばしば感覚的に過ぎることである。「弥生式土器の形態追求から、地域性を失ったと考えられる土器」（青考協連絡誌3）という規定のしかたにもみられるように、土師器の示す地域的相違に関知しない奇怪な考えが、いまだに広く行われていることは、不可思議なことといえよう。たとえ土師器の示す地域的な違いが、それほど顕著なものでないにしても。
>
> しかし、このような土器の見た目から感じ得る類似性から、畿内勢力の拡がりとか、統一的な国家の存在を感じうる神経は、やや鋭すぎて、科学とはいい難いものがある。示唆に富んだ小林行雄氏の「小型丸底土器小考」も、もはやそれだけでは考えの基礎として十分なものとはいえない現在、土師器の研究も、やはり縄文式土器や弥生式土器の研究の歩んだ道を通過しなければならないであろう。もちろん弥生式土器と土師器の区分の問題も全く最初から出なおすべきであろう。（同 p4c1ℓ30～c2ℓ17）

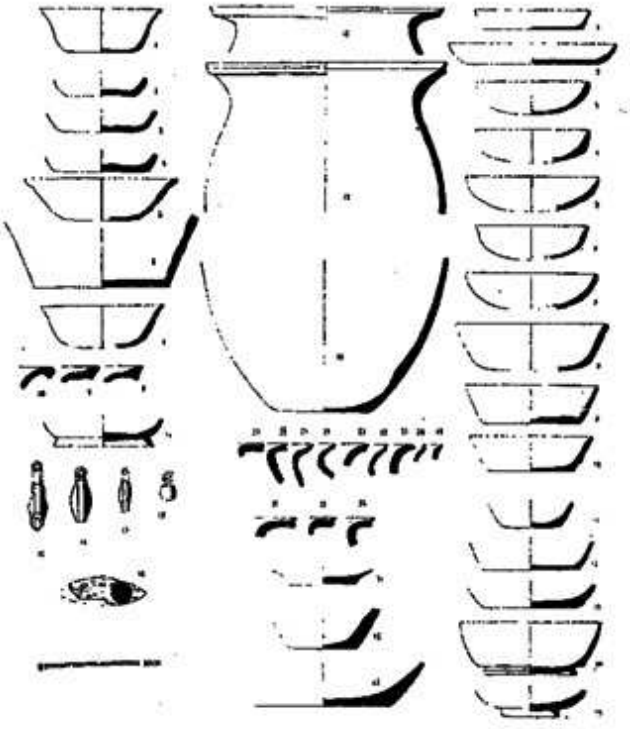
としている。この様に、土師器研究者に対して正規の方法で研究を進めて行く様に警告が為されているのである。

尚、萩原氏は中山氏等の反論に対して引き続いて幾つかの論考を発表し、松岸式、和泉式以前の土師器、矢倉台式等に対する自説の補強を図っている。

1956年6月には「銚子市松岸遺跡の土師器」を発表し、自身が提唱した松岸式に対して更に詳細な内容を明らかにした。

ここでは、新たに松岸から出土した資料（第30図）が追加報告されて、

土師器の編年については、近来特に研究が顕著であつて、和泉ー矢倉台ー鬼高ー松岸ー国分ー日下部各式がそれである。前述の如く萩原が松岸式を提唱してから後、早稲田大学の玉口時雄氏は、新宿区落合四丁目の遺跡より出土した土器をもつて、落合式と称すべく提唱された。筆者らも親しくいわゆる落合式の土師器を拝見したが、後期の特徴は明らかで、特に南関東の中期の長胴の甕を承けており、盤の形態も頗る標識的に思料された。萩原の主張した松岸式と玉口氏の言われる落合式は、共にかつての真間式の不備を補うべく唱えられたものであるが、詳細に検討を加えると両者の間にも多少の相違が認められる。結論を先に云えば編年上、鬼高ー落合ー松岸ー国分と来るべきなのである。その依るところは、松岸式には既に土師器の一部と須恵器は深皿を有する。しかるにこの深皿は国分式とは異なりその前駆的形態を持つこと。落合式はかかる須恵器乃至土師器の深皿を持たず、浅盤の最盛期を呈示しており、かつ長胴に表現される甕の中期から落合式への形態移行が首肯できること。



第30図　松岸出土の土器（追加）

以上の如き大きな相違を見い出し得るのであつて、当然両者間に時間的な差も生じるわけである。形態よりみた編年として、筆者らはこのように観ているが、両者の関係については更に識者の御教示を仰ぐ故以である。（萩原1956,6 p29c3ℓ2～p30c1ℓ3）

として、更に詳細な編年案が提唱されている。萩原氏は、具体的な各器形毎の通時的な変遷について、当時の研究者の中で最も詳細に把握していたであろうと思われる。

続いて1958年6月には、「末期弥生式土器と古式土師器の関係」を発表している。この中では旧版『考古学講座』の中でその存在が予告された和泉式以前の土師器の存在に関して、否定的な見解

が述べられ、

扨て、この問題に対する小論の結論を叙述の便宜上先に述べると、如上引用の所説とは異つて、いわゆる和泉式以前の土師器は、壺形土器の器形変化に若干の新知見の存在を認め得ても、編年上の型式として全く認め難いということにある。それは後述する如く、末期弥生式土器と土師器の混在であつて、斯かる遺跡の示現は当然予想さるべき筈であつたにも拘らず、最も陥入り易い機械的な分類法に支配された結果であつたに他ならない。（萩原1956,6 p3ℓ1～5）

としている。

尚、注の中で、

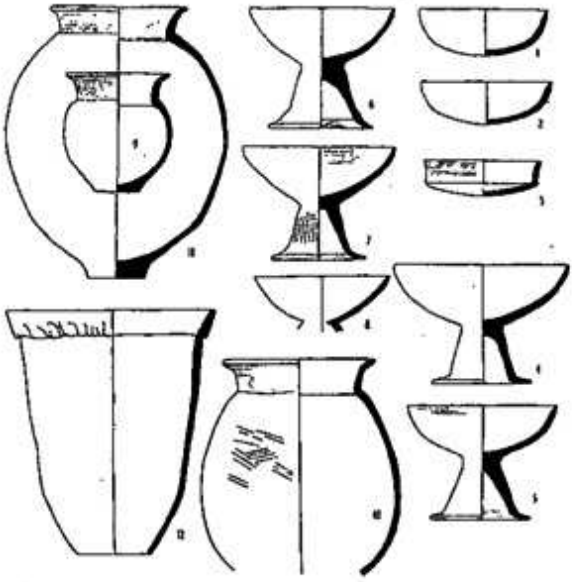
戦前に説かれた和泉－鬼高－真間－国分の基本系列に加えて、矢倉台、松岸、落合の各型式が挿入せられた。しかし乍ら松岸には聊か問題があり、その後傍系的なものと考えるに至つたので和泉－矢倉台－鬼高－落合－国分が南関東の編年として最も妥当である。（同 p1注１）

として、松岸式については南関東の編年としては傍系的なものであるとして撤回している。

同1958年12月には、「東京都杉並区向井町遺跡調査概報」が発表された。この中では向井町遺跡出土の住居址一括資料（第31図）について、

出土土器は、その器形からみて、さきに筆者らによつて発掘された杉並区成宗矢倉台遺跡の出土土器を典型とする矢倉台式土器に相当するのであるが、標識としての矢倉台遺跡には見出し得なかつた高坏形土器を、始めて明確に把握し得たことに意義を有するのである。（萩原1958,12 p26c3ℓ6～12）

として、矢倉台式の組成を一層明らかにして行く努力をしている。



第31図　向井町出土の土器

この様に、萩原氏の立論とそれに対する中山氏の反論、更に萩原氏の再論と言った過程の中で土師器の編年が更に詳細に検討されたが、この時期には両者の立場の違いについて具体的な決着はつかなかった。

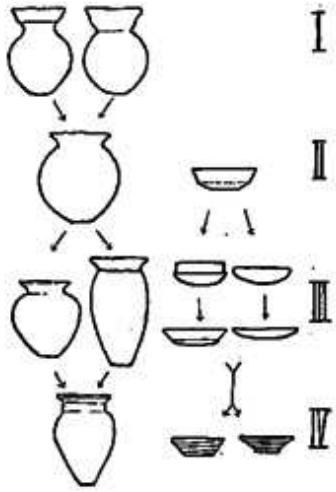
4節　土師器の編年案と中山氏の反論

小出義治氏や玉口時雄氏等によって土師器の細分や型式名の提唱が、旧版『考古学講座』と同じ頃提示されており、これらに対して、杉原氏設定土師器四型式の立場に立った反論も中山氏によって為された。

1955年２月には小出義治氏等によって平出の報文が発表され、同年３月には玉口時雄氏等によって東京都落合遺跡の報文が公表された。前者の中では平出出土の土師器等が五細分され、後者の中では真間式に換わるものとしての落合式の提唱が為されている。この様に各地域で土師器細分が行われ、その細分に名称が付される事によって杉原氏提唱の土師器四型式が内容の不明瞭さと相俟って次第に問題とされて来る様になった。それ故に、この時期に中山氏によって改めて土師器四型式の概念的な内容、或いは土師器の型式の意味が再確認される事となる。この時に重要な事は、中山氏による真間式の位置付けの変化である。

1958年10月に中山淳子氏は、『考古学手帖』誌上に、「土師器小考」を発表している。この中では、「土師器の細別についての研究が進み、最近傾聴すべき意見が出ています。弥生式土器の終末と土師器の起源に関する問題、真間式土器への疑問、鬼高式土器及び国分式土器の二分などがこれです。」（中山1958,10 p2ℓ10～13）とした上で、

> 土師器も７つ以上に分けられると思います。しかし、その目盛りは順序を示すだけであって、「型式」として認定し時代の変化を見極めて行くことにどれだけ意味があるか、古墳時代という進んだ時代であればこそ、そこに問題があると思います。そこで細別とは、別に、土器の移り変わりの間に見られる決定的な質的な変化を見出さなければなりません。それはきっと時代の変化をあらわすものであろうと考えられるからです。この観点からすれば、土師器は４つ以上には分けられないのではないかと思います。
> （同 p2ℓ17～26）



第32図　中山氏の土師器四型式

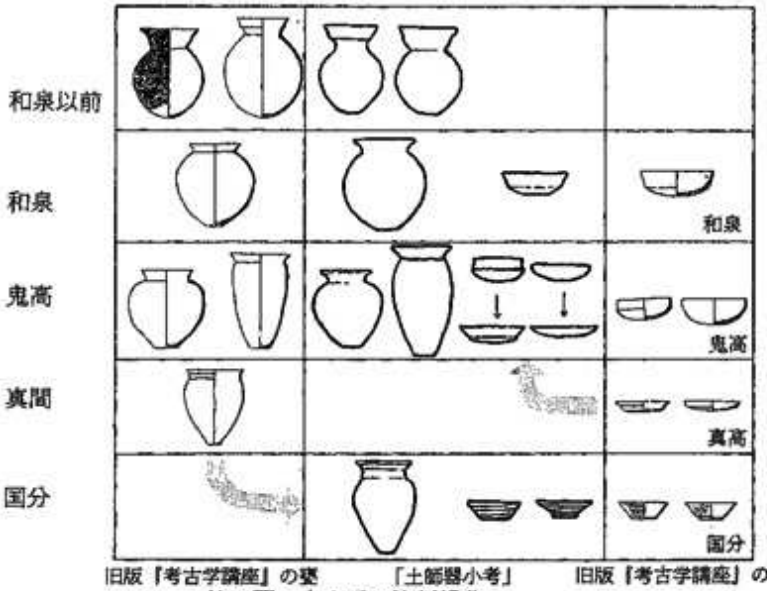
として、重ねて萩原氏の配列には同意しつつも型式としての定立には反対している。

この時に中山氏が説明した土師器の四型式（第32図）は、

Ⅰ期……和泉式以前
Ⅱ期……和泉式
Ⅲ期……鬼高式・矢倉台式・落合式・真間式
Ⅳ期……国分式

である。1955年の旧版『考古学講座』との大きな違いは、真間式の位置付けにある。即ち従来の真間式について、変遷の段階としてはⅢ期の終末形態として位置付けられるが、型式としての認定は出来ないと言う考えが表明された。ここで中山氏によって真間式の型式としての存立が否定された原因について考えてみよう。この見解が述べられた理由については、「土師器小考」で行われた図版の操作が手懸りとなる。「土師器小考」に掲載された変遷の概念図は、基本的に旧版『考古学講座』に標識として提示された実測図を再トレースしたものである。この両者を比べると旧版『考古学講座』で真間式とされた甕と坏が、「土師器小考」の中では坏はⅢ期に甕はⅣ期に分割移動されている。つまり、旧版『考古学講座』の中で真間式の標識として提示した土器群の坏と甕に年代差

があり、この年代差を解消する方便として、真間式として提示した土器群を解体し、相対的に古い様相を示す坏を第Ⅲ期に編入し、新しい様相を示す甕を第Ⅳ期に編入したものである（第33図）。つまり、中山氏等が旧版『考古学講座』の中で真間式として提示した土器群の共伴関係の齟齬を、真間式の存立を否定する事によって解消しているに過ぎないのである。



旧版『考古学講座』の甕　「土師器小考」　旧版『考古学講座』の坏

第33図　中山氏の資料操作

この論を契機として、中山氏の学問的な立場に微妙な変化がみられる。即ち、それ以前は杉原氏の提唱した土師器四型式の立場から萩原氏に対して反論を行っていたが、これ以降、杉原氏が戦間期に提唱した土師器四型式と戦後中山氏も加わって提唱した土師器五型式について、型式名の存続への腐心から様々な側面で矛盾が生じて来る事となる。この様な矛盾の多くは、型式の設定が先行し対象に対して適切な操作を行う事や、或いは型式内容が明瞭に提示される事がなかった戦間期の土師器四型式の提唱に起因すると考えられる。

尚、旧版『考古学講座』で文中のみで説明されていた具体的な変遷観について、この「土師器小考」では概念図を提示して甕と坏の変遷傾向を示している。

表14　「土師器小考」での分期と帰属形態

	模倣坏	半球状の坏	甕
和泉式	口辺部が長い		球胴
鬼高式の古い部分	口辺部が短い	口径小さくやや深い	球胴をやや引き延ばしたようなものと長胴の2者
鬼高式の新しい部分	口辺部が開く	口径が大きくなり浅くなる	

新たに鬼高期の新しい部分として、先の旧版『考古学講座』の時に文章だけで述べた、口辺部が開く傾向に準拠する坏も提示されている。又、鬼高式内部の新旧関係に相当する半球状の坏の形態変化も図示されている。

5節　小結

萩原氏によって再生された器形の連続的変遷と言った視点を取り込んで行く中から、戦間期に杉原氏によって提唱された土師器四型式は中山氏によって蘇生された。

一定地域での具体的な多くの発掘資料に対して萩原弘道氏が採用した器形毎の変遷を捉えて編年

を行うと言う手法は、逆に器形毎の変遷から編年を説明すると言う転倒した形で杉原荘介氏や中山淳子氏によって採用されて行った。従って、萩原氏の場合に方法的な前提となっていた一括と言う概念が杉原氏や中山氏の研究では十分に用いられる事なく、型式内容としては幾らかの齟齬を来たしていた。しかし、この様な変遷の概念化と編年の手法と言った点については、中山氏が積極的に取り込んで行く中から杉原氏の四型式を蘇生させた。中山氏もこの萩原氏との論争を通じて、自己の論理的な立場が一層先鋭化する事となって行った。しかし、適切な視点は獲得したものの正規の方法を必ずしも採用する事がなかったので、この時点での中山氏の主張は必ずしも肯首し得ないものである。

研究史全般の中で見てみると、この論争を通じて器形の概念化、そしてこれを基にした型式内容の概念化が図られたのであって、その方法の起源は山内氏、或いは奥田氏の研究に求められ、戦間期の杉原氏の研究に比した時、この1950年代の研究史的な意味は大きいと言えよう。しかし、これ以降萩原氏が土師器研究について何故か沈黙をして行く事となり、この沈黙と共に萩原氏の研究史上の役割も忘れ去られつつある。萩原氏の沈黙は、土師器編年研究を正規な方向に進めて行く上で非常に惜しまれる事である。

又、このような錯綜した研究史に対して、早くも1950年代の後半にはこれを整理して認識しようとする幾つかの論考が見受けられるのである。

注釈

(注1)　この中では萩原氏の矢倉台式の提唱については直接的には一言も触れられていない。

(注2)　更に型式論の展開の中で、様式論的な実体的な解釈さえも行っている。

(注3)　坏の系譜を古い時期からのものとし、鬼高式に至って初めて須恵器の影響で模倣坏が成立したと言う見解であろうか。

(注4)　ここで初めて間型式的連続性と差異化が具体的に行われ、これによってこれ等の器物に付される名称が整理された。

(注5)　杉原氏はかつて1935年の「上総宮ノ台遺跡調査概報」の中で古墳時代の土師器について轆轤使用の痕跡を認めていた。又、1938年の「下総鬼高遺跡調査概報」の中では、奈良時代以降の土師器について轆轤を使用しており糸切りが認められるとして一括して取り扱っていた。前者については、1954年の岡田氏による「中野区富士見台遺跡の小さな結果」の中に「謂ゆるロクロの使用は未だ行われて居らず布を滑べらせたあとだと杉原先生が云つて居られる細い平行線が口縁に認められる」（岡田1954,12 p27c1ℓ20～24）と言う記述があり、鬼高式の調整痕についてはこの時点では気付いていた様である。後者については、この時点で初めてこの見解が正式に撤回され轆轤の使用のものが国分式に限定されたと考えられる。この点については、1935年に同時に発表された杉原氏の「上総宮ノ台遺跡調査概報」と奥田氏の「中野区川鳴発見の原史時代竪穴」に対象的な見解が見られ、結果的に杉原氏は自説を撤回し、奥田氏の説に従ったと考えられよう。

第6章　岩崎卓也氏による研究史：1960年前半

1節　研究史と概念規定論の成立の意味

1950年代の研究を踏まえて、研究を精緻化させる機運が高まって来る。この様な傾向は二つの方向として現れてきた。この様な中に、岩崎氏の研究を位置付ける事が出来る。

1950年代の後半から60年代の前半にかけては、これまでの研究を踏まえてより一層研究の精緻化を図ろうとする傾向が高まって来る。そしてこの様な傾向は具体的に二つの方向として現れてきた。

一方は1950年代の論争を通じて論点となった見解に基づく研究をより一層先鋭化させて行き、様々な概念規定を明瞭にして行こうとするものである。

もう一方は、混乱している研究史全体を鳥瞰し整理する事によって問題の所在を明確化し、この中から進むべき方向を明らかにして行こうとするものである。

前者の立場は50年代の論争の当事者であった中山淳子氏の研究によって代表され、後者の立場はこの時期から新たに土師器研究に参入した岩崎卓也氏によって代表される。山内氏、奥田氏、そして萩原氏の視点や成果の一部を包摂した土師器の編年体系が作られ、今日では常識化している、杉原氏の業績を主体とし山内氏や奥田氏の研究、或いは戦後の萩原氏の研究を閑却する事によって成立した土師器研究史が記述されるのもこの時期の研究の中からである。

本章では、この時期に記述された研究史について考えてみよう。1950年代の終わりから60年代の前半にかけては、研究史の記述が集中して為されており、少なくともその事は、1950年代までの研究が振り返って理解されるべき一定の形態を整えた事や、或いは整理しなければならないほど混乱した形成過程を辿って来た事を意味している。ここでは、この様な動きについて岩崎氏の諸論考を代表として取り上げ検討して見よう。

2節　「土師器研究上の諸問題」について

岩崎氏の記述した研究史からは、山内氏や奥田氏の研究が欠落している。岩崎氏の論理は山内氏に代表される先史考古学的な方法とは全く異なったものであり、考古学的な手法による個々の分析に先立ち、資料に対する歴史性の付与が絶えず念頭に置かれている。

1961年3月から64年9月にかけて、岩崎卓也氏によって『大塚考古』3号～5号の誌上に「土師器研究上の諸問題」と題する研究史が掲載された。

（I）の中では昭和初期までの研究史について触れられており、（II）の中では昭和10年以降の研究について述べられている。

この中で岩崎氏は、

東京考古学会の研究者は、結果的には土師器、研究の進展に大いに貢献したが、少なくともそ

の初期においては、弥生式土器をより深く究明するために、土師器を分離せねばならず、そこにその方法の発見、何をもって土師器（当時は逆で、何を以て弥生式土器）とするかというような問題の究明に力が払われたのであったと思う。（岩崎1963,4 p6c1ℓ4～9）

と述べている。岩崎氏の言う東京考古学会の研究者の中に山内氏が入っているのかどうかが問題となるところであるが、岩崎氏によって展開される研究史の中では、管見に触れる限りでは積極的な意味で山内氏の名前をあげてその業績を論じられた事が無いと思われるので、ここで岩崎氏が言うところの東京考古学会の研究者には山内氏が入っていないと考えられる。その様な前提に立つならば、少なくとも東京考古学会の人々の研究がこの様な位相に位置付けられるものかどうかは大きな疑問であると言えよう。当時の学史的に形成された来たものであるところの認識の範囲と、東京考古学会の研究姿勢の位置付けについては再考を要すると言えよう。小林氏等の研究を始めとして、少なくとも山内氏の指摘するように、

尚杉原荘介氏は独自の研究により三つの区分（前野町式・鬼高式・須和田式：大屋注）を試みて居るが（人類学雑誌53巻、昭13年）、追加改編を要すると思って居る。一方森本六爾、小林行雄氏等東京考古学会側では古墳時代前半の土器を弥生式に編入して居ったのであり、これは同会が古墳時代を祝部時代と称して居る事と甚だ調和して居ったのであるが、最近に於いては暗黙のうちに古き土師器を弥生式から離さうとする傾向が見られるのである。これは大変結構なことである。（同会発行弥生式土器集成図録昭13その他）。（山内1939,12 p46ℓ4～10）

と言うところが実際であったと思われる。

1930年代初頭の山内清男氏が土師器の編年研究について言及した当時に学史的に形成されていた認識は、縄文土器に対して異質の弥生式土器があり、この弥生式土器の範疇に入るものが幾らか発見され、更に両者とは別の脈絡で古墳ものとして土師部、祝部があったのである。そしてこれらのものは単純に年代順に変遷して行くのではなく、先験的伝播論のもとで幾らか共存すると考えられていた。この様な背景の基に、弥生式と土師器の境界の問題としての土師器編年研究の第一の問題があるのである。従って山内氏による研究の冒頭では、弥生式土器文化と古墳時代文化の非共時性を明瞭にする為に、先ず弥生式土器と土師器の異質性を明らかにし、大きな境界を設定しなければならなかったのである。この様な、研究の背景に流れる学史的な位置付けを欠いたかたちで土師器研究史を記述する事は出来ないと言えよう。少なくとも山内氏や奥田氏によって為された研究に触れる事なく、この時代の土師器研究を総括する事は問題であろう。

続く杉原氏の設定に係る諸型式についての言及では、鬼高式、須和田式、和泉式の、提唱に関する手続きが含む問題について言及が十分に為されていない。更に岩崎氏は、小林氏の「大和に於ける土師器住居址の新例」と杉原氏の「下総鬼高遺跡調査概報」の二論考を指して、「とにかく、昭和十三年という年は関東と関西で偶然にも土師器そのものの様式論的研究が始まった記念すべき年であった。」（同 p8c2ℓ3～4）としている。しかしながら既に指摘して来た様に、それ以前から山内氏や奥田氏によって土師器の型式論的研究がなされ、適切な方法が指し示されているのである。

杉原氏によって鬼高式が設定された以降の研究についても、「とくに、杉原氏の鬼高遺跡の調査報告は多くの研究者に注目され、これに刺激されたいくつかの研究報告が公表された。」（同 p8c2

ℓ4～6）として、註の中で寺内武夫氏他の「下野中原遺跡調査概報－第２回－」や、藤森栄一氏の「信濃下蟹河原に於ける土師器の一様式」を例にあげている。確かにこの二つの論考は、杉原氏の鬼高遺跡の概報に刺激されて提出されたものである。しかし、岩崎氏の取り扱い方とは別の様相を認める事が出来る。つまりこの二つの論考は、杉原氏が漠然と古墳時代に位置する土器としてやや演繹的に鬼高式を設定し、これに祝部第一式が共伴するとした事に対して、あくまでも考古学的な資料操作に基づいて祝部式出現以前の土師器を提出すると共に、逆に杉原氏が鬼高式として提示していた標識資料の内容を再検討したものであった。

藤森氏は、杉原氏によって為された分布論的同一性の契機が必ずしも十分ではない型式論的分類に対して、

> 末永・小林・中村の三氏の大和布留の土師器は我が国土師器研究の将に画期的な論考として記念されるべきであるが、その土器の形式的分類を敢てしなかつた点は惜みて剩りある。この点、杉原・佐藤両氏の下総鬼高に於ては土師器及び祝部土器の最も特徴の現はれ易い坏類をとらへて、各々の特有の癖から第一類・第二類・第三類の類別をされたことは、結局先史土器の類別方法の延長であつて、当然とは謂へ賞賛に値する原史土器への態度であり、且つ該論文中に現はれた杉原氏の土師器及び祝部土器の想念は確かに関東原史土器編成への最大の示唆であつた。唯、両氏とも大型土器の壺・甕の分類に至つては甚だ曖昧であつたと云はねばならない。素よりそれは杉原氏の態度と云ふより、土器自体の形態的の不具に理由はあつた。恐らく氏は新なる資料に依り更に詳細なる鬼高期第一類・第二類・第三類の確立を試みられることであらう。（藤森1939,11 p561c2ℓ4～p562c1ℓ1）

として、一定の評価を行っている。この評価に対して岩崎氏は、

> 冷厳な自然科学的方法による土器の分類ということは、第一段階においては当然要請されるべきことであったろうが、先史時代とは別な範疇のものを取扱うのである限りは、いかなる点をもって古墳時代の土器とし、あるいは弥生式土器とするかという概念を、より歴史的な視角から規定することを必要とする筈なのだが、当時はまだ、その段階にまでは達していなかったことを知るのである。（岩崎1963,4 p8c2ℓ15～21）

としているのである。しかしながら、この藤森氏による鬼高遺跡概報への論評は、山内氏を強く意識して書かれている事を前提にする必要がある。山内氏の壺と甕を基軸とする土師器編年研究に対して杉原氏が行った坏類を中心とした分類を、最も特徴の現れ易いものを捉えての分類であるとして評価し、山内氏によって提示されていた壺・甕の変遷観に対して杉原氏が言及しなかった事について、土器自体の形態の不具に起因するものとしているのである。そして、山内氏等によって既に壺・甕の変遷傾向が明らかにされている事から、杉原氏を初めとする東京考古学会の研究者は土師器の編年研究を行う際に、壺・甕の変遷については安易に言及する事が出来なかったのであると考えられる。この様な点の理解を抜きにして、当時の研究動向を評価する事は出来ないであろう。

又、岩崎氏は「自然科学的方法による土器の分類ということは、第一段階においては当然要請されるべきことであった」として、杉原氏の鬼高式の分類について、自然科学的方法と規定した上で、この方法が適用される事の問題を指摘している訳であるが、しかし杉原氏の研究については考古学

の二大方法論である分布論と型式論について、その型式論のみを取り上げた結果がこの様な評価につながっているのであって、鬼高式提唱時の分布論的な契機の欠落についても十分に認識されなければならない。そして、この様な考古学的な方法論に基づく分析が何にもまして先決であって、この分析を欠いた「より歴史的な視角から規定」が分析に先行して意味を持つ事はないのである。杉原氏の土師器の取り扱いについて最も必要な事は、岩崎氏の指摘する概念的な把握の方向に向かうより歴史的な視角からの規定ではなく、逆に考古学的な方法による分布論的な同一性の検討なのである。

和泉式の設定に対して、岩崎氏は、

> 土師器の編年操作は、このように弥生式土器との分離に関する理論的根拠が固まらない中で始められていった。しかし、東京都和泉遺跡の調査は、この傾向を大きく修正した点で意義があったように思う。（同 p8c2ℓ23～p9c1ℓ3）

として、和泉遺跡の概報で「播布性」の概念が用いられた事により、弥生式土器と土師器の分離に関する理論的な根拠が明確になって来た事を評価している。

ちなみに、弥生式土器について経時的な傾向として斉一性が高まって来る事は、既に小林氏の指摘したところである（小林1935,1）。又、祝部を伴わない段階の土師器が存在する事も古く山内氏が指摘したところである（山内1932,12）。そしてその段階のものを型式として設定し、全国的に類似の器形がある事を指摘したのは、和泉遺跡の概報が発表される前年の藤森氏であった（藤森1939,11）。一方の杉原氏は、和泉遺跡を報告する4カ月前の前野町遺跡の概報の中で、播布性の問題について触れている。この中では弥生式土器と土師器との境界は、土師器の側からではなく弥生式土器の側から設定されており、

> それで弥生式文化及びその系統の文化のよい重要なる契機は弥生式文化と古墳時代文化である。これを今南関東に適用するならば古墳時代即ち鬼高期である。鬼高期文化の開始直前にその階程がなければならない。即ち前野町期と鬼高期の間にそれがなされねばならない。まこと、この問題を土器論に於て考へるなら、前野町式土器に萌芽せる前節に於て述べた如き文化の変化は、鬼高式土器となつて全く様相を一変してしまふ新日本の姿がある。前章に既述の如く前野町式土器は未だ先行する久ヶ原式土器或は弥生町式土器との関係に於て語られる多くのものがある様に、弥生式土器とされるにふさはしい。（杉原1940,1 p20ℓ4～9）

としている様に、一定の斉一性を持ちながらも先行する型式からの系統がたぶんに認められるという理由で、杉原氏は前野町式を弥生式土器としているのである。

「「和泉式土器は日本内地の殆んどに分布しているようで」ある点が前野町式土器と異なる」（岩崎1963,4 p9c1ℓ8～9）のではなく、「前野町式土器の型式に於ける系統や分布は日本各地にあることゝして、その系統や、分布は何の意味も有さず、従つて前野町式土器は型式として存在せぬことゝなる。」（杉原1940,1 p18ℓ5～7）としながらも、前野町式土器は「未だ先行する久ヶ原式土器或は弥生町式土器との関係に於て語られる多くのものがある様に、弥生式土器とされるにふさはしい。」（同 p20ℓ8～9）として、既に弥生式として認められている型式との連続性のもとに前野町式が弥生式に編入されているのである。

杉原氏による弥生式と土師器の境界設定に於ける播布性の問題について、最も問題なのは播布性が選択と一致する事を以て弥生式と土師器の境界を設定するという前提の基に、土器に現れた前代の土器との系統関係から弥生式の範囲を定めている事である。この様な方法を採用するのであれば、ことさら播布性と言った概念を持ち出すまでもなく、まさに先史考古学的な手法により型式を設定して行き、この型式相互の系統関係の検討によって十分に分類を為し得る事なのである。その様な問題に対して、播布性の概念の提出によって型式論的な検討とこれに基づく系統関係の究明を曖昧なままにした所に問題が所在すると考えられよう。和泉遺跡の概報を発表した時点での杉原氏の「播布性」の概念は、後年に展開される様に理論的な射程の中で未だ伝播論を捉えきれてはいなかった。

岩崎氏は、

> 昭和十年代は、土師器に対する本格的研究が開始された時期であったことは認められると思う。そうして、我々は土師器研究の方法として採択されたのが、縄文土器研究と全く同一な方法ー自然科学的な分類学　ーであったことを知る。この方法をとる限り、また、資料の絶対数が少ない限り、弥生式土器と土師器の分離はきわめて曖昧にならざるを得ない。（岩崎1963,4 p10 c2ℓ9～14）

と述べている。しかし既に見て来た様に杉原氏の採用した方法は、縄文土器研究と全く同一な方法（山内氏の先史考古学をその例に採るならば）では無かったのである。先史考古学が、絶えず分布論的同一性を基軸にして論を展開していた事に比べて、又、山内氏や奥田氏が同様な方法で土師器について検討をしていたにも関わらず、杉原氏はこの様な先史考古学で採用された研究法とは全く異なった方法をその土師器の研究で用いているのである。それは、分析対象に対する分布論的取り扱いの契機を欠いた型式論的取り扱いであって、しかもそこで行われた型式論的な操作は決して十分とは言えないものであった。逆に表現するならば、杉原氏が縄文土器研究に於いて獲得されたものとは異なった方法をとる限り、幾ら資料が増えたとしても弥生式土器と土師器の分離は極めて曖昧にならざるを得なかったのであり、先史考古学的な手法を採っていれば弥生式土器と土師器の境界についてより適切な認識に至る事が出来たのである。又、岩崎氏は、

> 弥生式時代をいかなる時代と認定し、古墳時代をどのように把握するかという基本的理念に立脚しての歴史的な分離法を考えるためには、資料が乏しいにもかかわらず、或る面で余りに自然科学的な形態論にとらわれすぎ、ある面で机上の操作にとらわれすぎるという、一見矛盾した二つの側面を捨てきれなかったのである。そうして、古墳時代の土器といいながらも古墳と土器の相互関係に対する見解すら不一致のままで研究がすすめられていたのである。（同 p10ℓ 14～22）

とも述べている。ここでは、杉原氏の方法は「余りに自然科学的な形態論にとらわれすぎ」、尚且つ「机上の操作にとらわれすぎる」事が「一見矛盾した二つの側面」であるとされている。しかしこれは一見矛盾した二つの側面ではなく、分布論的同一性の検討が不徹底な事に起因する曖昧な型式論と、これを補う机上の操作と言った一連の系統的な事象であると言う事が出来よう。

（III）の冒頭で岩崎氏は、

> 前号では主として東京考古学会の人びとによる昭和十年代の土師器研究動向について概観した

が、この分野の研究の基礎が固まったのは実に昭和十年代における東京考古学会同人の努力によるものであったことは容易に肯首できよう。（岩崎1964,9 p1c1ℓ9～12）

としている。先にも述べたように、山内氏の土師器研究をここで言うところの「東京考古学会同人の努力」の中に編入するか否かで文章の意味は大きく異なって来るが、岩崎氏が山内氏を東京考古学会同人と見做していないと言う前提に立って話を進めて行くならば、前掲の見解は問題があろう。1932年の「日本遠古之文化」以来の山内氏の主張と、同氏に師事した奥田氏の1936年に至るまでの一連の研究で土師器編年研究の具体的な方法が提示され、一定の見通しが立てられたのであるが、1935～43年にかけての杉原氏の独自の研究がこれにおき換わって行き、この中で一度獲得された方法が忘れ去られて行った、とする方が適切であろう。

ちなみに1943年段階での杉原氏設定の諸型式の内容を見てみよう。

①和泉式・・・

1940年に設定された唯一つのまともな型式内容を伴った型式であるが、他の型式との連続性或いは差異化が十分に為されている訳ではなく、和泉遺跡の住居址出土資料が提示されているに過ぎない。

②鬼高式・・・

1938年に設定され鬼高遺跡の出土資料が提示されているが、型式設定に関わる資料が古墳時代の土器＝鬼高式と言った設定であったため、後に設定された和泉式の内容をも含んでいると考えられ、少なくとも和泉式の提唱以来、鬼高式の指し示す範囲が具体的に明らかにされてはいない。

③真間式・・・

1935年の須和田遺跡第Ⅲ期に該当する時期が1940年に至って新旧に二分された内の前半部分で、当時須和田第一式と呼ばれ1942年に真間式と改称される。型式内容は全く明らかにされておらず、僅かに飛鳥時代より奈良時代前期に相当するとされているのみである。

④国分式・・・

1935年の須和田遺跡第Ⅲ期に該当する時期が1940年に至って新旧に二分された内の後半部分で、当時須和田第二式と呼ばれ1942年に国分式と改称される。型式内容は全く明らかにされておらず、僅かに、奈良時代後期より平安時代前期に相当するとされているのみである。

具体的な資料が明らかにされているのは和泉式のみであって、鬼高式の型式内容は既に和泉式の設定によって混乱しており、真間式、国分式に至ってはその型式の帰属する時代の範囲が決められているだけと言う、極めて変則的な型式設定である。

ちなみに山内氏は1935年には既に、

①古墳時代前半・・・・・壺、台付土器、祝部を伴わない

②古墳時代後半・・・・・細長い土器、祝部を伴う

と言った分類をしており、更に奥田氏も1936年には、

③奈良時代の土師器・・・ロクロ未使用

④広義の土師器・・・・・轆轤使用の糸じりのついた

の存在について書いているのである。

この様に見て行くと、岩崎氏の土師器研究史に関する「土師器研究上の諸問題」については、幾つかの必ずしも適切でない記述を認める事が出来る。

3節 「東日本における土師器の研究」について

「東日本における土師器の研究」の中での土師器の研究史の記述、特に鬼高式の研究史の取り扱いの中で幾つかの問題を指摘する事が出来る。

1964年には、『東日本における土師器の研究』が発表された。この中では各地の古墳時代後期土器が取り扱われており、その冒頭部分で土師器全般の研究史が若干と、鬼高式の研究史がかなり詳細に論じられている。以下ではこの研究史の部分について検討してみよう。

まず初めに、戦間期の杉原氏による土師器四型式の設定に対して、戦後の研究の本格的な出発によって多くの問題が指摘され始めたとしている。この中には、

> 第二には戦後の考古学研究の進展にともない全国的に斉一であるとされていた土師器にもローカル・カラーが多々あることも判明してきたことであろう。にもかかわらず、その方面はあまり問題にされず、むしろこれらをネグリジアブル・リミット内の差であると片付けて、共通点をのみ強調したり、あるいは相隔たる地域の土器群の間にみられる相違点もこれを時間差によるものとするむきも強いのである。（岩崎1964,3 p3ℓ6）

と言った記述が認められる。たしかに弥生式土器以降の地域性の消失傾向は、小林行雄氏によって早く（1935年）から指摘されていたのであるが、奥田氏による1936年の「古墳時代の聚落」の中では、既に壺と甕の形態変遷について言及した後、

> もし斯様な現象が正確なものであり、亦単に関東のみならず他の地方にも適用する事が出来るとすれば土師器のクロノロジーを設定する上に於いて壺と甕とが重要な役割を演ずる事になるかもしれない。但し此の場合注意せねばならぬのは比較的変化に乏しい土師器も相当な地方的の変異性を示して居る点である。（奥田1936,5 p32c1ℓ2～p32c1ℓ9）

と言った、広域編年に関する地域差を勘案した指摘が為されているのである。小林氏にあってはその土器の分析にあたって多分に、海を越えて「美し国々に尋ね着いた人々」と言った観念的世界が自己展開する倒錯の傾向が認められる。しかし奥田氏は分布論的な操作と型式論的な操作の中から、広域編年の手懸りと同時に地域差の問題を指摘しているのである。

鬼高式の研究史冒頭では、

> 鬼高式土器という型式の設定者は、もちろん杉原荘介氏である。氏によれば鬼高式土器は千葉県市川市鬼高遺跡出土品を標識とするもので、古墳時代の所産である。また、須恵器（当時

氏のいわれた祝部第一型式）を伴存するようになることも見逃しがたい特色であるとされた。さらに土器群の様相については、相当な複雑さを内包することを示され、例えば坏形土器にしても、（1）土器外表部に縁（稜）があるもの、（2）土器内部に縁を有するもの、（3）土器の内外面とも縁を有しないもの、などがあり、これらはそれぞれ個別の型式に細別しうるものか、同時に伴存したものかは必ずしも明確ではない、とされていた。（岩崎1964,3 P3ℓ7～11）

として、杉原氏の鬼高遺跡の報告を位置付けている。この杉原氏の型式設定の過程で見過ごしてはならないのは、資料操作の中から幾つかの属性を持った遺物群に対して鬼高式と言う型式名を冠し、その時期を大きく古墳時代とした事である。この操作の中では鬼高式の型式内容について、他の型式との差異化が十分に行われていなかったので型式内容が必ずしも鮮明ではなく、従って、鬼高式の規定は古墳時代の土器を鬼高式とすると言った、設定時とは論理的に逆方向に向かう型式内容に容易に転化し得るものであった。他の型式から明瞭に差異化されていない限り、一度設定された＜鬼高式→古墳時代の土器＞と言った図式は、容易に＜古墳時代の土器→鬼高式＞と言う図式に転化するものである。杉原氏による鬼高式の組成の説明では既に、

この鬼高式土器の中にも少くとも三つの類がある様である。然しそれ等の分類は型式なり、様式なり、また編年せられるものであるか否かは甚だ疑問である。この三類の持つ意味に就いて今後なほ研究を続けて行きたく思ふ。その製法に就いてなほ各々が各々の方法を一部分には行ふ場合が多いので、恐らくは三類とも同時期に存し得るものと解するを現在は妥当とする様であり、本遺跡の性質よりもそれを当を得た見方としたい。（杉原1938,11 P38ℓ1～6）

と言った様に、＜古墳時代の土器→鬼高式＞と言った転倒した図式の中から鬼高式が説明されており、その上で型式論的操作が分布論的操作に対して先行し重視され、その結果として鬼高式を構成する三つの類は同時存在するものであると結論されたのである。

つまり、鬼高式の各類の時間的関係については岩崎氏が言われるように「これらはそれぞれ個別の型式に細別しうるものか、同時に伴存したものかは必ずしも明確ではない、とされていた。」（岩崎1964,3 P3ℓ10～11）のではなく、その方法論上の問題から共時的なものとして捉えられていたのである。

続けて岩崎氏は

以上の内容でわかるように、当時知りえたものはまだ微々たるもので、必らずしも型式内容は明確とはいえなかった。そして、当時鬼高式土器が内包する三類型は、それぞれが個別の段階の時代的特性を有するものであると理解されていたようでもあった。（岩崎1964,3 P3ℓ12～13）

として、寺内氏等や藤森氏の論考をあげている。たしかに鬼高式自身について知りえた事はまだ微々たるものであったが、研究史の中では古墳時代の土器については少なくとも1935年には既に山内氏によって、古墳時代前半の＜祝部を伴わない、壺、台付土器＞と、古墳時代後半の＜祝部を伴う、細長い土器＞が指摘されており、翌1936年には奥田氏によって「言ひ換へれば後期の甕は同時期の壺と共に前期の壺を共同の母胎として生れて来た形であるとも考へられよう」（奥田1936,5 P31c3ℓ19～p32c1ℓ1）と言う事まで指摘されているのである。そしてこの様な研究史を背景にして藤森氏等が、杉原氏の一番目立ち安い問題点、即ち祝部出現以前と以降で古墳時代の土師器が二分されると

言う事を具体的な資料を提示して指摘したのである。従って、

やがて、昭和十五年には、これまた杉原氏によって、東京都和泉遺跡の調査がおこなわれ、その結果、あらたに鬼高式土器に先行する一型式＝和泉式土器＝が設定され、同氏によってこの和泉、鬼高二期が古墳時代に該当するということも表明された。こうして、鬼高期には古墳時代後半期という、より限定された年代が付与されたのである。（岩崎1964,3 P3ℓ14～16）

と言った様に、和泉式の設定は自立性が強いものではなく、少なくともその前年に祝部出現以前の土器として中原式や下蟹河原式が提唱されていたので、寺内氏や藤森氏の批判を受けて自己の編年体系内の補足として、これらに対抗して設定された傾向が強いものであると言えよう。又、岩崎氏が述べるように、鬼高期に対して古墳時代後半期と言った年代観が付与されたと考える事も可能であるが、そもそも鬼高式の型式内容が和泉式の設定によって和泉式との関連性に於いて限定性を欠く事となってしまったので、より限定された年代の意義もさほど大きなものであるとは必ずしも言う事が出来ない。

戦後の動向について、

太平洋戦争終了後まもなく、杉原氏によって土師器の年代観が公表された。ここでは、鬼高期に続くものとして真間期という土器型式による時代概念が提示せられ、これをもって七世紀の仏教文化の段階に対比された。こうして鬼高期はますます限定された時代性をもつにいたったのである。（同 P3ℓ17～19）

これについては、幾つかの事実誤認を含んでいる。岩崎氏はその多くの論考の中で『原史学序論』を引用する場合、戦後の1946年版（昭和21年）を用いているが、初版は戦間期の1943年（昭和18年）に既に出版されているのである。そしてそれらに載せられていた論考は、その発表の形態はともかくとして多くは既発表のものであった。

従って、ここで岩崎氏の指示した文献は1943年のものである。尚且つ、同様な型式名は既に1942年７月の「上総宮ノ台遺跡調査概報」の中に認める事が出来、土師器四型式の年代観という点についてであれば1940年７月の「武蔵弥生町出土の弥生式土器に就いて」で既に記載されているのである。現在筆者が把握している限りでは、杉原荘介氏の該期を取り扱った編年表は戦間期に４種類存在している。以下にこれを参考までに掲げておく（注１）。

更に岩崎氏は、

昭和二十四年から二十八年までおこなわれた長野県平出遺跡の調査では、多量の土師器が出土して注目を集めた。そうして、これが分類・整理を担当された若手の研究者の中から多くの土師器研究者が輩出する結果となった。この新しい動向によって、東日本各地の土師器遺跡がつぎつぎに調査されるようになると、在来の型式概念では理解しえない土器群も数多く発見され、型式の細分・新型式の提唱が相次いでおこなわれる趨勢となり、鬼高式土器もいつしか二つのサブ・タイプに細分されるようになった。

として、註で

このことは早くから想定されていたらしいが、比較的早く活字にされたのは、萩原弘道氏であろう。（萩原弘道「土師式文化前期に対する一考察」西郊文化８所収）（岩崎1964,3 p4ℓ2～5

表15　「南関東と中心とせる土師部祝部土器の諸問題」

（杉原1939.4）　掲載編年表を星野氏が編集

南関東に於ける土器を主体とせる文化編年（昭和十四年一月現在）	先史時代（化文式生弥）					原史時代（古墳時代）	歴史時代（奈良・平安時代）
	前期		後期				
	りあ器石的式標		しな器石的式標				
？	小田原期		久ケ原期		前野町期	鬼高期	須和田期
	前期	後期	前期	後期（弥生町期）			
未だ断片的資料に止まる	小田原第四類土器	小田原第十類土器	久ケ原遺跡出土土器	弥生町遺跡出土土器	前野町式土器	鬼高式土器（第一類—第三類）祝部第一式土器	須和田式土器 祝部第二式土器

表16　「武蔵弥生町出土の弥生式土器に就いて」

（杉原1940.7）　掲載編年表を星野氏が編集

南関東を中心とせる弥生式及びその系統の土器研究の図式（昭和十五年六月現在）				
時代	時期	土器型式（○印は未だ型式として仮設）		研究文献（数字は論文発表の順序）
平安時代初期 奈良時代後期	須和田期後期	土師器	○須和田第二式土器 ○祝部C式土器	
奈良時代前期 飛鳥時代	須和田期前期	土師器	○須和田第一式土器 ○祝部B式土器	
原史時代	鬼高期	土師器	鬼高式土器 ○祝部A式土器	3 下総・鬼高遺跡調査概報 人類学雑誌 53・11
原史時代	和泉期	土師器	和泉式土器	6 武蔵・和泉遺跡調査概報 考古学 11・5
先史時代	前野町期	弥生式土器	前野町式土器	4 武蔵・前野町遺跡調査概報 考古学 11・1
先史時代	弥生町期	弥生式土器	弥生町式土器	7 武蔵・弥生町出土の弥生式土器に就いて 考古学 11・7
先史時代	久ケ原期	弥生式土器	久ケ原式土器	5 武蔵・久ケ原出土の弥生式土器に就いて 考古学 11・3
先史時代	宮ノ台期	弥生式土器	○宮の台式土器（小田原期後期土器）	1 上総・宮ノ台遺跡調査概報 考古学 6・7 2 相模・小田原出土の弥生式土器に就いて 人類学雑誌 51・1,4
先史時代	小田原期	弥生式土器	○小田原期前期土器	2 相模・小田原出土の弥生式土器に就いて 人類学雑誌 51・1,4

表17　「上総宮ノ台遺跡調査概報」
（杉原1942,7）掲載編年表を星野氏が編集

南関東を中心とせる弥生式及びその系統の土器の研究（昭和17年5月20日現在）		
土器型式		研究論文
土師器	国分式土器	下総須和田遺蹟調査報告（未刊）
	真間式土器	下総須和田遺蹟調査報告（未刊）
	鬼高式土器	下総鬼高遺蹟調査概報（人類学雑誌53ノ11）
	和泉式土器	武蔵和泉遺蹟調査概報（考古学11ノ5）
弥生式土器	前野町式土器	武蔵前野町遺蹟調査概報（考古学11ノ1）
	弥生町式土器	武蔵弥生町出土の弥生式土器に就いて（考古学11ノ7）
	久ケ原式土器	武蔵久ケ原出土の弥生式土器に就いて（考古学11ノ3）
	宮ノ台式土器	上総宮ノ台遺蹟調査概報（考古学6ノ7，古代文化本号）
	須和田式土器	下総須和田遺蹟調査報告（未刊）

表18　『原史学序論』（初版）
（杉原1943,12）掲載編年表を星野氏が編集

	日本全土					
土師器時代	仏教文化	国分期				
		真間期				
	古墳文化	鬼高期				
		和泉期				
弥生式時代	西部日本		中部日本		東部日本	
	銅鉾銅剣文化	水巻町期	銅鐸文化	常門期	接触文化	前野町期
		伊佐座期		新沢期		弥生町期（久ケ原期ヲ含ム）
		須玖期		桑津期		宮ノ台期
		下伊田期		爪破期		須和田期
		立屋敷期		唐古期		

／p5c2注５〉

と述べ、鬼高式二分の契機をこの様に捉えている。

しかし、鬼高式の二分は「在来の型式概念では理解しえない土器群も数多く発見され」た事によって「型式の細分・新型式の提唱が相次いでおこなわれる趨勢となり」、その結果「いつしか二つのサブ・タイプに細分されるようになった。」と言う様なものではない。杉原氏が鬼高遺跡の鬼高式の土器に対して行った概念的把握は、それぞれの形態的特徴が、

・第一類は、口辺部外側に一種の縁を付す

・第二類は、口辺部内側に一種の縁を有す

・第三類は、口辺部無縁である

と言うものであり、これを型式概念とするならば、仮に第二類を和泉式の設定との兼ね合いで除外して考えるとしても、この様な型式概念でくくられる土器群に対して「在来の型式概念では理解しえない土器群も数多く発見され」た事はないのである。そもそも杉原氏による鬼高式の型式内容の把握は漠然としたものなので、型式としての鬼高式に細分が行われる前提としては、杉原氏による鬼高遺跡の概報での型式設定とは異なった視座で問題が捉えられる必要があるのである。既に指摘した様に杉原氏による鬼高式の設定では、分布論的操作と型式論的操作の相互による分析の契機が必ずしも十分に認められる訳ではなく、従ってその意味に於いて杉原氏の編年体系内部には細別の契機は存在しない。これに対して萩原氏が現実に多くの発掘を通じて自身の眼前に現れた遺物を取りあえず鬼高式として認識し、一括を単位としてこれらの相互比較を行い、各単位の連続性と差異性を検討した時に初めて鬼高式の細分の契機が生じたのである。鬼高式の型式設定者としての杉原氏と、鬼高式の細別者としての萩原氏とでは、その分析に関わる方法が全く異なっている点を見過ごしてはならない。この方法の差異性を等閑に付した上で「在来の型式概念では理解しえない土器群も数多く発見され」た事を第一に取り上げて「型式の細分・新型式の提唱が相次いでおこなわれる趨勢」と考える事は誤りであって、その結果「いつしか二つのサブ・タイプに細分されるようになった。」のではないのであり、杉原氏とは異なった萩原氏の方法の中に細別の契機が含まれ、形態の連続的変遷とこの中でのある時期に特徴的に出現する遺物と言った点に注目する事により、初めて細分が行われたのである。

学史或いは研究史の検討にあたって、学問的な認識の進展について必ずしも資料の側の変化にその原因を求めるべきではなく、資料と分析者との関係の変化に於いてそれを捉えるべきであろう。

岩崎氏は、又、

> こうした中で、杉原氏および氏に師事されていた中山淳子氏らは、鬼高式土器に関して、その形態上の特色は、（１）あらたに長胴の甕が出現すること、（２）大型甑が出現すること、（３）須恵器の器制を模し口縁部が立ちあがり、口縁部と底部との境に段のある坏形土器が出現する、などの諸点であるとし、生活史上の変化としては、この時期に住居址には竈が採用されるにいたったことを強調された。つぎに、その分布は東北地方から南九州に至る日本全国であるが、須恵器が多用された機内を中心とする地方からは発見例がないとし、鬼高式土器が使用された年代を六世紀代とするという見解をも確認された。また長期にわたって使用されたこ

の型式の土器は、さらに二つ以上に分類することも可能であるとのべられた。これによって鬼高式という型式内容はかなり明瞭となってきたのである。（岩崎1964,3 p4ℓ6～11）

としている。この旧版『考古学講座』に於ける杉原氏及び中山氏の見解については、それ以前の研究の流れの中に正しく位置付ける必要がある。特に1953年4月の萩原氏の松ノ木遺跡の報告に始まり翌1954年7月の矢倉台式の提唱に至る萩原弘道氏の一連の研究の過程と、この矢倉台の提唱に対する同年12月の富士見台の土器を例にとった中山淳子氏の反論については、旧版『考古学講座』に於ける中山氏等の記述の前提として見ておかなければならないものである。これらの論争の延長線上に、1955年7月刊行の旧版『考古学講座』の記述が位置付けられよう。

甕については、奥田氏の見解は置くとしても既に萩原氏が矢倉台式の甕を編年上に位置付ける中で「更に和泉式の甕との相違は器体全体の巾に対する比高の高いことにあり、和泉式の甕が一般に円形をなすのに対し、矢倉台式の甕は中期の長手への中期的様相を提示している。」（萩原1954,7 p48c2ℓ19～22）として、時代が新しくなるにつれての長胴化の傾向を指摘しているのである。重要な事は、萩原氏が竈の出現を前期にさかのぼらせた事に対して、中山氏は長胴甕と竈の出現の契機について後者から前者を説明し竈の導入に伴う甕の形態分化の中で両者を関連づけて、共に後期のものとした事なのである。

甑について杉原氏と中山氏は、「甑形土器は、地域によってかなり変化のあるものが認められ、大きさに大小があることも注意される。」（杉原他1955,7 p210ℓ5）としているのであり、この見解は萩原氏の矢倉台式の甑の説明、

「こしき」は代表的な19、20をあげておいたがいづれも口縁外部に複合帯を附す、いわゆる複合縁である。而して、20においては複合縁の段状を磨消する手法が認められ、一見すると外面からは細い溝を附した如くなる。器形はこれも和泉式と中期の中間に位置するようである。即ち和泉式に於いては鉢状に口の開いた長手の器体である。これに対する矢倉例は、口縁部のあたりに和泉式要素を有し、器体そのものは（口縁部を除き）中期に近似する。即ちここでも、矢倉台式の甑は和泉式と中期の中間的様式をもつことになる。（萩原1954,7 p48c2ℓ23～p49c2ℓ14）

との関係で捉えるべきであろう。ここで問題なのは岩崎氏が指摘する様な大型甑の出現ではなく、むしろ矢倉台で捉えられていた傾向、即ち複合縁を持つものから甕に近い形へと言った変遷観に対し、中山氏等が地域差を指摘しているのであり、この萩原氏の見解を普遍的なものではなく一定地域での現象として相対化しようとしていた事なのである。

この時点での杉原氏や中山氏の本来的な指摘は、（3）に見られる「一つは口縁部が立ち、口縁部と底部との境に段のあるもので（第2図14）、これは須恵器の坏の形と類似している。」（杉原他1955,7 p210ℓ13～14）を組成として持つ事なのである。既に和泉式から鬼高式にかけての土師器については、主要な器形毎の連続的な形態変遷は萩原氏によって説明されており、図示もされているのである。そして連続的な変遷過程の和泉式と鬼高式の中間に、矢倉台式が設定されていたのである。この様な状況の中で杉原氏や中山氏にとっては、須恵器模倣坏の出現を以て鬼高式とすると言う定義が、萩原氏によって提唱された矢倉台の概念を相対化する為に最も大切な事だったのであ

る。そしてこの須恵器模倣坏の出現と竈の出現に関連付けられた長甕の出現と言った両者が、鬼高式のメルクマールとして萩原氏の矢倉台式との関係に於いて、該期の土器把握に対する杉原や中山氏の重要な論点となったのである。

以上の様に『東日本における土師器の研究』を見て行くと、研究に於ける資料と研究者との関わり合いについて、或いは体系相互の確執についての把握が必ずしも十分に行われていない事が理解される。

4節　小結

土師器研究に必要な事は、岩崎氏が述べている様な歴史的な視角の先行に伴う資料に対する歴史性の付与ではなく、山内氏が述べた様に、まず先史考古学同様な資料の分類を行う事である。

土師器研究史の代表的な著作である「土師器研究上の諸問題」や「東日本における土師器の研究」での研究史に対する岩崎氏の記述や把握には、幾つかの問題が認められた。

土師器研究史の記述を通して認められる該期の研究に於いての岩崎氏の論理は、山内氏に典型的に見られる様な先史考古学的方法とは全く異なったものである。それは岩崎氏自身も述べている様に、対象を歴史的な視角で捉えて行こうとするものであった。しかし対象が如何なるものであるとしても、考古学的な取り扱いを行う限りに於いては考古学的な手法によって資料の整備を先づ心がける事が重要であり、今日の土師器研究の現状は、まさにこの事を体現していると言っても過言ではない。

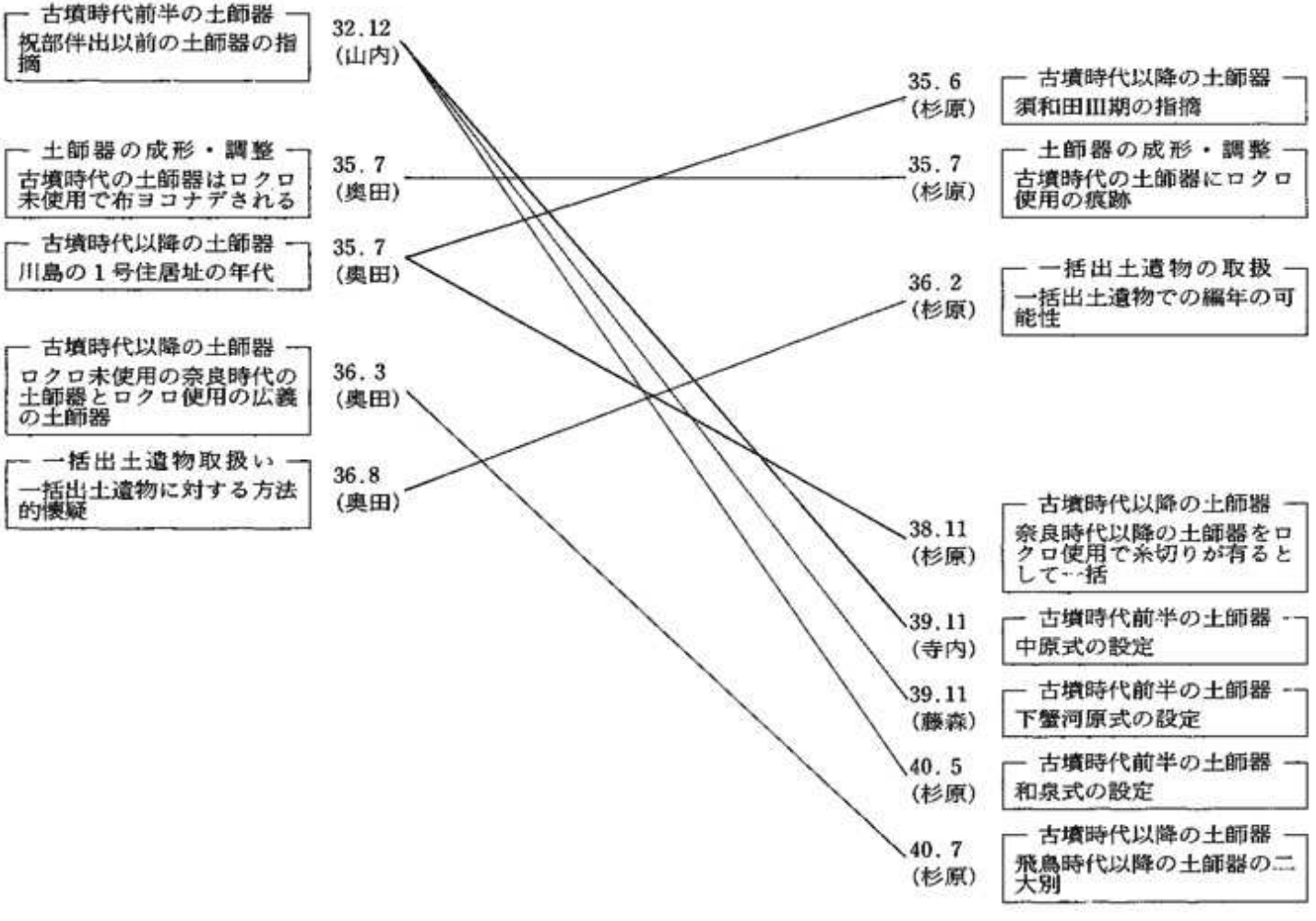
岩崎氏は歴史に対する指向性が強く、基礎的な考古学的操作を行った研究よりも、大胆な演繹的仮設を提示した論考に学史的な意味で重きをおいている様に思われる。しかしながら、考古学の上から歴史解明に望むためには、何よりも考古学的な手法を適切且つ十二分に用いなければならないのは当然であって、考古学においての歴史性は考古学的な対象に対しての対象相互の考古学的な概念によって表された関係性でしかなく、その把握の仕方が考古学である為には、対象に対する考古学的な手法による位置付けと、それら相互の関係性を明白にする事でしか為し得ないものなのである。

この様に見て来ると、今日一般的となっている研究史の起源とその形成過程、並びにその問題点を知る事が出来る。研究史の中で失ってしまった原点を見つけだす事も、今日の研究を正規なものとする為には必要である。

注釈

（注1）　但し以下に掲げた表は、杉原氏の該当文献から転載したものではなく、星野氏が編集して論考に掲載したもの（星野1981，3）を新たに表組みして転載したものである。

（補注）　尚、以下に戦間期の研究史に付いて、主要な事項の提唱を年代別に配置してみた。



第34図　土師器編年での主要論点の対比

第7章　近年発表された研究史の記述について

1節　岡田淳子氏による杉原氏土師器研究の評価

岡田氏が杉原氏の土師器研究に対して具体的な評価を行い、学史上の位置付けを行っている論考の中での問題点を検討してみよう。

岡田淳子氏は大塚初重編『考古学者・杉原荘介』の中で「杉原荘介の土師文化研究」を分担執筆し、杉原荘介氏の土師器の研究を研究史の中に位置付けている。ここでは、この岡田氏の記述の中から土師器研究史の問題を見て行こう。

岡田氏は、まず昭和10年（1935年）から数年間の土師器研究について、

> この頃発表された論文のなかには、小林行雄先生の「小型丸底土器小考」のように、土師器初頭の性格を明らかにしたものや、大場磐雄先生を中心とする祭祀遺跡の研究、藤森栄一・和島誠一・赤星直忠、奥田直栄等の諸先生による住居址遺跡発掘の研究報告があって、古墳以外からも古墳時代を考究する機運がみなぎっていた。これらの論文には、それぞれ興味ある資料や論考が展開されている。しかし、土師器自体の分析や編年については、積極的な見解が示されていたとは言い難い。（岡田1984,12 p66ℓ20～p67ℓ4）

としている。ここでは山内氏の研究には触れられておらず、奥田氏の名前はあげられてはいるものの、「土師器自体の分析や編年については、積極的な見解が示されていたとは言い難い。」としているのである。しかし既に見て来た様に、この1930年代に山内氏や奥田氏等によって土師器研究の原則や編年体系、問題点等が明らかにされているのであって、これ等については「興味ある資料や論考」として十把一絡げにされるべき性質のものではないと考えられる。

現在、土師器の研究史を主題的に取り扱った諸論文の中から、山内氏や奥田氏の名前を見出す事は非常に困難である。戦後に考古学を始め、杉原荘介氏の一連の研究を土師器研究の嚆矢として教わり、山内氏や奥田氏が土師器に関して言及していると言う事実を知らない世代が、土師器の研究史の第一頁を杉原氏の諸型式の設定に充てるのは不勉強であるとは言え、ある面では仕方がない事かも知れない。しかし岡田氏の様に奥田氏等の研究を知りながら、これに対して「土師器自体の分析や編年については、積極的な見解が示されていたとは言い難い。」と評価する事には問題があると言えよう。当時、杉原荘介氏の土師器研究が他の研究者のそれに比して先行していた点は、具体的な型式名を付した事と、それに伴い基準資料の図版を提示した事なのである。既に基礎的な方法や具体的な分類の視点は、山内氏や奥田氏によって提示されていたのである。その上で杉原氏は、これらの方法とは別に独自の方法で研究を行い、その結果様々な意味で問題を残し続けたのである。杉原氏の論考が発表された時点では既に山内氏等によって具体的な方法は示されており「土師器自体の分析や編年」はある程度進行していた事が明白である。続いて、

> さて、前記論文（「南関東を中心とせる土師部祝部土器の諸問題」の事：大屋注）のなかで杉原先生は上の表を示され、文化編年の体系を明らかにされた。ここでは、それまではっきりし

ていなかった前野町式土器の所属を、土師器から切り離して弥生式土器の終末期のものと規定され、鬼高期と須和田期の違いが単に土器型式の相違にとどまるだけではなく、社会体制の差を意味するであろうと推測されている。

さらに重要なことは、鬼高期だけが古墳時代に属する土師部土器の時代であり、鬼高期の土師部土器は三類に分類されることを、六行の文章にはっきりと示されたことであった。この三類は、やがて和泉式、鬼高式、真間式の名で世に知られることになる。（同 p67ℓ12～p68ℓ2）

と述べている。

岡田氏の「この三類は、やがて和泉式、鬼高式、真間式の名で世に知らることになる。」と言う記述については理解に苦しむところである。鬼高式の一類が模倣坏を特徴とし、今日まで模倣坏が鬼高式のメルクマールとされて来た事や、鬼高式の二類が和泉式の内容に近いものである事が言えるとするならば、岡田氏が言うところの真間式の名でやがて「世に知られることとなる」ものは、残された鬼高式の三類しかないが、どの様な根拠を持って鬼高式の三類が後に真間式の名で世に知られる事となるのか、具体的な典拠の明示が望まれるところである。少なくとも、

その間、鬼高式、前野町式、久ヶ原式、弥生町式等の諸土器型式の認定に些か研究の進歩を見て、後はこれ等諸型式を中心として前後に編年を予想される数型式の土器の研究を残すのみとなったのである。即ち、それ等より先に編年されるものとしては小田原期前期、後期の土器、後に編年されるものとしては須和田第一式、同第二式の土器を仮説的型式として既に報告しておいたのである。然し前記の確定したる土器型式を中心として、今度はこれ等の仮説の土器型式を検討すると、南関東に関する限り、小田原期前期の土器は須和田遺跡出土土器の中の或る一類の方を、又、小田原期後期の土器は宮ノ台遺跡出土の第一類、第二類中る一類の方を中心として考へてゆくことがより適当と思はれるようになり、私の研究に大いに役だつてくれた小田原出土の土器に就いては別に意義を求めたいと思ふのである。それで、勢ひ須和田第一式、第二式は名称を夫々真間式国分式と改称し、此処に須和田式・宮ノ台式・真間式・国分式の四つの仮説的型式を改めて発表しようと思ふ。その正式なる論考に関しては、須和田式・真間式・国分式の三型式土器を近く発表する予定の「下総須和田遺跡調査報告」に譲り、残る宮ノ台式土器に対する論考として述べたいと思ふのが本報告である。（杉原1942,7 p40ℓ13～p41ℓ5）

と言う杉原氏の記述を見る限り、真間式、国分式は、それぞれ須和田第一式と第二式なのである。つまり須和田遺跡III期の土器が当初は鬼高式と須和田式と呼ばれ、続いてこの須和田式が須和田第一式と第二式に分期され、その各々が真間式、国分式と改称されたのである。岡田氏が言う様な、鬼高式の第三類が後に真間式と呼ばれた事実はないと言えよう。

後年、杉原先生は私に語ってくださったことがあった。土師器の四時期区分は須和田遺跡を発掘調査した昭和七年（1932年：大屋注）に既に気付いていたことを。須和田遺跡は弥生式時代の遺跡であるが、奈良、平安時代の集落でもある。また古墳時代を通じて人びとが住み続けたもので、先生はこの遺跡で層位的に土師器の四型式を抽出されていた。しかし、単純遺跡の発見をまって再確認し、すべての研究者に容認される資料として発表することを期しておられたとのことであった。（岡田1984,12 p68ℓ3～7）

杉原荘介氏の処女論文は、大塚初重編『考古学者・杉原荘介』の「Ⅳ年譜・著作目録」によれば、1932年（昭和７年）の４月と６月に相次いで雑誌『武蔵野』に発表された「下総東葛飾郡国分村須和田弥生式遺跡研究摘要」（上）（下）であろう。同論考（下）の中で、杉原氏は須和田遺跡について、

次に本遺跡の下限に就いて、一通りの考察をして見たいと思ふ。

即ち私は、此処に貝塚上の古墳設置と云ふ、絶好なる資料を得て居るのであるが、此の貝塚が本遺跡構成の、どの時代の所産であるか解らないにしても、此の事実は、古墳建造時代と、該遺跡との関連を語るものである。（杉原1932,6 p22ℓ15～17）

としているのである。つまり1932年（昭和７年）６月の時点では杉原氏は須和田遺跡の内容について、その下限を古墳建造時代に置いていた事が明白であって、奈良、平安時代の集落と言う認識は全く認められないのである。須和田遺跡に対する奈良、平安時代に属する遺物の検出は、文献の上からでは1934年（昭和９年）10月に森本六爾氏によって『人類学雑誌』に発表された「下総須和田の土器について」が初出であり、この中で初めて「第３期は更に新しく、往々にして文字ある坏を伴ひ、或種の竪穴生活者に文字の及んだ時期のものである。」（森本1934,10 p40c2ℓ7～9）と記載されているのである。

そもそも鬼高式の設定は杉原氏の体系の中で必然的に行われた戦略的な研究であり、和泉式の設定は学界の状況をふまえての戦術的なそれである。そして須和田式の設定も鬼高式と同様であり、須和田式の二細分設定は和泉式と同様である。この様な認識を抜きにして、杉原氏の提唱になる土師器四型式の研究史的意味を理解する事は出来ないと考えられよう。少なくとも土師器の研究史を見る限り、杉原氏設定の四型式が「単純遺跡の発見をまって再確認し、すべての研究者に容認される資料として発表」されたとは言い難いものがある。岡田氏との共著に為る1955年刊行の旧版『考古学講座』に至っても、未だ型式内容に混乱が認められる事実はそれを端的に物語っている。

岡田氏は、「おそらく、当時、土師器についてこれだけの見解をもっておられたのは杉原先生お一人ではなかったかと思うのである。」（岡田1984,12 p68ℓ18～19）として、昭和十年代（1935～1944年）の杉原氏の土師器研究を締めくくっている。杉原氏の土師器研究と、これに先行する山内氏や奥田氏の土師器研究の質的な違い、或いはそれが発現するところのものである学説の差異と体系相互の関わり合いについて、研究史の中に正しく位置付ける必要があろう。

杉原氏の土師器研究についてその評価を展開された岡田淳子氏の一文は、土師器研究史理解に少なからぬ問題があり岡田氏の真意を理解しかねる内容となっている。

２節　勅使河原彰氏の土師器研究史への理解

近年発表された学史を主題として取り扱った勅使河原氏の論考中でも、土師器研究史の取り扱いが適切さを欠いている。更に学史的に位置付けるにあたって、1930年代の学界の動向の把握にも問題がある。

勅使河原彰氏は、1988年10月に『日本考古学史』を発表されている。本節ではこの中での土師器研究史の取り扱い方、及びこれの学史上での位置付け方について検討して見たい。

勅使河原氏による学史の理解によれば、1912年から1944年にかけての日本考古学は実証的研究の確立期であるとされている。そしてその具体的な展開は、1910年代に実証的研究が導入され、1910年代後半にようやく科学としての基礎が固まり、1020年代の後半に実証的な研究が進展し、1930年代の後半に編年研究が体系化され、この編年研究によって時代概念の確立が為されたとしながらも、1930年代後半以降の研究を実証主義への埋没として位置付けている。この様な認識のもと土師器研究についても、

> 一方、古墳時代では、研究が墳墓に片寄っていたこともあって、土器の研究は大幅に立ち後れていたが、それでも、杉原荘介は関東地方で土師器の型式設定と弥生土器との関係を論じ、畿内でも奈良県布留遺跡などが調査されて、弥生土器から土師器への転化に一つの見通しがたてられるようになった。（勅使河原1988,10 p11ℓ18～23）

として、杉原氏の「南関東を中心とせる土師部祝部土器の諸問題」や、小林氏の「大和に於ける土師器住居址の新例」を、実証主義的な土師器編年研究の端緒としてあげている。ここでも、杉原氏の研究に先行する山内氏や奥田氏の研究が無視され、土師器研究史が正しく捉えられていない。この様な具体的な事実認識の欠如に起因する誤った分析は、山内氏等の編年研究に対して、

> こうした論争をつうじて、実証的研究は日本考古学に確固たる基礎を築くことになるが、それは一方では、編年研究をはじめとして個別・形態研究が、あたかも考古学研究の目的であるかのような傾向を増長することになった。そうした実証主義、あるいは学問至上主義と呼ばれる研究が、従来までの素朴な認識の段階に留まっていた研究を克服して、日本考古学の発展に大きな役割をはたしたことは否定できない事実であるが、考古史料から歴史を叙述するという考古学研究の本来の目的を歪め、現実の社会とのかかわりから距離をおくという結果を生むことになった。（同 p13ℓ10～20）

とした、誤った評価を生み出しているのである。

今、戦間期の土師器研究史を振り返って見ると、遺物に対して正規な方法による分析に基礎をおく事のなかった研究が歩んだ道は明らかである。例えば、小林行雄氏の「小型丸底土器小考」で展開されていた先験的伝播論は、神武東征に容易につながるものであり、戦間期のイデオロギーを支える学問的な裏付けとさえなり得るものなのである。この様な研究と、考古学的に適切な手法を適用した山内氏等の研究の対称性を戦間期と言う背景の中で認識すべきであると共に、方法論確立期の学としての考古学の成立の中で位置付けを正しく理解すべきである。1930年代の研究動向は勅使河原氏が述べるような編年研究の進展を中心とする実証主義への埋没としてではなく、一方では正規の考古学的な操作を経る事なく、神話或いは常識と結び付けて提唱された歴史学的な”事実”が肇国の考古学として積極的に展開され、他方ではこれに対する実践的な反定立として考古学的な正規の操作を経た研究が方法論の確立と相俟って為されていたのである（注1）。土師器研究に於いても同様で、後者の代表として山内氏や奥田氏の研究があげられ、或いは杉原氏の播布性の概念の提出があげられるのである。

勅使河原氏が、斎藤忠氏による「一連の学史に関する労作」に対して批判的に述べた「その史料収集においては余人の追随を許さぬものがあるが、研究の事実を記述するだけで、その時代の動向との関係を分析することを避けたための不十分さがある」（同 はしがき iii ℓ23～26） という評価は、公正な態度で学史を一瞥したときに、直ちに勅使河原氏自身に向かってそのまま投げ返されるべき見解である。勅使河原氏は研究の事実を記載するにとどまらず、その時代の動向との関係をより正確に分析する必要があろう（注２）。学史の叙述で必要とされるのは、研究の事実と時代の動向との直接的結合に係る図式的解説ではなく、弁証法的な理解なのである（注３）。

3節　小結

土師器研究史を理解して行く上で必要な事は諸型式の提唱のされ方であり、資料に対する研究者の関わり合い方である。

研究史の記述の中での、資料と研究者との関わり合いは非常に重要である。同一の資料に対しても、その意味するところは研究者によってまちまちである。かつて山内清男氏がミネルヴァ論争の中で1936年に、

> 考古学の資料として我々は遺跡遺物を観察する。しかし総ての遺跡遺物又はその記録は万人一様に開放されては居ない。これらの遺跡遺物の研究に当つて色々な操作をするが、しかしその操作は人によつて違つて居る。そして結局資料から何を学び取るか、に至つては著しい個人差があると見なければならない。（山内1936,5 p1c1ℓ2～ℓ6）

と指摘した如くである。

土師器研究史は一面では、「人によつて違つて居る」ところのものである「資料から何を学び取るか」と言う事の歴史でもある。そしてこの中に我々が再認識して日常の分析の中で意識化する必要のある、方法の問題が提示されているのである。

戦間期に東京考古学会を中心として展開された、山内氏や奥田氏の土師器編年研究に対する黙殺は終戦と共に終わった訳ではない。戦後に於いては萩原氏によってその視点が再生され、中山氏等によって包摂され、そしてその様な経緯の中で方法は忘却され視点のみが一人歩きし、典拠は不明となって行ったのである。この様な中で研究史を学んで来た我々は、当時の文献を系統的に調べる事によってのみもう一つの研究史を知る事が出来る。土師器編年研究に於ける杉原氏の位置が定まってしまった現在に於いてさえ、事実認識に問題のある研究史が拡大再生産されているのである。この様な一連の出来事は、学問としての考古学にとって学史上まことに大きな問題であると同時に、この様な試みに関与した研究者の良識が問われる問題であると言えよう。その視点のみによってかろうじて成り立っている編年体系はまさに現在的な問題であろう。

注釈

（注１）　この様な視点は、柳沢清一氏や大塚達朗氏によって明瞭に提示されたものである。

柳沢清一氏：土曜考古学会1989年12月例会発表「『岩木山』編年の再検討～大曲Ⅰ遺跡とその周辺～」

大塚達朗氏：土曜考古学会1990年１月例会発表「ミネルヴァ論争と昭和18年」

この両氏の発表内容を本論考構成上の参考とした。

（注２）　このような学史に関する見解を、勅使河原氏が今後どの様に展開されるか興味深いものがある。多くの学部学生がこの勅使河原氏の『日本考古学史』から学史を学び、勅使河原氏の理解に沿って学史を認識して行くとすれば、まさにそれは学史上の問題であると言えよう。

（注３）　勅使河原氏は、この様な誤謬に満ちた図式的な発想を現在の考古学にも適用している。「第Ⅰ章日本考古学の歩み」の中の「第５節日本考古学の現状」では1962年以降をその分析の対象とし、戦後の研究成果の総括や埋蔵文化財の危機を指摘した後、

> こうした開発の大型・大量化による緊急行政調査の激増にともなって、考古史料の量的増加はとどまることを知らず、たしかに研究者が関心をもつ史料は増大したが、そのために日本考古学はますます研究が個別研究に沈潜化する傾向が強くなって、埋蔵文化財の危機とともに看過できない問題となってきている。（勅使河原1988,10 p22ℓ30～p23ℓ5）

として、個別研究への沈潜化を問題として指摘し、又、社会の現状を指摘した後、

> このような現実を直視せず、日本考古学があいも変わらず考古史料の個別・実証的研究に終始するかぎり、私たちは戦後の過ちを再び繰り返すことになる。（同 p24ℓ5～7）

として、

> 私たちは考古史料の個別・実証的研究から導かれた諸成果を総合的に考察することによって、科学的・体系的な原始・古代の歴史叙述を当面の急務としなければならないが、近代科学として発足してから、すでに１世紀以上の歴史をもつ日本考古学の研究成果を批判的に継承し、あるいは歴史叙述をめざすという目的意識をもった研究が、ようやく芽生えはじめてきていることも事実である。（同 p24ℓ15～23）

と総括している。

しかし考古学の現状を個別研究に沈潜化するものと見做すのは誤りであって、個別研究が明確に意識化された考古学的操作によって取り行われていない点に問題があるのである。現在の風潮は寧ろ個別研究に沈潜するのではなく、個別研究を蔑ろにしていきおい実態的な操作に走る傾向を有しているのである。従って、「個別・実証的研究に終始するかぎり、私たちは戦後の過ちを再び繰り返すことになる」のではなく、個別・実証的研究を適切な方法で行わず、正規な考古学的操作を経ないで提出された見解が学界に氾濫しているところに「戦後の過ちを再び繰り返すことになる」危険性がある事を、正しく認識する必要があろう。この点については自戒を込めて明記しておきたい。

結語

以上、土師器編年研究の研究史について、鬼高式を中心として1950年代までを目安に見て来た。この研究史を以下に要約して見よう。

土師器が他の土器から差異化されて認識された時点からを、土師器編年研究の研究史の対象とする事が出来る。しかしその当初に於いては有職故実的色彩が強く、或いは古器名の研究と言うべき形態のものであった。これはその当時行われていた古墳研究の中で、古墳や古墳出土遺物に対して分布や型式が論じられている事とは大きな違いである。

土師器研究に於いて考古学的な方法（分布論・型式論）を用いて本格的な研究が為され始めたのは1930年代以降の事である。1920年以前に於いても考古学的な方法を用いた土師器の研究が為されなかった訳ではないが、自覚的にこの様な方法で遺物の差異化が行われる事は希であったと言えよう。森本氏による比較的新しい時代の土師器甕に対する火葬骨壺と言った想定も当時としては卓越したものであったが、偶発性の見解である事にはかわりなく、遺物自体の差異化は行われておらず、原理的にそれ以上に編年研究を進展させる事は不可能であって、実際、編年研究の進展は認められなかった。但しこの時期には既に古墳研究の成果から古墳が築造された時代の分期として、＜祝部が伝わる以前／祝部が伝わった以降＞と言う区分が行われていた事も見逃し得ない事実である。

この様な状況の中で、1930年代には山内清男氏等によって本格的な土師器研究が開始される。山内氏の土師器研究では、学問としての考古学、対象としての遺物、或いは対象認識のための方法と言った研究過程の各点が自覚的に取り扱われ、その方法が絶えず意識化され検討されており、この意味に於いて山内氏等の土師器研究を科学的であると言う事が出来ると共に、それ以前の研究と一線を画する事が出来る。

山内氏の土師器研究の中では、1932年当時には祝部を伴わない前半部分と祝部を伴う後半部分と言った枠組みの中で土師器の編年が捉えられていたが、後の1935年には前者が壺、台付土器を組成として持ち、後者が細長い土器を組成として持つ事が明らかにされた。更に1939年には先の両者の中間に位置付けられる壺、台付土器を持ちながらも祝部を共伴する部分の存在が明らかにされ、結果として土師器五細分を行っていた。

この時の山内氏の操作は、土師器の特殊性を捉えた合理的なものであった点が特筆される。即ち土師器研究に於いては縄文土器の研究でその端緒として用いられた様な分布論的方法の特殊な形態としての層位的な取り扱いによって遺物の前後関係を決定する事が比較的困難であった。従って、この様な土師器の特殊性を把握した上で山内氏は須恵器の共伴関係から見た大別を先ず第一に行っている。又、山内氏の土師器の研究に於いては何れも分布論的方法が先行しており、型式論的方法が先行する事がなかった。これは分布論的方法が型式論的方法に比べて対象相互の相対的関係を捉え易いからに他ならないからであると考えられる。この様に山内氏の土師器研究は絶えず方法が吟味され、確実な成果が納められる様に配慮されていた。分類が依拠する前提を明瞭にしつつその状況の中で相対的に確実な方法が取られていたのである。

当時の考古学的方法の確立期と言った状況を考えて見る時、この様な山内氏の実践は卓越したも

のであった。他の研究者との大きな違いは、山内氏は対象と観察者とその間に位置付けられる方法との関係について明確な認識を持っていた事である。この様な中で山内氏は縄文時代の終末、弥生時代と古墳時代の関係、土師器の編年、考古学的な正規の資料操作等の各点について総合的な研究戦略の基に各分野に於ける発言をして行き、考古学の方法を確立する運動を展開して行ったのである。山内氏の土師器研究については、単独で取り出して後年の杉原氏の研究と比較するのではなく、この様な運動の中に位置付けて理解する事が必要であると言えよう。

当時山内氏に師事していた奥田氏も山内氏と同様な方法で土師器研究を進め、今日的な問題の幾つかを既に1930年代に提出しているのである。例えば同氏が方法上仮設した型式について、各々の型式が個別の竪穴から単独で出土する等と言った視点に基づき、型式論的な範疇に対して分布論的な相対化（検証）を行っている。又、具体的な遺物の観察に於いても、古墳時代末から奈良朝の土師器についてロクロ未使用のものであると規定し、更に新しいロクロ使用の土師器と明瞭に区別して認識している。壺から甕への形態変化についても既にこの時点で言及している。ちなみに杉原荘介氏や中山淳子氏等が同様な見解を提示するのは1955年の旧版『考古学講座』の中である。奥田氏は1930年代にはこの壺から甕への形態変遷を広域編年に使用できると言う可能性と、その際に注意すべき土師器の地方差についてさえ述べているのである。切り合い関係を持たない住居址に於いても、古い土師器を主体として出土する住居址には新しい土師器が混在せず、新しい土師器を主体として出土する住居址には古い土師器が若干混在すると言った点に着目し、型式論的方法の分布論的方法からの相対化を行っているのである。ミネルヴァ論争を背景とした当時の学界状況の中で当然ながら覆土内出土遺物を一括して取り扱う際の注意事項などについても述べており、又、集落内での同時存在の住居址を検出する難しさ、或いは居住期間に関わる見解等についても言及されている。この様な中で、川島A式、同B式、同C式等の型式が土師器研究史上で始めて用いられて（仮称）いる。同一型式の土師器を含む住居址が切り合っている事についても、分布論的検討から型式論的把握を相対化している。

現在の我々の遺物研究に関する認識の基礎的な部分の多くは、当時のミネルヴァ論争に代表される出来事の中から、山内氏等によって提唱され一般化して来たものである。山内氏等は「瞥見考古学」に陥る事もなく、又、安易な「早発性解釈」を行う事もなく、正規の方法を目的的に適応して土師器研究を行った最初の土師器研究者であったと言えよう。

1930年代の後半から杉原荘介氏が土師器の研究に参入した。この時に杉原氏は先行研究に触れる事がなかった。そして杉原氏の研究は多くの点で山内氏等のそれと異なっているものであった。

例えば杉原氏は方法に対して必ずしも自覚的ではなく、分布論的方法と型式論的方法の反復は十分には為されておらず、分布論的検討自体が不完全であり生半可な型式論的方法によって型式の提唱が為されていた。しかしながらこの様な中にあっても杉原氏は自己の研究の中で、次々に型式を設定して行き標準資料を提示して行ったので、結果的に杉原氏の編年案が一般化する事となり、同時に山内氏等によって提示されていた正規の方法や分類の視点が閑却されてしまった。杉原氏に取っては住居址の覆土に住居址と同時代の遺物が含まれる事は自明の前提であった。この様な事が奥田氏等の研究と大きく異なる点であって、戦間期に於ける杉原氏の土師器編年研究の限界でもあっ

た。この様な杉原氏の方法も研究の比較的初期の段階では一定の有効性を持つものであったが、研究の進展と共に分類の制約となって現れて来た。又、杉原氏の方法には分布論的同一性と型式論的同一性が混同される傾向が認められる。少なくとも、分布論的同一性で把握された一括資料を適切な方法の媒介なく型式論的同一性で把握する事は出来ない。杉原氏が自己の提唱した型式にさえ、長年に渡って齟齬を来たし続けている点はこの事に対して非常に象徴的である。

鬼高式は杉原氏設定の型式の最初のものであり、具体的な型式名を冠し資料を提示し、型式内容の一部を概念化したと言う三点を満たしている事に於いて土師器初の型式である。しかし杉原氏の提唱した型式は、考古学的な正規の遺物操作の中から概念化され設定された型式としては不十分なものであり、生の資料群に非常に近いものであった。この様な杉原氏による鬼高式の型式設定の中では、山内氏等とは異なり分布論的同一性が閑却され、型式論的同一性から分類が行われている。そしてそこで検討されている型式論的同一性に関しても、決して十分なものであったとは言えない。それ故に杉原氏の型式には細分の契機が含まれず閉塞的な傾向が認められ、全く新しい特徴を持った土器群から新たな型式を設定すると言った方向でしか、発達を為し得ないものであった。しかも設定型式に対して年代の言及が比較的無造作に行われており、この事によって考古学の手続き上では型式論的まとまりで取り扱うべき対象の土器群を、年代を冠してこの年代のまとまりで呼称すると言った転倒した取り扱いが為される背景が形作られてしまった。

確かにそこで用いられた年代決定法は興味あるものである。しかし、型式論的取り扱いと比した時に年代決定による把握には細別の契機が全く含まれないと言う難点を指摘する事が出来る。従って一度設定された鬼高式は古墳時代の土器と言ったニュアンスを持つ事となり、古墳時代前半に位置する祝部出現以前の土師器と言った認識が欠落してしまった。同様に古墳時代以降の土師器に対しても奈良・平安時代の土師器と言った考え方が先行し、糸切りを持たない前半部分と糸切りが出現する後半部分と言った把握が自立的には為されなかった。特に後者の問題は大きく、編年の標準資料が公表されなかった事と相俟って1950年代まで真間式と国分式の型式内容が混乱を来たし続けて来たのである。この様な中で藤森氏等によって杉原氏の編年の欠を補う型式が提唱された。しかしながらそこでも明確な方法が提示されている訳ではなく、又、そうである限りに於いて杉原氏の編年体系の部分的改変で事足りる事となり、杉原氏の編年体系以上に魅力的なものでは有り得なかった。この時期に提唱された諸型式は何れも型式としての概念化が不十分であった事をその特徴としている。

杉原氏は、1940年代に播布性の概念を提唱している。この播布性の概念がどこに起源を持ち、どの様な経緯で採用されたかは明確ではないが、少なくとも最初の用例では、弥生式土器と土師器を弁別するための概念として使用されている様である。即ち、1940年1月には前野町式と和泉式の境界についての演繹的な仮説としての用例が認められる。そしてここでは播布性の概念を使用する事によって、型式論的検討による弥生式土器と土師器との境界の問題の検討が回避されているのである。この播布性の概念が同年3月には伝播論に置き換わる仮説として位置付けられる事となった。森本氏を師としながらも小林氏の研究に対しては以前から批判的であった杉原氏の状況を考える時、又、当時の社会情勢を考える時、先験的伝播論に対して播布性の概念を提出した事には大きな意義

があると言えよう。杉原氏は播布性の概念の提出とこれの定式化によって、伝播論が持つところの欠陥である広域編年と系統性に関する不可知の問題を指摘している。この様な指摘は本質的には正しいものであるが、杉原氏が実際の遺物に対して行った型式論的研究には直接反映される事がなかった。

この様な中で1940年代の杉原氏を中心とする研究の中では、それ以前に山内氏や奥田氏によって行われていた研究が閑却されて行った。それは適切な視点の喪失と言った事のみならず、適切な方法の忘却でもあり、1930年代の山内氏等の請活動を通じてようやく定式化されつつあった考古学の組織が、少なくとも土師器研究の中では瓦解してしまった事を象徴する出来事であった。考古学に於ける様式概念の安易な使用は多くの場合、この様な正規な方法の忘却や分布論と型式論からなる分析手続きの省略と言った二側面と不可分の関係にあると言えよう。

戦後の1950年代には都内の開発の活性化に伴い、従来見る事の出来なかった土師器の住居址一括資料の報告が為され始める。そしてこの住居址一括資料の取り扱いを巡って、様々な方法が模索される事となった。萩原弘道氏は杉並での発掘調査の中から得られた資料を把握するにあたって、戦間期に奥田氏等によって提出された形態の連続的変遷を捉えると言った視点を再生させる事となった。この形態の連続的変遷を捉える事によって土師器の編年研究を進めて行くと言う視点は、山内氏や奥田氏の研究以来久しく忘れ去られていたものであるが、1950年代の萩原氏の研究によって再び採用される事となった。そしてこの視点の採用によって型式を越えた形態の連続性が捉えられる様になり、その結果特定の器形に付される名称も整備されて来る事となった。又、認識は概念的把握によってより一層先鋭化され、従って形態に付される名称の整備はより一層形態の概念的把握を進行させる事となった。この結果として具体的な資料群を提示してこれに代表させる従来の杉原氏の型式設定に代わって、器形の連続的変遷の特定段階に型式を対応させて概念化したレベルで取り扱いを行う方向に研究の位相が高まって来た。萩原氏はその研究の中で、

・一括出土資料を中心に考えて行く
・一括出土資料を同時期のものであると捉える
・器形の連続的変遷を捉える
・特定段階に出現する特徴的な遺物に着目する
・一括出土遺物に型式論的な多様性が認められる

と言った各点を明瞭に意識化していた。この中から萩原氏の一連の研究によって

・模倣坏の稜線の位置
・甕の長胴化
・特異な形態を持ち赤彩された坏

等が編年のメルクマールとされて来る事となった。この様な中から矢倉台式の提唱が為されるのである。矢倉台式の提唱には、二つの意味を認める事が出来る。一つは、土師器の編年研究に於いて、一括を基軸としながらも複数型式を通じて器形毎の連続的な変遷観を具体的に図示して型式設定を行った最初の型式である点である。もう一つは、連続的な器形の変遷の中で型式設定を行うと言う方法に対して、そもそもどの様な根拠で連続的な変遷の中の特定部分を区切り分割して型式の定立

を行うか、と言った型式概念に対する問題意識の高揚が図られた事である。矢倉台式の提唱については、従来の研究史の中で記述されて来た矢倉台式の定立と言った前者の意味以外に、型式概念の検討を行う素地を形成したと言った後者の意義も認める事が出来る。又、この様な操作の中で形態の連続的変遷観（ある意味での土師器の型式論的配列）の異なったものどうしが共伴すると言った事が注目された。萩原氏がその考古学研究の中で、山内氏等によって提示された視点のみらなず正規の方法も採用していれば、この様な状況は方法論的により高次の問題として検討出来たはずである。即ち、分布論と型式論を根幹とする山内氏等の方法では形態の連続的変遷の異なった段階に位置付けられるもの（型式論的な差異性を持ったもの）が一括として検出される（分布論的同一性を具備する）と言った矛盾に対して、型式論、分布論をそれぞれより高次の段階で適用する事によって認識を高めて行く事が出来たはずであった。例えばそれは、系統を勘案した上での型式論であり、微視的な遺物位置論としての分布論である。そして本来ならばこの中から型式論と編年論の本質的な違いが明瞭に認識されて来るはずであった。これを為し得なかったところに萩原氏の特異な位置があり、正規の方法が欠落した視点のみを採用した考古学の問題があったと考えられる。つまり、奥田氏によって再生されたものはこの様な形態の連続的変遷と言った視点であって、この視点を獲得する過程で山内氏や奥田氏が採用した分布論と型式論に基礎を置いた方法については省みられる事がなかったのである。従って、後に中山氏との論争に於いて自説の補強のために提出した一連の論考（1956年から58年まで）の中で、新たな問題に直面した時の問題解決に関する脆弱さを露呈し、結果的に自説の補強を為し得なかった。ここに1950年代の萩原氏の研究の限界を認める事が出来る。

又、一連の論考を通じて萩原氏は山内氏や奥田氏の先行研究に触れる事がなかった。従って、これらの先行研究と萩原氏の研究の関係が不明であって、萩原氏の先取権をどこに設定するか非常に問題となるところである。

唯、松ノ木中学校や堀之内済美台で今日比企型の坏と呼ばれる一群の赤彩された特異な形態の坏の出土に始めて注目し、鬼高式の後半のメルクマールとしたのは明らかに萩原氏である。従って、後年に岡田淳子氏が中田III編年の中で鬼高式II類のメルクマールとしてこの坏を採用し、東京都西部地域と言った地域限定の中で把握した事は、典拠が示されていないものの萩原氏の論考に端を発する見解であったと考えられる。

萩原氏の論考に対しては、中山氏から反論が為された。それは矢倉台式の認定を巡って、土師器の型式概念を論点として為された反論であった。即ち、そこでは土師器の形態が連続的な変遷をしているが故に原理的に幾つかの段階に分割する事が可能であるが、型式と呼ぶ事の出来る有効な分割単位は大きな飛躍が認められる部分に画されたところであると言う内容であった。具体的には、模倣坏出現の画期を持って和泉式と鬼高式を画すると言う見解であって、矢倉台式を鬼高式の古い部分の中に解消しようと言う事であった。

この様な中で旧版『考古学講座』の中に中山氏や杉原氏の土師器編年が発表された。ここでは、戦間期に山内氏等によって提示され、戦後萩原氏によって再生された形態の連続的変遷と言った視点が見事に中山氏や杉原氏の体系の中に包摂されている。杉原氏によって提示され形骸化しつつあった土師器四型式が、これら先行研究の変遷観を包摂する事によって見事に再生されたのであった。

そしてこの時に、設定から13年経ってようやく真間式と国分式の内容の一部が具体的に明らかにされ、両者の差異化の中で、坏類については糸切り出現以前と糸切りを持ったものと言った、かつて1930年代に奥田氏が古墳時代以降の土師器の大別として提唱していた事が再び取り上げられた。但し杉原氏等によっては奥田氏の論考に依拠していると言った典拠は示されていない。尚且つ、この旧版『考古学講座』の中で取り上げられている遺物のうち幾つかの組み合わせは今日の視点で見る時そこに時期的な齟齬を認める事が出来る。特に古墳時代以降の土師器についてはこの論考によって根本的な編年の見通しを得る事は出来なかった。資料の増加によってもなかなか解決されなかったこの様な誤りは、資料が研究の全てを規定するものではなく、研究者のあり方（方法や視点）が逆に資料の位置付けを制限し、認識を制約し、研究を規定すると言った事を端的に物語っている。一括出土資料に対する認識の欠落は1930年代後半の杉原氏以来の伝統でもあった。土師器の編年研究が進展し土師器編年が周知化して行くにも関わらず分布論や型式論を根幹とした正規の方法が再度取り上げられる事はなかったのである。この意味に於いて、戦後の土師器研究は戦間期に行われた山内氏等の研究に比べて理論的には後退していると言う事が出来よう。そしてこの様な方法に対する無自覚は既成の編年を覚える事から研究を始めた、ある意味では自身の方法が根本的に試されていない、戦後に研究に参入した世代に特有に認められるものであった。この問題はかつて考古学の基礎的な理論の確立を目指す運動の中で指摘された事もあったが、未だ克服されたとは言い難い。

1950年代後半には、多様な各地の編年案の提出とそこでの細分に対して中山氏の反論が行われる事となる。『考古学手帖』に掲載された「土師器小考」は、この様な様々な細別編年案に対して、杉原氏の提唱した土師器四型式の名称、或いは自身も加わって確立した土師器五型式の名称を維持しようとする試みとして理解する事が出来る。又、古墳時代以降の土師器に関する見解の総決算が、この時の模式図の操作の中で行われている。即ち、旧版『考古学講座』の中で真間式として掲載された土器について、坏と甕が持っていた時期差についてこの坏と甕の組み合わせを解体して、相対的に古い様相を示している坏を鬼高式を中心とするIII期の中に移動し、一方で相対的に新しい様相を示している甕をIV期の中に移動した。従って従来真間式として提示されていた土器を分割する事によって標識資料が含んでいた坏と甕の時期差から来る齟齬を解消したのである。そしてこの手続きの正当性の主張の中で真間式の型式としての自立性が否定されたのであった。中山氏による真間式の否定は、旧版『考古学講座』掲載の資料の中での時期的な組み合わせの間違いに対するその解消に直接的な起源を求める事が出来るものである。

1950年代の後半から60年代にかけてはこの様な中山氏の論考と共に岩崎卓也氏の論考が発表される事となる。中山氏と岩崎氏の研究は様々な意味で対称的である。この時期の研究は、それ以前の研究を踏まえてより一層の精緻化を目指す方向を示すものであるが、それ以前の研究に関与していた中山氏は、萩原氏等との論争を通じて確立した見解をより一層先鋭化させる方法で研究を進め、この時期から新規に研究に参入した岩崎氏は、先ず研究史の鳥瞰と整理によって自己の研究の出発点を位置付ける事から始めた。

この時期に岩崎氏が論述した研究史が、今日一般に流布している土師器研究史である。そしてこの中では、何故か1930年代の山内氏や奥田氏の土師器研究には全く触れられる事がなく、杉原氏の

研究から本来的な土師器研究が始まるとされているのである。そして、山内氏等が提示した研究の方法は杉原氏の研究の中にみられる否定的な側面として描き出され、編年研究の限界として捉えられているのである。この様な岩崎氏の研究史の中からは多くの大切な認識が欠落している。例えば岩崎氏は鬼高式の細分については、在来の型式概念では理解しえない土器群が数多く発見された事からいつしか細分されたとしている。しかし鬼高式細分の契機を資料の変化に求めるのは間違いであって、資料と分析者との関係に於いて捉えるべきであり、分析方法の変化にこそ鬼高式細別に関わる大きな意味を認める事が出来るのである。岩崎氏の研究史の記述で閑却された正規の方法の問題は、現在の土師器研究の一般的な方法を規定し、現行の研究を規定するものでもある。

一方では近年、岡田氏も研究史の中で杉原氏の位置付けについて適切さを欠いた見解を発表している。この様な両氏による研究史の記述は多くの問題を含んでおり、両氏の真意を理解しかねる内容となっている。勅使河原氏による学史の中での土師器研究史の位置付けや土師器研究史自体の取り扱いも不正確であり、大きな問題であると言えよう。

以上述べた土師器研究史の中で、比較的初期の段階で山内氏或いは奥田氏の研究の中で獲得された方法や明瞭な指針、そしてこの様な点に立脚した幾つかの視点は戦間期に於いては東京考古学会を中心とする人々によって黙殺され、戦後になってその論点の幾つかは1950年代前半の萩原氏によって再生されて行くと言う奇妙な過程を辿っている。しかしながら、それ以降比較的近年になってから再発見された視点や、未だに意識的に取り扱われる事のない基本原則も存在するのである。前者の視点は近年の廃棄論、集落論、移動論等に認められ、後者に該当する土師器の考古学的取り扱いに関する基本原則は未だに意識的に適用されていないのである。山内氏や奥田氏によって既に1930年代に示されていた基本原則が未だに意識化されていない為、資料が飛躍的に増大した今日に至っても、否、飛躍的に増大したが故に編年研究は益々混迷を深めているのであると言えよう。

研究史の冒頭に山内氏や奥田氏によって具体的な取り扱いの中で示された方法は、型式論的な検討に先立って分布論に中心を置いた検討を行っている点に特徴がある。そして型式論的検討は、必ず分布論的な契機を持った形で展開されているのである。一方の杉原氏の研究に於いては幾つかの型式は設定されたものの、そこでは分布論的検討の契機を欠いた型式論的な操作が行われ既設定型式との考古学的な手法による脈絡を欠いた形で新しい型式が設定されて行くのである。

この様に見て行く時、山内氏等の研究態度は実証主義的研究への埋没といった形で捉えるべきではなく、考古学の方法の確立期にあって森本氏との諸論争、或いはミネルヴァ論争に象徴される幾つかの異なった方法の相克の中から正規の方法が認知されて行く機運の中で、戦間期という時代的背景のもとに確立されつつあった方法論的基盤が再びゆらいで行く事となりこの様な中で基礎的な方法の確立を優先し、この中から誤った戦間期の考古学に歯止めをかけて再び正規の学問を確立して行こうとする態度として認識されるべきであろう。

但し、杉原氏に於いても播布性の概念の提出によって、小林氏を代表とする先験的伝播論に反定立を行った事は明記しておかねばならないであろう。

1960年代以降に行われた研究史の記述の中で忘れ去られていたのが、山内氏や奥田氏の方法であり、今日の土師器型式論研究に大きく欠けている事は、この時失われた分布論的な契機や型式論的

な範疇の相互媒介的な構造を十分に認識する事と、分類操作の結果として定立された範疇に対しては概念化を行う事、の二点である。

研究が既説に対する批判として為されるのは自明の事であり、その具体的な展開の中では先行研究の論理的な基盤の検討は必須である。この様な事が研究史検討の一つの意義であると共に、既に明らかにされたものと、現在残された課題を明瞭にする事も又必要である。学史的、或いは研究史的に既に一度克服された問題について、その忘却によって研究を後退させる事は厳に慎まなければならないと言えよう。

今、この様な土師器の編年研究の歴史を振り返って観る時、従来見過ごされていた重要な問題が幾点か明らかになって来た。

第一は山内氏と奥田氏の研究である。山内氏によってミネルヴァ論争を契機として展開される事になった学史上の一大戦略である日本考古学の組織の確立について、従来は縄紋土器研究、或いは弥生式土器研究の中でのみ考えられていた山内氏による考古学的方法の確立に関わる運動は、土師器研究に於いても奥田氏との協同のもとで積極的に展開されていたのである。そしてこの中で、土師器の編年研究に於ける正規の手続きを踏まえた方法、分類の視点等が明らかにされて行ったのである。山内氏等は土師器研究の中で、分布論的検討、型式論的検討を慎重に行っている。この様な事は、従来の土師器研究史の中では全く触れられなかった事である。

第二に指摘されるのは山内氏等と杉原氏の研究の関係である。山内氏等によって提示された成果は、杉原氏の著明な編年研究の中では触れられる事がなかった。杉原氏は単に編年研究の成果を無視したばかりでなく、同時に提示されていた正規の研究法も研究成果同様等閑に付してしまい、論理的な裏付けを欠いた独自の方法で編年研究を進めて行く事となった。従って杉原氏の研究の中では分布論的検討が大きく欠落している。土師器の編年研究が変則的に展開された根元的な原因は、この様な点にあると考えられる。

第三に指摘されるのは、萩原氏による山内氏や奥田氏の視点の再生である。杉原氏の閉塞的な分類法に対して萩原氏が採用したのは、奥田氏が戦間期に実践した形態の連続的変遷に注目した視点であった。この視点の採用によってはじめて土師器の型式の概念的把握が可能となったのである。萩原氏は住居址からの一括出土遺物を重視し編年研究を進めて行った。萩原氏は奥田氏等の研究と自己の研究の関係について触れていないので、近似的な両者の研究の関係について正確な位置付けが出来ない。唯、萩原氏によって採用されたのは、奥田氏等の提示した分類の視点と同様なものであって、同じく奥田氏等によって提示された分布論と型式論に関わる方法論は採用されていない。萩原氏の編年研究が比較的短命に終わったのはこの為であると考えられる。

第四に指摘されるのは中山氏の分類の視点である。これまでの経緯から見て中山氏が研究史的に継承したものの内、型式名は杉原氏提唱のものであったが、分類の視点については、山内－奥田－萩原と系統的に続くそれであった。

第五に指摘されるのは、岩崎氏によって展開された、研究史の記述の中での杉原氏の研究を土師器研究の嚆矢と位置付ける運動である。この岩崎氏の一連の研究史の記述の中では山内氏等の研究については全く触れられておらず、岩崎氏の記述した研究史が土師器研究史の標準となる事によっ

て本来の研究史が隠ぺいされてしまった。これは単に研究史の記述の問題にとどるものではない。一度学史的に獲得されたはずの正規の方法さえも、研究者の目から隔されてしまったのである。

研究史の取り扱いは自由である。一連の研究の中から視点を変える事によって様々な事柄を読み取る事が出来る。ここに述べた見方も筆者の穿ち過ぎであると思われるかも知れない。しかし土師器編年研究の現状を先史考古学の編年研究と率直に比較した時、絶えず歴史づいてしまう性癖のある土師器研究者はそこからまだ多くの基礎的操作の方法を学び取らなければならないと言えよう。

筆者は遺物に対する様々な取り扱い方について、その方法の適応範囲と各方法の関係について興味を持って来た。住居址覆土から出土する遺物の履歴復元について（大屋 1986,3） や、住居址一括出土遺物の分布論的取り扱いと型式論的取り扱いの関係の基に遺物の出土状態論のあり方について（大屋 1988,3） 、或いは、分布論、型式論、編年論の関係について（大屋 1989,5） 等、断片的に検討して来た。小論は、今回土師器坏のある系統のものを型式論的に検討して行く個別研究の過程で、研究史の前史部分として企画したものであった（本文第４章の原型がこれにあたる）。しかしながら端緒の部分で予定の紙数を遙かに超過し、やむなくこの部分について主題を改訂し独立増補し、以て一編と為したものである。従って、研究史の一部に言及したものであるが、方法論的視点に重心を置いて見て来た。尚、別途発表の小論を併読頂きたい。

戦後の研究の中で重要な位置を占め、平出に象徴される玉口時雄氏や、小出義治氏、桜井清彦氏等の諸研究と、研究史の中での位置について触れる事が出来なかった。又、五領式の設定も同様である。これについては適当な機会を待って別途考察し補足としたい。

又、この様な研究史的背景の基に、1960年代後半に岡田氏によって中田遺跡の三冊の報文が公にされるのであるが、中田報文の既述研究史の中での位置付けと中田以降の研究に及ぼした影響についての検討も後の課題としたい。

謝辞

本稿作成にあたっては、大塚達朗、鈴木徳雄、両氏の指導を受けた。

文献等について、飯塚博和、池田敏宏、磯崎　一、犬木　努、今井正文、岡本東三、織笠明子、織笠　昭、桐生直彦、剱持和夫、小久保徹、近藤英夫、笹森紀巳子、笹森健一、塩野　博、重住豊、関根孝夫、田尾誠敏、高橋一夫、土井義夫、利根川章彦、中沢道彦、橋本富夫、林　徹、坂野和信、毒島正明、前地ひろみ、峰村篤、水口由紀子、宮龍交二、村田章人、守屋薫、吉川國男、領塚正浩、の各氏から援助を受けた（敬称略・五十音順）。

資料等について、市川市立考古博物館、東京大学考古学研究室、東海大学考古学研究室、桶川市東部遺跡群調査会、群馬県埋蔵文化財調査事業団、東海大学考古学研究会、日本大学考古学研究室、の各機関等からも、援助を受けた。

特に、本稿の端緒から脱稿に至るまでのあいだ、早坂広人氏から多くの教示や問題提起を受けた。

図表出典一覧

第1図　森本1926,6 より転載
第2図　八幡1929,2 より転載
第3図　筆者作成
第4図　奥田1935,7　より転載
第5図　奥田1936,8　より転載
第6図　奥田1935,7　より転載
第7図　奥田1936,12 より転載
第8図　八幡1934,9　より転載
第9図　杉原1938,11 より転載
第10図　杉原1938,11 より操作
第11図　藤森1939,11 より操作
第12図　寺内1939,11 より操作
第13図　杉原1940,5　より転載
第14図　筆者作成
第15図　藤森1939,11 より操作
第16図　萩原1952,12 より転載
第17図　萩原1953,4　より転載
第18図　萩原1953,12 より転載
第19図　萩原1954,7　より転載
第20図　同上
第21図　同上
第22図　中山1954,12 より転載
第23図　杉原他1955,7より転載
第24図　同上
第25図　同上
第26図　杉原他1955,7より操作
第27図　杉原他1955,7より転載
第28図　同上
第29図　萩原1956,2　より転載
第30図　萩原1956,6　より転載
第31図　萩原1958,12 より転載
第32図　中山1958,10 より転載
第33図　杉原他1955,7及び
　　中山1958,10 より操作
第34図　筆者作成

表1　筆者作成
表2　山内1932,12より作成
表3　山内1939,12より作成
表4　同上
表5　奥田1936,3 より作成
表6　筆者作成
表7　奥田1936,5 より作成
表8　筆者作成
表9　杉原1935,7 より作成
表10　杉原1938,11より作成
表11　a,山内1932,12より作成
　　b,山内1939,12より作成
　　c,杉原1938,11より作成
表12　萩原1954,7 より作成
表13　萩原1956,2 より作成
表14　中山1958,10より作成
表15　杉原1939,4 より作成
表16　杉原1940,7 より作成
表17　杉原1942,7 より作成
表18　杉原1943,12より作成

付記

- 引用文中の漢字については、日本語ワードプロセッサーと電算写植の関係で大部分を新字に置き換えた。
- 引用文は原則として「」でくくり、長い場合は「」を用いず段落としをした。書体も本文とは異なるものを用いた。
- 発行年代や文献の指示も本文とは異なる書体を用いた。
- 文献の発行年月日は該当文献の奥付に依拠している。従って、奥付に適切な記載が為されていない場合には発行年月日は不正確になっている。
- 図版の転載にあたってはレイアウトの都合上、全てを原図と異なる縮尺で用いている。この際縮尺の数値は不統一であり明記していない。
- 尚、本稿に関わる不明の点、或いは事実誤認等については筆者まで御指摘をお願いしたい。

参考引用文献（発行年月順）

高橋健自　1919,12　『古墳発見石製模造器具の研究』帝室博物館学報第一冊　帝室博物館

小松真一　1924,11　「金滓を出だす竪穴遺跡」『人類学雑誌』39巻 7･8･9合併号　東京人類学会

森本六爾　1926,6　「武蔵国荏原郡馬込村の一横穴」『考古学雑誌』16巻6号　考古学会

森本六爾他　1926,10　「武蔵国荏原郡調布村の遺跡」『考古学雑誌』16巻10号　考古学会

八幡一郎　1929,2　「武蔵川口村発見の一甕」『人類学雑誌』44巻2号　東京人類学会

杉原荘介　1932,4　「下総東葛飾郡国分村須和田弥生式遺跡研究摘要」（上）『武蔵野』18巻4号　武蔵野会

杉原荘介　1932,6　「下総東葛飾郡国分村須和田弥生式遺跡研究摘要」（下）『武蔵野』18巻6号　武蔵野会

山内清男　1932,10　「日本遠古之文化」四『ドルメン』1巻7号（十月号）　岡書院

山内清男　1932,11　「日本遠古之文化」五『ドルメン』1巻8号（十一月号）　岡書院

山内清男　1932,12　「日本遠古之文化」六『ドルメン』1巻9号（十二月号）　岡書院

森本六爾　1933,1　「東日本の縄紋式時代に於ける弥生式並に祝部式系文化の要素摘出の問題」『考古学』4巻1号

山内清男　1933,2　「日本遠古之文化」七『ドルメン』（二月号）　岡書院

八幡一郎　1934,9　「下総国須和田の弥生式土器」『人類学雑誌』49巻9号　東京人類学会

森本六爾　1934,10　「下総須和田の土器について」『人類学雑誌』49巻10号　東京人類学会

小林行雄　1935,1　「小型丸底土器小考」『考古学』6巻1号　東京考古学会

山内清男　1935,2　「新著」『人類学雑誌』50巻2号　東京人類学会　【八幡一郎著の『北佐久郡の考古学的調査』に関する書評】

森本六爾　1935,5　『考古学』歴史教育講座　第二部資料篇46　四海書房

森本六爾　1935,6　「弥生式文化」『ドルメン』4巻6号　岡書院

杉原荘介　1935,6　東京人類学会第488回例会講演「下総須和田遺跡の調査を終りて」

杉原荘介　1935,7　「会報」『人類学雑誌』50巻7号　東京人類学会

杉原荘介　1935,7　「上総宮ノ台遺跡調査概報」『考古学』6巻7号　東京考古学会

奥田直栄　1935,7　「中野区川嶋発見の原史時代竪穴」（予報）『ドルメン』4巻7号　岡書院

山内清男　1935,12　原始文化研究会12月例会発表「土師器の二大別」

杉原荘介　1936,1　「相模小田原出土の弥生式土器に就て」『人類学雑誌』51巻1号　東京人類学会

後藤守一他　1936,2　「座談会　日本石器時代文化の源流と下限を語る」『ミネルヴァ』創刊号　翰林書房

杉原荘介　1936,2　「須和田遺跡に於ける考古学的調査の意義に就いて」『考古学』7巻1，2号　東京考古学会

奥田直栄　1936,3　「空堀らしき溝を持つ竪穴住居遺跡」『ミネルヴァ』三月号　翰林書房

杉原荘介　1936,4　「相模小田原出土の弥生式土器に就いての補遺」『人類学雑誌』51巻4号　東京人類学会
山内清男　1936,5　「日本考古学の秩序」『ミネルヴァ』五月号　翰林書房
奥田直栄　1936,5　「古墳時代の聚落」『ミネルヴァ』五月号　翰林書房
三須田浩　1936,8　「東京市内で発掘された古代住居址」『ミネルヴァ』七・八月合併号　翰林書房
奥田直栄　1936,8　「東京市西部に於ける古墳時代末期集落の規模」（一）『ミネルヴァ』　七・八月合併号　翰林書房
奥田直栄　1936,9　「東京市西部に於ける古墳時代末期集落の規模」（二）『ミネルヴァ』　九月号　翰林書房
喜田貞吉他　1936,9　「北海道・千島・樺太の古代文化を検討する（二）」『ミネルヴァ』　九月号　翰林書房
奥田直栄　1936,12　「東京市西部に於ける古墳時代末期集落の規模」（三）『ミネルヴァ』　十二月号　翰林書房
杉原荘介　1937,2　「須和田遺跡に於て行ひたる竪穴住居趾の発掘方法」『考古学』8巻2号　東京考古学会
杉原荘介他　1937,6　東京人類学会第508回例会講演「市川市鬼高の原史時代遺跡に就いて－杭上住居の疑ひのある遺跡－」
杉原荘介　1937,7　「会報」『人類学雑誌』52巻7号　東京人類学会
和島誠一　1938,9　「東京市内志村に於ける原史時代竪穴の調査予報」『考古学雑誌』28巻9号
小林行雄他　1938,10　『大和に於ける土師器住居址の新例」『考古学』9巻10号　東京考古学会
杉原荘介他　1938,11　「下総鬼高遺跡調査概報」『人類学雑誌』53巻11号　東京人類学会
杉原荘介　1939,1　東京考古学会第一回総会／研究発表会　「南関東と中心とせる土師部祝部土器の諸問題」【貝塚第六号参照】
杉原荘介　1939,4　「南関東と中心とせる土師部祝部土器の諸問題」『考古学』　10巻4号　東京考古学会
和島誠一　1939,7　「原史時代部会の須和田遺跡見学」『貝塚』11号　東京考古学会
杉原荘介　1939,10　「北関東後期弥生式文化に就いて」『考古学』10巻10号　東京考古学会
杉原荘介他　1939,10　「高崎市附近の弥生式遺跡」『考古学』10巻10号　東京考古学会
杉原荘介　1939,10　「上野・樽遺跡調査概報」『考古学』10巻10号　東京考古学会
寺内武夫他　1939,11　「下野中原遺跡調査概報　－第2回－」『考古学』10巻11号　東京考古学会
藤森栄一　1939,11　「信濃下蟹河原に於ける土師器の一様式」『考古学』10巻11号　東京考古学会
山内清男　1939,12　「日本遠古の文化」補註　『日本遠古の文化』補註付・新版　先史考古学会
杉原荘介　1940,1　「武蔵前野町遺跡調査概報」『考古学』11巻1号　東京考古学会
杉原荘介　1940,3　「武蔵久ヶ原出土の弥生式土器に就いて」『考古学』11巻3号　東京考古学

会
S・J　1940,3　「「人類学・先史学の用語に関する座談会」に出席して」『貝塚』17号　東京考古学会
杉原荘介他　1940,5　「武蔵和泉遺跡調査概報」『考古学』11巻5号　東京考古学会
杉原荘介　1940,7　「武蔵弥生町出土の弥生式土器に就いて」『考古学』11巻7号　東京考古学会
杉原荘介　1941,2　「弥生式文化研究上の二三の問題」『古代文化』12巻2号　日本古代文化学会
杉原荘介　1941,4　「日本古代文化に於ける播布性に就いて」『古代文化』12巻4号　日本古代文化学会
藤森栄一　1941,11　「『天手抉』の発展経過に就て」『古代文化』12巻11号　日本古代文化学会
杉原荘介　1942,3　「考古学的方法に於ける型式に就いて」『古代文化』13巻3号　日本古代文化学会
杉原荘介　1942,3　東京考古学会東京支部例会発表「伊予阿方・片山及び中寺遺跡の調査－弥生式文化瀬戸内東漸説への反省－」【古代文化13巻3号扉の例会通知参照】
杉原荘介　1942,7　「上総宮ノ台遺跡調査概報－補遺－」『古代文化』13巻7号　日本古代文化学会
杉原荘介　1942,10　「古代遺物研究に於ける形態に就いて」『古代文化』13巻10号　日本古代文化学会
杉原荘介　1943,8　「原史時代文化に於ける様相に就いて」『古代文化』14巻8号　日本古代文化学会
杉原荘介　1943,10　「縄紋式文化研究上の二三の問題」『古代文化』14巻10号　日本古代文化学会
杉原荘介　1943,12　『原史学序論』（初版）　葦牙書房
杉原荘介　1946,12　『原史学序論』（再版）　葦牙書房
杉原荘介　1949,5　「伊予阿方遺跡・片山遺跡調査概報」『考古学集刊』1巻2号　東京考古学会
小出義治　1950,6　「山梨県日下部中学校々庭集落遺跡概報」『上代文化』19集　国学院大学考古学会
萩原弘道　1951,5　「都内杉並区方南町峯に於ける竪穴群概報」『上代文化』20集　国学院大学考古学会
萩原弘道　1952,12　「上代集落の形態」『西郊文化』2集　杉並区史編纂委員会
萩原弘道　1952,12　「銚子市松岸町原史時代遺跡に就いて」『上代文化』23集　国学院大学考古学会
萩原弘道　1953,4　「杉並区松ノ木中学校々庭の土師式竪穴遺構」『西郊文化』　3集　杉並区史編纂委員会

萩原弘道　1953,9　「杉並区済美台発見の集落環溝址」『西郊文化』5集　杉並区史編纂委員会
萩原弘道　1953,12　「杉並区堀之内済美台土師式住居址調査報告」『西郊文化』6集　杉並区史編纂委員会
萩原弘道　1954,7　「土師式文化前期に對する一考察」『西郊文化』8号　杉並区史編纂委員会
中山淳子　1954,12　「中野富士見台遺跡の小さな結果」『西郊文化』10号　西郊文化研究会
小出義治他　1955,2　『平出』朝日新聞社
玉口時雄他　1955,3　『落合』新宿区役所
杉原荘介他　1955,7　「土師器」旧版『日本考古学講座』5巻　河出書房
滝口　宏　1955,5　「市川市須和田奈良時代遺跡」『古代』14・15合併号　早稲田大学考古学会
萩原弘道　1956,2　「土師器とその文化」『西郊文化』12・13合併号　西郊文化研究会
萩原弘道他　1956,6　「銚子市松岸遺跡の土師器」『西郊文化』第14集　西郊文化研究会
髙橋　護　1958,6　「土師器研究に対する疑問」『考古学手帖』2号　塚田　光
萩原弘道　1958,6　「末期弥生式土器と古式土師器の関係」『上代文化』28集　国学院大学考古学会
中山淳子　1958,10　「土師器小考」『考古学手帖』4号　塚田　光
萩原弘道他　1958,12　「東京都杉並区向井町遺跡調査概報」『西郊文化』17集　西郊文化研究会
岩井　清　1959,9　「府中市片町及び新宿の二遺跡について」『西郊文化』18集　西郊文化研究会
高本康生　1959,10　「土師器研究略史(一)」『若木考古』55号　国学院大学考古学会
小出義治　1959,2　「土師雑考」『國學院雑誌』60巻2号　国学院大学
高本康生　1960,2　「土師器研究略史(二)」『若木考古』56号　国学院大学考古学会
岩崎卓也　1961,3　「土師器研究上の諸問題(Ⅰ)」『大塚考古』3号　東京教育大学考古学研究会
岩崎卓也　1963,1　「古式土師器考」『考古学雑誌』48巻3号　日本考古学会
岩崎卓也　1963,4　「土師器研究上の諸問題(Ⅱ)」『大塚考古』4　東京教育大学考古学研究会
岩崎卓也　1964,3　「土師器の編年」『歴史教育』12巻3号　日本書院
岩崎卓也　1964,3　「東日本における土師器の研究」『史学研究』46号　東京教育大学文学部
岩崎卓也　1964,9　「土師器研究上の諸問題(Ⅲ)」『大塚考古』5号　大塚考古学会
倉田芳郎　1965,1　「南関東における住居址出土の土師器」『考古学雑誌』50巻3号 日本考古学会
岡田淳子他　1967,3　『八王子中田遺跡』資料編Ⅰ　八王子市中田遺跡調査会
岩崎卓也　1967,4　「真間式土器小考」『大塚考古』8号　大塚考古学会
岡田淳子他　1967,11　『八王子中田遺跡』資料編Ⅱ　八王子市中田遺跡調査会
岡田淳子他　1968,3　「土師器の編年に関する試論」『八王子中田遺跡　資料編』Ⅲ　八王子市中田遺跡調査会（東京都　八王子市）
玉口時雄　1970,2　「土師器」新版『日本考古学講座』5号　雄山閣出版

岩崎卓也　1973,3　「古式土師器再考」『史学研究』91号　東京教育大学文学部
星野達雄　1981,3　「原史学方法論と南関東弥生式土器編年図式の成立過程」『法政史論』法政大学大学院日本史学
岡田淳子　1984,12　「杉原荘介の土師研究」『考古学者・杉原荘介』明治大学考古学研究室
大屋道則　1986,3　「住居埋没過程の検討」『橋ノ入遺跡』II　児玉町教育委員会
森岡秀人　1987,9　「弥生時代の時期区分原理について」『考古学研究』34巻2号　考古学研究会（岡山）
大屋道則　1988,3　「出土遺物からみた一括遺物の同時性」『真鏡寺後遺跡』II　児玉町教育委員会
勅使河原彰　1988,10　『日本考古学史』東京大学出版会
大屋道則　1989,5　「相模型坏の成立過程」『土曜考古』14号　土曜考古学研究会

追記

1、　『日本考古学選集』21巻の後書きの中で、佐藤達夫氏は「このささやかな紹介が、今後興るであろう”山内先生の学問”に対する研究にとって、一つの契機ともなることができるならば、これに過ぎる幸せはない。」（1974,6 p241c2ℓ11～14）と述べている。この様な山内氏の研究は、周知されている縄文土器についてのもののみならず土師器に於いても同様であって、現在までに忘却されてしまった研究の本質を改めて問直す事が必要である。

2、　本稿の校正中に、阿佐ヶ谷先史学研究会の3月例会（1990年3月24日）で岡本東三氏によって「ある一通の趣意書をめぐって」ー戦前の考古学の動向ーと題した発表が行われた。筆者もこれに参加する機会を得て、この席上で戦間期、或いは戦後の学会状況について多くの知見を得る事が出来た。

3、　本稿での”戦間期”の用法は、およそ、満州事変からポツダム宣言受諾までの時期を指している。

4、　近年、研究史或いは学史の検討が比較的活発に行われる様になって来た。将来、学史的には”平成の考古学”或いは”90年代の考古学”の一つの特色として取り扱われる事となるのであろうか。いずれにしてもこれらの研究は、その現象形態の近似度に比して目的とするところや方法、視座や射程が多様である事を特徴としている。従って、研究史のあり方や学史研究そのものについてのあり方の検討も、必要になって来ていると言えよう。この様な中で1990年代の”世紀末の考古学”は、一方では”考古学の世紀末的形態”に容易に転化するものである事に注意しなければならない。

5、　人名を引用する場合、研究者に旧姓がある時の呼称法については、原則として改姓以前の論考や或いはそれについて触れた脈絡の中では旧姓を用い、改姓後のそれについては、新しい姓を用いて表している。

付録　研究年表（文献を中心とした抜粋）

小松24.11 金沢

森本26.6 馬込横穴

考古学研究会創立 27.7

八幡29.2 武蔵川口

東京考古学会に改称 29.11

雑誌『考古学』創刊 30.1

森本六爾渡仏 31.4

31.9 満州事変

杉原32.4 須和田上

森本六爾帰日 32.3

杉原32.6 須和田下

山内32.11 遺古五
山内32.12 遺古六

森本33.1 墨素摘出

山内33.2 遺古七

34.　山内東京へ帰
原始文化研究会創立

八幡34.9 須和弥生
森本34.10 須和田上

小林35.1 小型丸底

山内35.2 八幡書評

森本35.5 歴教講座
森本35.6 弥生文化
杉原35.6 人類講演
杉原35.7 会報記事
杉原35.7 宮ノ台

奥田35.7 川崎予報
山内35.12 原研発表

森本六爾病没 36.1

杉原36.1 小田原

36.2 日本石器時代文化の源流と下限を語る

杉原36.2 須和口

奥田36.3 空堀

日本石器時代の終末期について 36.4

杉原36.4 小田原補

36.5 日本考古学の秩序

奥田36.5 原落

「あばた」も「えくぼ」・「えくぼ」も「あばた」36.6

三須36.8 東京住居

36.8 考古学の正道

奥田36.8 西部一

奥田36.9 西部二
奥田36.12 西部三

37.　原始文化研究会を
先史考古学会と改称

杉原37.2 発掘法須
杉原37.5 人類講先
杉原37.7 会報記事

和島38.9 志村

小林38.10 大和古墳
杉原38.11 鬼高概報

東京考古学会第1回総会 39.1

杉原39.1 東総発南
杉原39.4 南関東 → 杉原編年表Ⅰ
杉原39.10 北陸弥
杉原39.10 高崎市
杉原39.10 博概報
寺内39.11 下野中原
藤森39.11 下野中原

山内39.12 遺古補註

杉原40.1 前野町
杉原40.3 久ケ原
杉原40.5 和泉
杉原40.7 弥生町 → 杉原編年表Ⅱ

杉原41.2 弥二三
杉原41.4 撚布性
藤森41.11 天手扶

41.12 真珠湾攻撃

杉原42.3 東亜反省
杉原42.3 型式
杉原42.7 宮台補
杉原42.10 形態 → 杉原編年表Ⅲ

杉原43.8 検相
杉原43.10 鵜二三
杉原43.12 原史学初 → 杉原編年表Ⅳ

45.8 ポツダム宣言受諾

杉原46.12 原史学再

小山50.6 日下部

萩原51.5 方形町峯

萩原52.12 松岸町
萩原52.12 集落形態

萩原53.4 松ノ木
萩原53.9 杉並横溝
萩原53.12 済美台

萩原54.7 前期考察

中山54.12 富士見

小出55.2 平出
玉口55.3 落合

杉原55.7 土師器　小出55　伊東市史　滝山55.5 須和田

萩原56.2 その文化
萩原56.6 鉄子松岸

萩原58.6 弥土関係
萩原58.12 杉並向井

中山58.10 土師器小

高橋58.6 土師疑問

小出59.2 土師雑考
高本59.10 略史(一)

高本60.2 略史(二)

岩崎61.3 諸問題Ⅰ

岩崎63.1 古式土師

岩崎63.4 諸問題Ⅱ

岩崎64.3 土師編年
岩崎64.3 東日本研
岩崎64.9 諸問題Ⅲ

倉田65.1 南関東

岡田67.3 中田Ⅰ

岩崎67.4 寅岡小考

岡田67.11 中田Ⅱ

岡田68.3 中田Ⅲ

研究紀要　第7号

1990

平成2年3月25日　印　刷

平成2年3月31日　発　行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01　大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493—39—3955

印　刷　望月印刷株式会社